

山梨県
大月市

大月遺跡

(I)

県立都留高等学校校舎改築に伴う
第一次発掘調査報告書

山梨県教育委員会

山梨県
大月市

大月遺跡 (I)

県立都留高等学校校舎改築に伴う
第一次発掘調査報告書

山梨県教育委員会



第1号住居址

序

県では生徒の増加と校舎の老朽化に伴い、高校整備五ヶ年計画を昨年から実施しておりますが、都留高等学校もこの例にもれず、昨年度から三ヶ年計画で旧校舎等施設の増改築を行っております。

大月市は富士山麓に源をもつ桂川によって出来た河岸段丘上等に発展した人口約四万人の市であります。中部山岳地帯西部という地理的位置は関東平野と中部地方を結ぶ接点にあり、両地方の文化、経済が入り混じっているところで、現在では甲州街道と中央本線が通過しており、その交流の役目を果たしております。

このような山間部峡谷では人間が居住する空間は河岸段丘のような地域にその範囲が限定され、大月遺跡でもやはり、この報告書に示すように縄文時代から奈良、平安時代を経て現代まで一貫して、この地に集落が形成されております。

都留高等学校敷地はこのような地理的環境にあるため、増改築工事に伴って発掘調査を行い、記録保存することにいたしました。幸いにして各方面からご協力をいただき発掘担当者に平松・田代両先生をお願いすることが出来、発掘調査には都留文化大学考古学研究会、日本大学学生、湯山工務店など多くの方に参加していただき、また都留高等学校、大月市教育委員会、大月市史編纂室にもご協力をいただき、綿密でしかもスムーズに調査を行うことが出来ました。ここに記して謝意を表する次第であります。

昭和五十二年三月

山梨県教育長

丸 茂 高 男

凡例

- 一、本書は山梨県立都留高等学校の第一次校舎改築に伴う考古学的調査報告（一九七六）である。
- 二、本書の構成は、第一章・序説、第二章・縄文時代、第三章・歴史時代、第四章・その他、第五章・総括とした。
- 三、本書で扱った固有名詞、ことに氏名も敬称を略し、配列は五十音順とした。
- 四、本書の執筆は、佐々木克典、末木健、田代孝、奈良泰史、野中和夫、平松康毅で行なった。
- 五、本書の構成、編集については平松が立案し、それを全執筆者に計った。最終的な編集、校正は田代、平松、森が共同で行った。

2	第2号住居址……………	(田代)	49
3	各地区出土の土器・石器……………	(同)	53
第三章 歴史時代……………			
1	第3号住居址……………	(野中・平松)	61
2	第4号住居址……………	(平松)	68
第四章 その他……………			
1	土壙と粘土塊……………	(平松)	73
2	特殊攪乱……………	(同)	75
第五章 総括……………			
1	大月遺跡の時代と問題点……………	(平松)	77
2	大月遺跡調査の意義……………	(同)	78

挿図目次

第一図	大月遺跡付近地形図	3
第二図	大月遺跡周辺の遺跡分布図	6
第三図	大月市各遺跡の出土土器	9
第四図	都留市各遺跡の出土土器 (1)	10
第五図	都留市各遺跡の出土土器 (2)	11
第六図	大月遺跡の出土土器	17
第七図	大月遺跡調査地区層序図	28
第八図	大月遺跡発掘地区設定図	30
第九図	大月遺跡遺構分布図	33
第二〇図	大月遺跡第1号住居址面上層序図	35
第二一図	大月遺跡調査地区層序	36
第二二図	大月遺跡第1号住居址原位置 (土器) 実測図	37
第二三図	大月遺跡第1号住居址原位置 (石器) 実測図	39
第二四図	大月遺跡第1号住居址平面実測図	44
第二七図	大月遺跡第1号住居址出土石器実測図	48

第二四图	大月遺跡第1号住居址平面实测图	40
第二五图	大月遺跡第1号住居址出土土器实测图	43
第二六图	大月遺跡第2号住居址平面实测图	49
第二九图	大月遺跡第2号住居址出土土器实测图	50
第三〇图	大月遺跡第2号住居址出土土器实测图	51
第三二图	大月遺跡第2号住居址出土石器实测图	52
第三三图	大月遺跡各地区出土土器实测图(1)	54
第三四图	大月遺跡各地区出土土器实测图(2)	55
第三五图	大月遺跡各地区出土土器实测图(3)	56
第三六图	大月遺跡各地区出土土器实测图(4)	57
第三七图	大月遺跡各地区出土土器实测图(5)	58
第三八图	大月遺跡各地区出土・表面採集石器实测图	59
第三九图	大月遺跡第3号住居址面上層序实测图	61
第四〇图	大月遺跡第3号住居址遺物原位置图	62
第四一图	大月遺跡第3号住居址平面实测图	63
第四二图	大月遺跡第3号住居址カマド拡大图	64
第四三图	大月遺跡第3号住居址出土土器实测图	66
第四四图	大月遺跡第3号住居址出土鉄製品实测图	67

第三四图	大月遺跡第4号住居址面上層序実測図	68
第三三图	大月遺跡第4号住居址原位置実測図	69
第三二图	大月遺跡第4号住居址平面図	70
第三一图	大月遺跡第4号住居址出土土器実測図	71
第三〇图	大月遺跡第4号住居址出土鉄製品実測図	72
第二九图	大月遺跡土壙・粘土塊実測図(1)	73
第二八图	大月遺跡土壙実測図(2)	74
第二七图	大月遺跡土壙実測図(3)	74
第二六图	大月遺跡特殊攪乱実測図	75

表 目 次

第一表	大月市・都留市遺跡地名	7
第二表	発掘調査進行表	21
第三表	大月遺跡調査地区ボーリング地質柱状	27
第四表	大月遺跡調査地区垂直的層序表	28
第五表	大月遺跡第1号住居址柱穴深度一覽表	43

圖版目次

卷頭圖版	大月遺跡第1号住居址	(1)
第一圖版	大月遺跡遠影・近影	85
第二圖版	大月遺跡發掘区全影(1・2)	86
第三圖版	大月遺跡各遺構層序(1・2)	87
第四圖版	大月遺跡各遺構層序(3・4)	88
第五圖版	大月遺跡第1号住居址(1・2)	89
第六圖版	大月遺跡第1号住居址埋甕出土狀況(1・2)	90
第七圖版	大月遺跡第1号住居址土器出土狀況(1・2・3・4)	91
第八圖版	大月遺跡第1号住居址出土土器	93
第九圖版	大月遺跡第2号住居址(1・2)	94
第二〇圖版	大月遺跡第2号住居址、各地区出土土器	95
第二一圖版	大月遺跡各地区出土土器(1)	96
第二二圖版	大月遺跡各地区出土土器(2)	97
第二三圖版	大月遺跡第1・2号住居址出土土器	98
第二四圖版	大月遺跡各地区出土土器	99

第五図版	大月遺跡第3号住居址(1・2).....	100
第六図版	大月遺跡第3号住居址カマド・出土遺物.....	101
第七図版	大月遺跡第4号住居址遺物出土状況・遺物.....	102
第八図版	大月遺跡第4号住居址出土遺物.....	103
第九図版	土壙・(1・2).....	104
○発掘発加者.....	105

第一章 序 説

諸 言

中部地方は、いわゆるフォッサマグナ上にまたがっていて、北東日本と南西日本を分ける接点にあたっている。そのような地質構造の在り方と関係があるかどうかは別として、たとえば、方言の分布などからみると、やはり東日本のなものと西日本のなものととの中間地帯をなすことが指摘されている。とすれば、人間社会の形成の過程においても、いわば文化伝播の十字路としてルツボと化したに違いない。ある年代には東からまたある時期には西からの影響をさまざまに受容しつつ、その複雑な経緯のなかに独特な文化をうみだしていったと勘案される。

果たせるかな、縄文時代早期終末の段階には、はやくも接触地帯としての様相を帯びることが知られている。かかる現象は、時に程度の差はあれ、その後の中部地方の歴史と有機的にかかわってきたという見通しをたてるに十分な証左となろう。

勿論、地方色の発揚された時代はあつた。縄文時代中期もその例にもれないものである。この時代の初頭から中葉にかけて製作・使用された縄文土器は、いわば東日本的なありかたのなかで、個性を顕著に打出した——ついでにいうと、日本海沿岸地帯から中部山岳地帯を経て太平洋沿岸地帯にまたがる地理的跛行性は、そのまま文化の相対的独立性を強く示した——といわれている。このようなローカルカラーの発揚は、その後の長い歴史の流れのなかで幾度もくりかえされたに違いない。

それはともかく、大月遺跡の立地する大月市は、文字通り山岳地帯の一翼を担う山梨県の東部に位置している。このことは当該地域における歴史的遺産と、それら文化遺産をうむにいたった背景——とりわけ文化の伝播経路を検索するうえで留意し

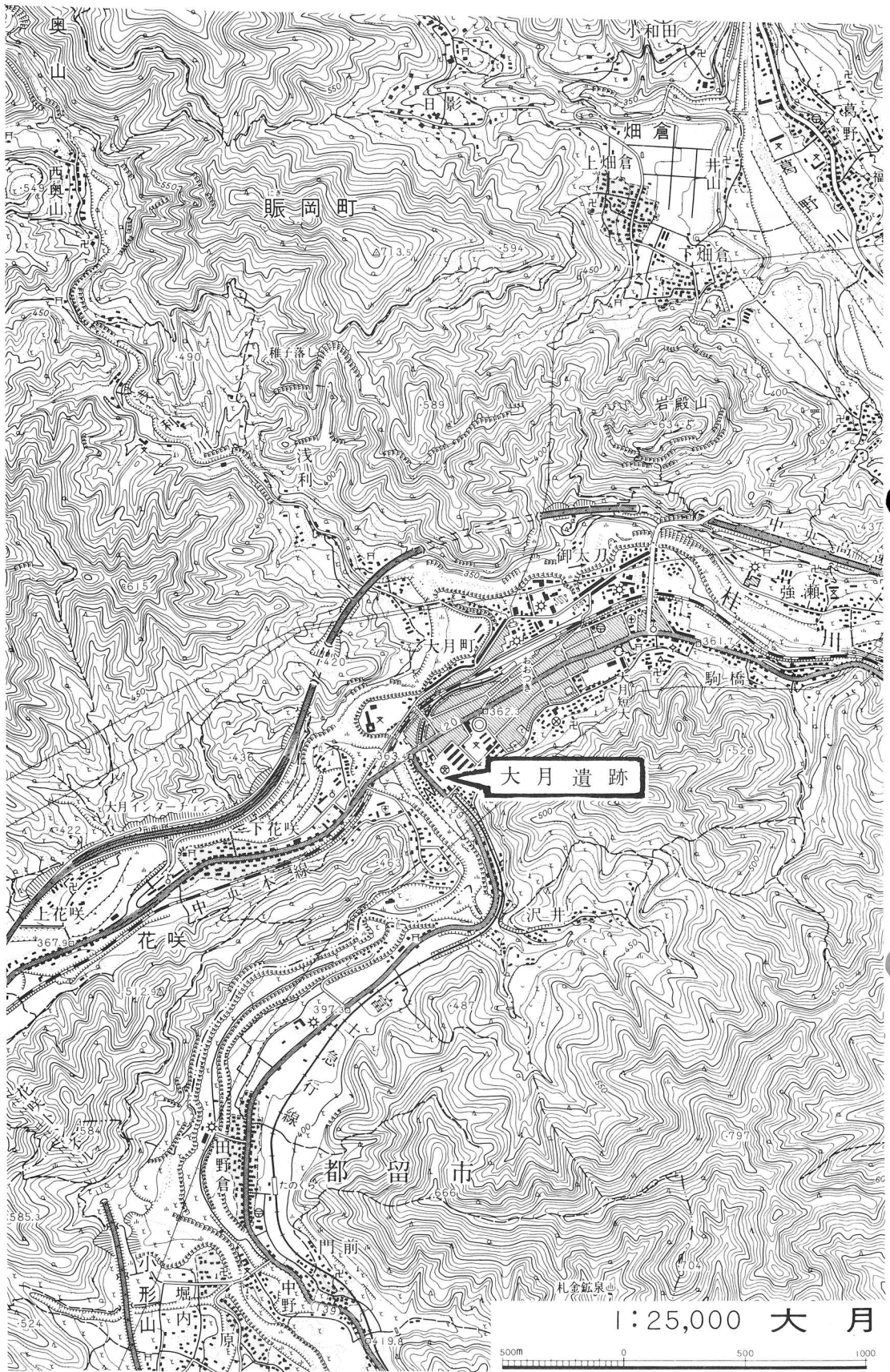
ておく必要がある。なぜなら、山また山に囲まれた複雑きわまりない山梨県の地形は、現在でもややもすれば住民の生活を規制しているけれども、そうした問題は考古学的解釈のなされる悠遠の時代にあってもある程度は認めざるを得ない問題だからである。事実、既知の考古学資料——ことに土器を比較研究してみると、県下の東と西では製作技術に相違いがある。

この意味で大月遺跡の考古学的調査に従事できたわれわれ発掘者は、四六時中とはいわないまでも、目的意識を持ってこれにあたったつもりである。しかも調査は、一棟の校舎改築敷地内という限定された範囲であったがために、出来るかぎり万全を期すことを念頭におき、かつまた能率的に行なうよう努力した。調査にのぞみ、あるいはその過程において、われわれの課題としたところは枚挙にいとまないけれども、それらのいちいちを披瀝していたのではくだくだしくなるので、ここではただ一点についてのみふれておきたい。

すなわち、それは緊急調査ならではの悩みであるけれども、遺構に直面した場合は、その大小にかかわらず、全貌を明らかにしたいという希求もそのひとつであった。後述するように、今回の調査では図らずも都合四軒の住居址を発見することに成功した(その他の遺構もあった)。しかも、このうちの三軒は、腕のふるいがないのあるような代物と判断された。が、これらの住居址は三軒が三軒調査区域とその埒外に——あまつさえ、一軒の住居址は八ヶ九割方が埒外に——またがっていることが予測された。このことを県教育委員会に報告した時、多少の紆余曲折があるにはあったが、いずれにしても発掘を途中で放棄するようなことはせずにすんだ。要するに、調査が緊急調査であったにもかかわらず、県教委ではわれわれ発掘者の心中を汲んでいただけたことにはかならない。この際、発掘者を代表して一言お礼を申し上げる次第である。(平松康毅)

参考文献

- 永峰光一…縄文文化の発展と地域性——中部(日本の考古学II 縄文時代)河出書房新社 昭和四〇年
- 久永春男…縄文後期文化——中部地方(新版考古学講座3 先史文化)雄山閣 昭和四四年



1 大月遺跡の位置

大月遺跡の絶対位置は北緯三五度三七分一二秒、東経一三九度三〇分四七秒の交差する地帯である（第一図）。また、行政上の位置は、山梨県大月市大月二丁目十一の二〇で、地目は県立都留高等学校の校庭となっている。（平松康毅）

2 遺跡をめぐる地理的環境

山中湖に源を發した桂川が北流してきて、笹子峠付近より西流してきた笹子川と大月市内に入って合流するが、遺跡はこの合流点に近い桂川右岸の河岸段丘上に位置している。標高は三六五mであり、桂川との比高は約三〇mである。

桂川は本流となって相模湖へと東流して行くが、沿岸には河岸段丘の發達が著しく、大月市に發見される多数の原始・古代の遺跡はこの段丘上に分布しているが、縄文時代の遺跡は段丘面が最も広い中位段丘面に分布しているといえる。桂川本流の河岸段丘は、高位段丘・中位段丘・低位段丘に区分されている。中位段丘は、I面にあたる鳥沢面と上野原面、およびII面とに分けられており、大月遺跡はこの中位段丘I面の鳥沢面に位置している。

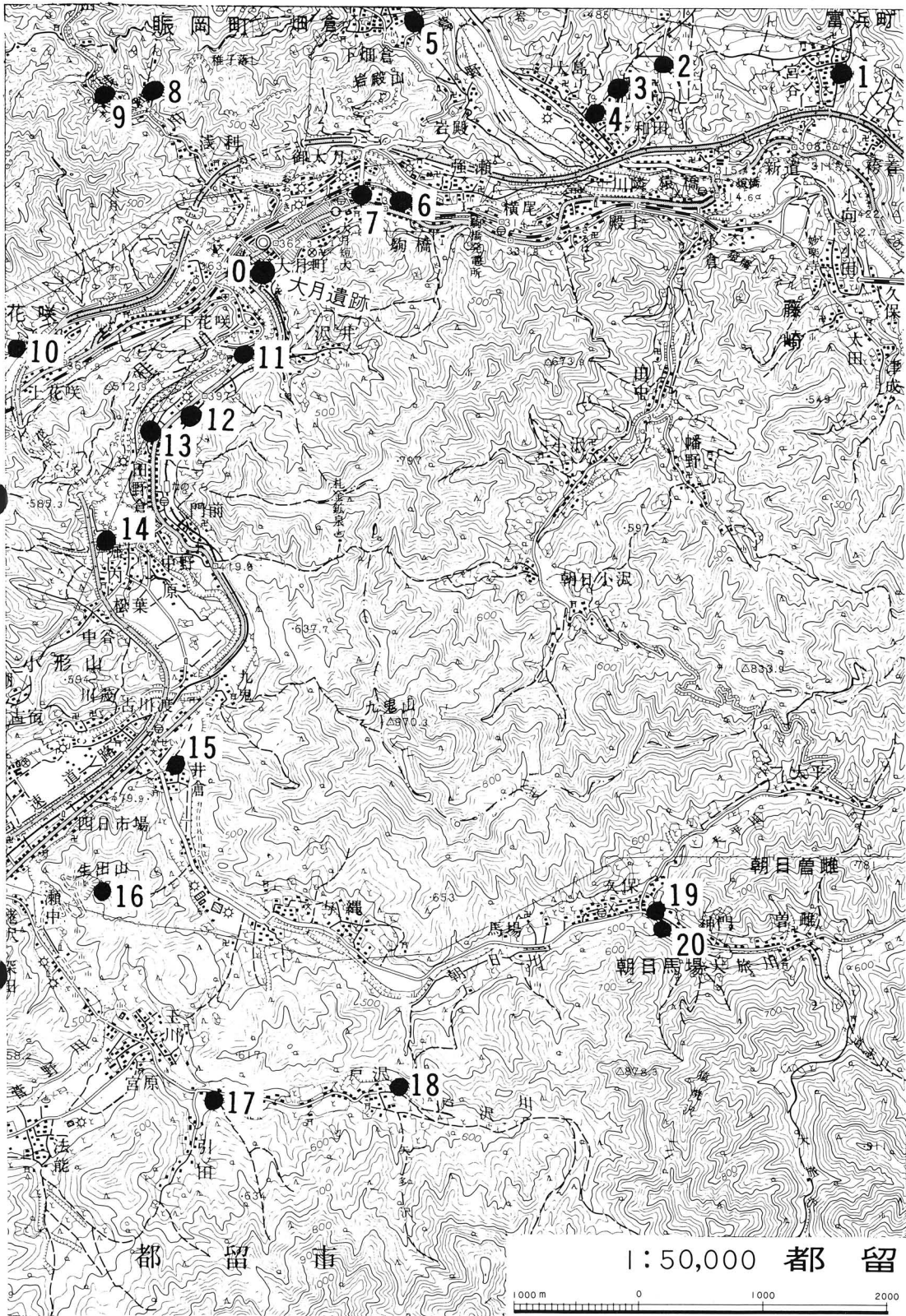
遺跡の北側には国道二〇号線、さらに、その北側に国鉄中央本線が並行して東西に走っている。西側には富士急行線と国道一三九号線とが並行して桂川に沿って走り、南側は林宝山（六四〇m）が迫り、東側には小学校、市役所と続き市街地となっている。これらに囲まれた遺跡は、明治三四年校舎建築の折に石棒の先端が發見され、続いて大正七年の甕形土器の發見によって注目され、昭和二年富士山麓電鉄の工事の際、發掘調査が実施され「大月遺跡」として發表されている。なお、今回の發

掘調査区域は、屋内体育館の東側に隣接する約七〇〇平方mの範囲である。

(田代 孝)

参考文献

- 桂田保他…山梨県応用地質誌 昭和四九年 山梨県
- 仁科義男…甲斐の先史並原始時代の調査——大月遺跡(甲斐志料集成二二) 甲斐志料刊行会 昭和一〇年
- 大月市史編纂委員会…大月市史——史料編 大月市役所 昭和五一年



第二図 大月遺跡周辺の遺跡分布図

3 周辺部の諸遺跡

遺跡は単独で存在するものではない。遺跡を点と考えた場合、点の廻りにはまた別の点があつて、その点と点を結んだ時、そこにひとつの文化圏が浮彫にされることがある。大月遺跡の場合も、また然りである。

この意味で、大月遺跡をめぐる周辺部の遺跡を一通り瞥見してみたい。以下に列挙する遺跡は、大月市で一〇カ所（大月遺跡は含まれない）、同じく都留市でも一〇カ所に限り、大月遺跡と同時代の遺構・遺物が発見されているものを主眼にした。しかし、だからといって、ここに列記した遺跡が代表的遺跡というわけではない。それどころか、すでに調査されて内容の明確な遺跡すら地図上に落せなくて記述することが出来なかつたものもあるのである。なお、各遺跡の特徴は、特に重要なもので

大 月 市	0	大宮	月谷	縄文中～後期・歴史時代
	1	東井	原	縄文中期
	2	東梨	戸	縄文中期
	3	和木	木	縄文中期・古墳時代～歴史時代
	4	木田	戸	縄文中期・古墳時代～歴史時代
	5	柳	狩	縄文中～後期
	6	四本	田	縄文後期
	7	平	木	縄文中期
	8	指	石	縄文中期
	9	西	平	縄文中期
10	西ノ上C地	点	古墳時代～歴史時代	
都 留 市	11	千の	宮	縄文前～後期・古墳時代～歴史時代
	12	神	出	縄文前～中期・古墳時代～歴史時代
	13	桃	園	縄文前～中期・古墳時代～歴史時代
	14	松	原	縄文中期
	15	美	山	縄文早期～後期・古墳時代～歴史時代
	16	生	田	縄文中期・弥生
	17	桃	會	縄文中期・弥生
	18	西	根	縄文期
	19	尾	畑	縄文中期～後期
	20	落	原	縄文・古墳時代～歴史時代

第1表 大月市・都留市遺跡地名表

ないかぎり、はしょって説明したい。

ちなみに大月市では、ざっと一〇〇カ所余りの遺跡が確認調査されており、そのうちの九〇カ所は縄文時代の遺物が出土している。いっぽう、都留市では、昭和四六年の分布調査で都合五九遺跡が確認報告されているけれども、現在では若干の変動があるものと思われる。

〈大月市〉

0、大月遺跡（大月二丁目一の一〇〇）

桂川本流が笹子川との合流点の近接地の中位段丘に発達した遺跡。本稿の基点となる。

1、宮谷遺跡（富浜町宮谷）

大月遺跡から北東に約四・八kmの地点（以下同じ）。百蔵山の山麓で原野山林から耕地に移動する境界の標高四〇〇m付近。縄文中期の隅丸方形の竪穴式住居址が一軒検出されている。

2、東井尻原（七保町下和田）

北東方面に約三・六km。百蔵山南麓の扇状地で、標高四三〇m付近に位置したが、市営総合グラウンドの建設で埋没した。

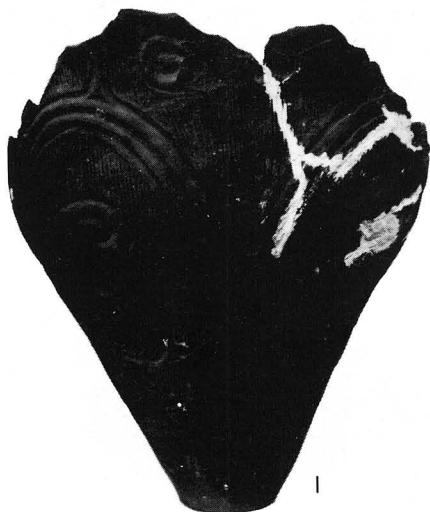
3、東梨木戸（七保町下和田）

北東に約三・二五km。百蔵山南麓の扇状地上の独立丘上（標高四二〇m）に位置する。

4、和田原（七保町和田）

北東に三km。葛野川左岸の中位段丘と高位段丘の中間に位置する斜面にあり、標高三四〇mの付近。土師器片など出土している。

5、木戸狩（賑岡町畑倉）



1, 2

大月町真木辻遺跡

(左・高さ53cm、右・高さ46cm、金森辰政氏蔵)

3 笹子町老久保遺跡(深鉢形土器・高さ28cm、仁科民人氏蔵)

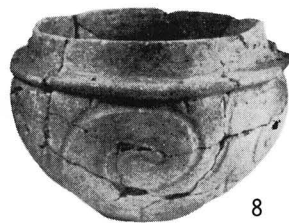
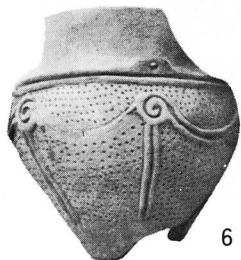
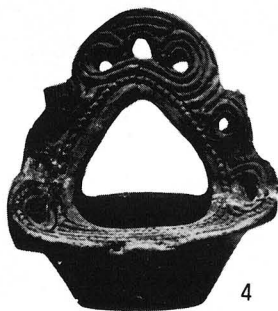
4 賑岡町畑倉遺跡(釣手土器・高さ24cm、天野一太氏蔵)

5 賑岡町畑倉(深鉢形土器・高さ15cm、小俣吉邦氏蔵)

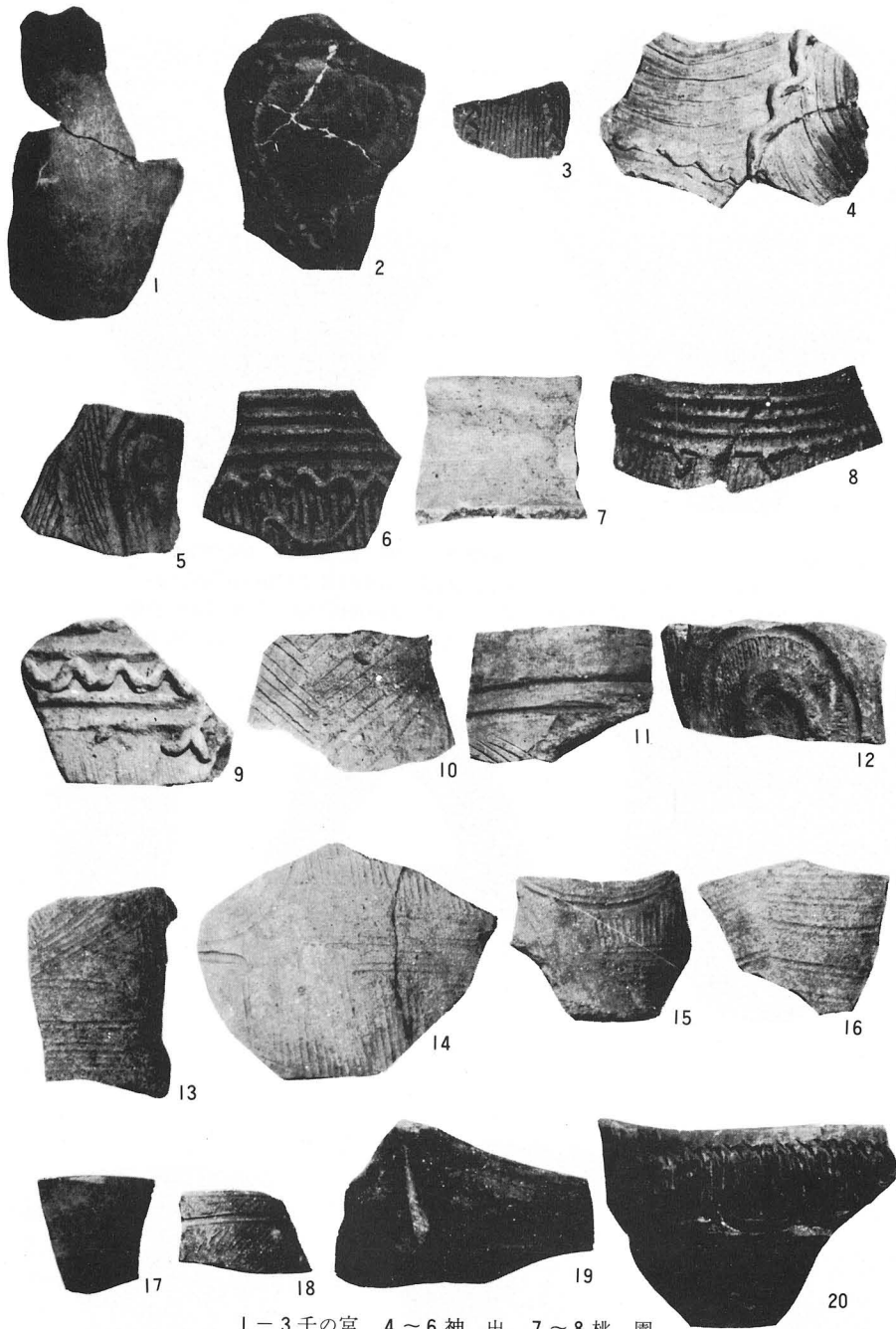
6 猿橋町岡遺跡(広口壺形土器・高さ30cm、鈴木武雄氏蔵)

7 七保町下和田町遺跡(深鉢形土器・高さ30cm、土屋正一氏蔵)

8 賑岡町浅利遺跡(有孔罎付土器・高さ12cm、渡辺光雄氏採集)

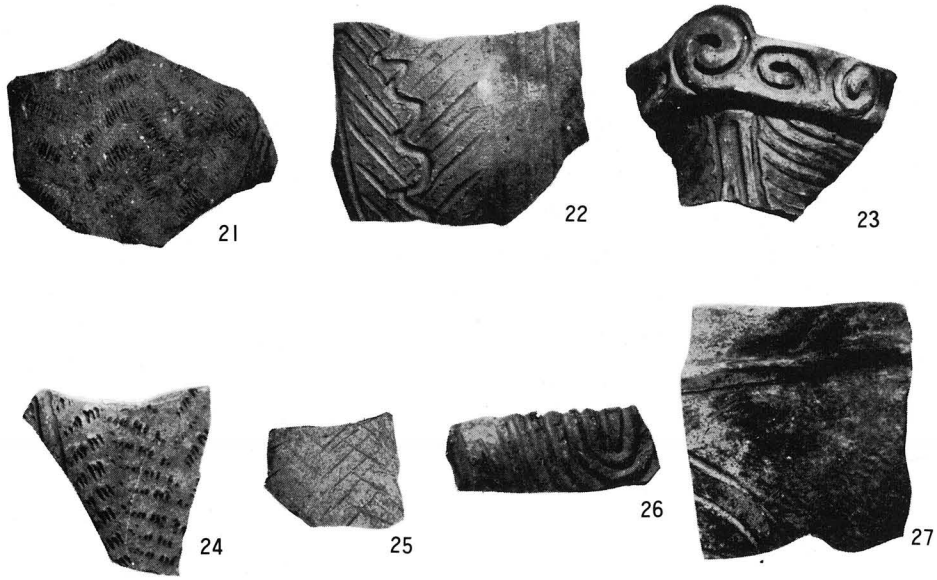


第三図 大月市各遺跡の出土土器



1-3 千の宮 4-6 神出 7-8 桃園
 9-12 美通 13-16 生田山 17-20 桃曾根

第四図 都留市各遺跡の出土土器(1)



21～24西畑 25～27尾崎原

第五図 都留市各遺跡の出土土器(2)

北東に二・八km。河岸段丘上に存し、東西約一五m、南北約一五mの範囲。石棒など出土している。

6、柳田(御太刀)

北東に一・二八km。桂川段丘上の溶岸帯から赤土層に変る地点で標高三五〇m付近。大月遺跡とともに大月地区最大の遺跡と目されている。

7、四本木(駒橋)

北東に約一km。菊花山麓の緩傾斜面が溶岸帯に接する赤土層上の標高三六〇m地点。大月遺跡とともに大月地区最大の遺跡。

8、平石(賑岡町浅利平石)

北西方面に一・七km。台地上に存し、石皿、石棒、石斧などが出土している。

9、指平(賑岡町浅利指平)

北西に一・九km。河岸段丘上に存し、土器、石器の出土ほか住居址の形跡も確認はされている。

10、西ノ上C地点(大月町花咲)

西に二・一km。笹子川左岸の河岸段丘で標高四二〇mの舌状台地の西向緩斜面。土師器片が表面採集されている。

〈都留市〉

- 11、千の宮（田野倉）
南に〇・七km。桂川の右岸段丘の三島神社境内と隣接の畑地が遺跡。
- 12、神出（田野倉）
南西に一・三km。上記千の宮遺跡の南西に接続する平地。
- 13、桃園（田野倉桃園）
南西に一・五五km。神出遺跡の西方に接する。
- 14、松原（与繩）
南西に二・五km。後述する生出川支峰の天神峠（玉川）に近いゆるやかな山腹の傾斜地。
- 15、美通（井倉）
南に四km。宮川の右岸段丘に存し、楢円押型文土器から加曾利B式土器までを出土させる複合遺跡。
- 16、生出山（四日市場生出山）
南西に五・五km。標高七〇一mの生出山山頂に存す。
- 17、桃曾根（下戸沢桃曾根）
南に六・五km。戸沢川左岸の河岸段丘に位置している。
- 18、西畑（上戸沢西畑）
南東に六・六五km。桃曾根遺跡と同様に戸沢川左岸の河岸段丘。
- 19、尾崎原（朝日馬場）

南東に六 km。朝日川右岸の朝日小学校敷地内。円形の敷石住居跡が二軒発見されている。

20、落合（朝日曾雌）

南東に六・一五 km。大旅川右岸の山腹に存す。

（平松康毅）

参考文献

- 大月市史編纂委員会・大月市史——史料編 大月市役所 昭和五十一年
- その他、埋蔵文化財包蔵地調査カード——大月市（昭和四六年）・都留市（昭和四六年）

4 発掘調査に至る経過

昭和五〇年度の県立高校整備計画の一環として、大月市大月町所在の都留高等学校々舎改築事業が決定され、この為、旧校舎の取り壊しが昭和五〇年夏に行なわれ整地された。

これと同時に県教育委員会では大月遺跡として知られているこの敷地の、発掘調査計画の検討を行ない、当年十月の一ヶ月間に調査を実施することを決めた。

作業着手前に地元大月市内の考古学愛好者等から、遺跡の調査あるいは保護の声があったが、校内敷地はすべて遺跡であつて、その保存が困難である為に、発掘調査を行ない、記録保存として後世に伝えることとした。

他の章でものべられている様に大月遺跡は古くより二科義雄の手により学会に報じられ、又、学校の図書室の一隅には、かつて出土した土器が復元展示されるなどして、広く県下に知らされたものであり、大月市周辺の原始古代文化を知る重要な手がかりとなるものである。

調査にあたっては東京より平松康毅を招き、調査担当者として現地に常駐していただき、県文化課文化財主事森和敏、末木健両名が交代で現地におもむくとともに、園芸高校教諭田代孝を二ヶ月間出向していただき調査体制を整えた。又、地元在住の森本圭一や、都留署勤務の小林広和、大月市々編纂室の小林利久等から郡内地方の特質や自然環境、過去のデータ等多くの御教示をいただき当初の計画以上の調査体制が地域を含んで構成されたことはこの他の喜びであった。

調査は昭和五〇年九月三〇日から同年十一月三日までの実質一ヶ月弱であったが、秋の雨天の時期とも重なり、又日照時間が短くなってゆくにつれ、朝晩の冷えもつの中で作業が進められた。

5 学史

更に調査の折にふれ明治大学助教授小林三郎先生には御指導をいただき、現地での指示を受けた。記して謝意を表したい。
(末木 健)

「大月遺跡」の名称は、昭和の初頭もしくはそれ以前から使用されていて、われわれはまさにそれを踏襲したまでのことである。さて、昭和三年五月一日付で文部省宗教局から発行された『史跡名勝天然記念物』第三集第五号に仁科義男の執筆にかかる「甲斐国大月の先史遺跡に就て」が掲載された。仁科は言っている。

「甲斐国大月が遺物の出現によりて付近の人々に幾分の注意を喚起せしめたるは明治三十四年の都留中学校建設当時のことであつた。されど当時は史前考古学等の知識未だこのあたりに普及を見ざるため何ら記録的研究調査をなす者もなく、惜しむべき資料も無惨に放置せられたのであつた。(中略) しかるに去る大正七年中学校理化学教室建造にあたり、付近の

土砂採集によりて偶然地下より広口環形土器を発掘して時の職員の注意するところとなり、ここにはじめて中央の斯学府にまでとどくようになった……」(筆者註||旧漢字を改訂し、難訓難読のものは出来るかぎりひらがなに改めた。以下同じ。また、文中にみえる都留中学校は、いうまでもなく旧制中学のことであり、現在同一場所に存在する都留高等学校の前身である)

また、次のようにも言っている。

「本稿に於ける発掘調査は昭和二年四月初旬、現都留中学校長石塚末吉氏が彼の富士噴出物の研究をなさんとして、同校庭を発掘したるに起因する……」

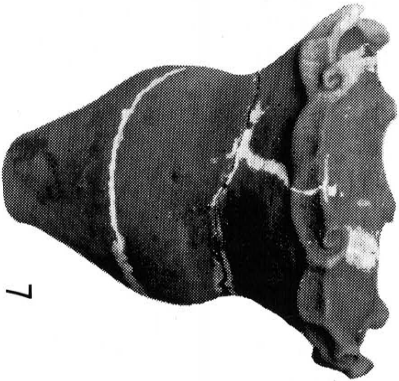
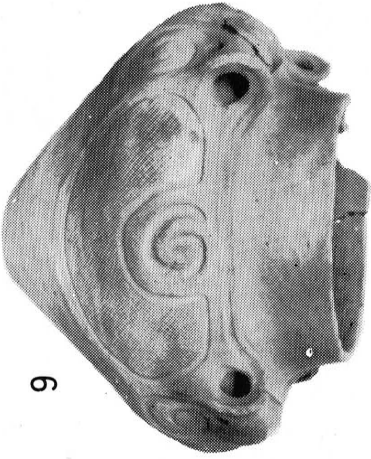
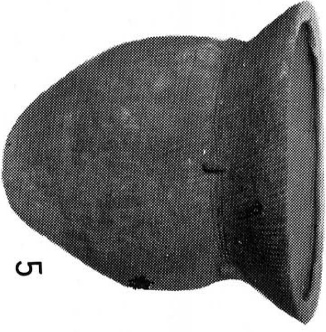
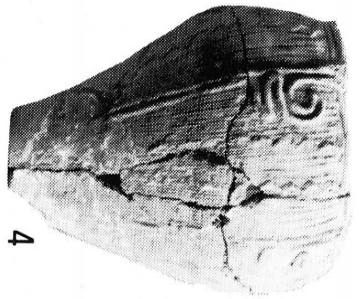
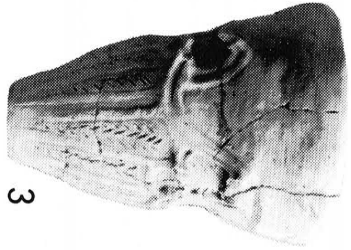
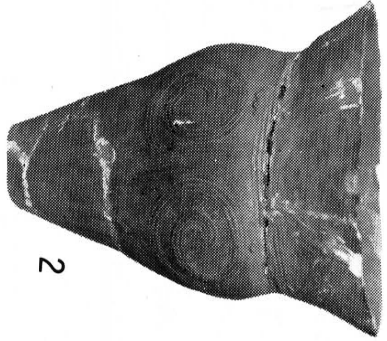
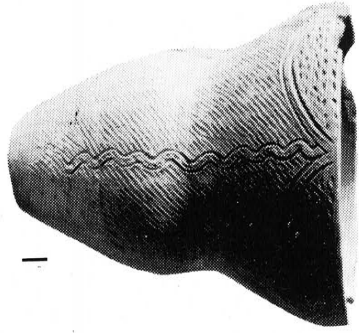
右の論文は、いわば都留高等学校敷地内における最初の発掘調査報告といえるものであつた。すなわち、文中には、都留中学校長の石塚末吉が、富士噴出物の研究を目的として校庭を発掘した、とはつきり書いてあつた。そうした発掘の記録と各所

の所蔵品をもとに書き起こしたものの、それが「甲斐国大月の先史遺跡に就て」であった。

すでにみてきたように、調査の主旨は地質構成の観察であった。したがって仁科にしてみれば、この調査は一石二鳥とでもいべきものであったに違いない。その結果、調査地区の垂直的層序と、ひいてはどの層位から文化遺物が発見されたかについて、かなり詳細に記述してある。思うに、仁科もその調査に従事したのではあるまいか。なお、この調査で考古学資料が検出された時、文字通りの平面発掘がなされなかったのは物足りない感じだが、それは現在から考えてみてのこと、考古学が緒についたばかりの当時としてはやむを得ないことであった。

いずれにしても、この後、仁科は第三集第一二号と第四集第九号にも同じ主旨の労作を発表している。ことに後者は、前二回での間違いをも正した完結篇で、その総括には――

- 1、本遺跡の住居址においては竪穴の存在を認めず、いわゆる平地石畳式※のものである。
- 2、本遺跡の炉址は発見数七個共全部石囲であつて土器を利用せず、ことごとく方形である。
- 3、本遺跡出土の石器類はだいたいの磨製のもの少なく粗製のもの多く、打石斧の如きはその形状より見るときは大山柏氏の唱ふる土搔※といふべきもの、すなわちトンガと称すべきものが多い。
- 4、土器はいわゆる縄文式厚手※※の祖形的なものより薄手の諸磯式と称するものや精巧な常陸方面に類似形のものや弥生式※※※のもの祝部※※※のものまでが出土しているがなかならず祝部は南北の両端から発掘された。これは、いずれも現在集落に接近することを意味している。すなわち南方は往年農家数軒が存在したる古屋敷と呼ぶところにして、北方は大月旧宿の所在地である。
- 5、本遺跡においては当時の生活地盤より一メートル以上数メートルの下方に木炭や完全土器または焚火址の如き場所があつたことは特異であつた。
- 6、本遺跡からは土器※※※※、土偶、石包丁の如きはまったく発見せられなかつた。土錘、石錘、共に同様な次第であつた。



第六図 大月遺跡の出土土器 (大正～昭和)

※敷石住居址。 ※現在の編年では縄文時代中期の範疇に属する一群の土器。 ※私見によれば、当時は古墳からでも出土しないかぎり、弥生式土器と土師（器）式土器は区別されなかった。 ※須恵器。 ※誤記。

と、結んでいる。この引用文については後でもふれることになる。

ところで、仁科が大月遺跡という時、それが都留中学校Ⅱ都留高等学校の敷地を差したものであることは議論の余地がない。というのは「甲斐国大月の先史遺跡に就て」の挿図、すなわち「大月遺跡付近地形図（地図）」では大月遺跡と他の遺跡、または遺物散布地を明確に区別しているからである。しかし、仁科は学校の敷地外から出土したものについても叙述し、かつ、それらを多少あいまいに扱ったために、現在では、都留高等学校敷地内の遺跡・遺物を説明する場合でも学校名を遺跡名に転化して、大月遺跡の称呼を使用しない人も現われるようになった。

いっぽう、山本寿々雄によれば、仁科は大正時代から自作の遺跡カードをもちいて調査をすすめ、また、「北都留郡中央部に於ける先史民族の遺跡に就て」や『考古学雑誌』上に「山梨県北都留郡に於ける史前遺物発見地名表」などを発表しているというのである。すると、彼が、前記『史跡名勝天然記念物』以前から大月遺跡の名称を使用していた蓋然性はきわめて高く、そうした仁科の業績は評価されるべきものである。

かような訳で、今回書下した報告書でも大月遺跡の名称をそのまま踏襲させていただくことにしたのである。

次に、今、発掘調査以前、大月遺跡から出土した考古学資料について言及しておきたい。とはいえ、詳述するのではなく、要点のみ説明することにしたい。

大月遺跡の存在が人びとの口の端にのぼるようになったのは、明治三四年の学校建設中であつたことは前に引用した。それから現在まで学校拡充やら昭和二年の発掘、さては富士急行の線路の敷設（ちなみに、富士急は運動場の下を貫通している）など、事あるたびに考古学資料は陸続と発見されている。そして、まさにその故にこそ、行方の不明な遺物は少なくないの

ある。

そのようななかで「大正七年中学校理化学教室建造にあたり、付近の土砂採集によりて偶然地下より広口甕形土器を発掘（中略）ここにはじめて中央の斯学府にまでとどくようになった……」の記述に見合う甕形土器は、東京大学人類学教室に保管されて今日に至っている。また、昭和二年の発掘で検出された資料は都留高等学校に、さらに新制高校になっての体育館、プール、学生寮などの建設中に出土した遺物も同じく都留高等学校に所蔵されている。これら土木工事で偶然に見見されたものに、高さ三四cm、肩部に四個の大きな橋状把手をもつ広口の壺形土器があるけれども、周知のように、この資料は、『日本原始美術1縄文式土器』の図版（第一三六図版）にも大きく扱われた逸品である。

（平松康毅）

参考文献

- 仁科義男・甲斐国大月の先史遺跡に就て（史跡名勝天然記念物 第三集第五号）文部省 昭和三年
- 仁科義男・甲斐国北都留郡大月先史時代遺跡の研究（史跡名勝天然記念物 第四集第九号）文部省 昭和四年
（なお、『史跡名勝天然記念物 第三集第一二号』は山梨県教育委員会・山梨県立図書館・国会図書館でも所蔵されておらず未見である）
- 森本圭一・富士火山砂礫層と遺物——縄文時代中期後葉を中心に——（甲斐考古10の1）山梨県考古学会 昭和四七年
- 山本寿々雄・研究史の展望（山梨県の考古学）吉川弘文館 昭和四三年
- 山内清男ほか編・日本原始美術1縄文式土器 講談社 昭和三九年

6 調査の経過

発掘調査に着手したのは昭和五〇年（一九七五）一〇月一日であった。調査の進行状況については、およそ別表（第二表）の通りである。

表でも明らかのように、調査中は、はじめから終りまで、雨にたたられどしどしであった。三六日の調査期間中、なんと一日も雨に悩まされた。しかし、この雨は一日中か、または半日だけというのが常だった。したがって、作業を続けるかどうか、その行方を決定するに難しくなかった。たとえば、一〇月二日は、午前二時五六分から雨になった。その後、一二時二〇分を境に雨脚が強くなり、そのうえとてもやみそうな気配ではなくなったので、遺憾ながら調査を続けることに見切りを付けた。以来、半日だけの降雨の時は、昼食時をさかいにして、調査を進行させたり、とりやめたりすることになった。

それとはともかく、調査は発掘地区の西半分、すなわち現地では体育館側にあたる部位から着手した。理由は「地区設定」でくわしく述べるつもりだが、調査地全体の土層状態と遺跡についての従来の知識をもとに、調査方法（表土剥ぎ）を二分したからにはかならない。こうして、調査地区の西半分に設定した一辺が二mの方眼の地区割りを一枘ごとに発掘していった。この発掘は、もちろん手掘りであった。しかしながら、その後には表土下数一〇cmが無遺物層であるのみならず、建築物の土台の存在で調査の進捗に支障を来すことも明白となった。その結果、発掘地区の東半分の表土剥ぎには、当初予定していた後退式のパワー・シャベルを導入した。

話ををもとにもどすと、調査日二日にして、遺構は発見された。B-11区の現表土下約一・二mで発見された遺構は、直径約三五cmの円形を呈し、はじめ歴史時代の柱穴ではないかと観察された。しかし、そのような遺構は、付近の他の地区では発見

第2表 発掘調査進行表

月	日	天 気		作 業
		前	後	
10.	1		○	午前中に地区設定を行ない、午後より発掘を開始する。 B-9区で土壌を発見する。 県教育長、文化課長現地視察 岩殿山頂より遺跡遠景写真撮影、テント設営 層序の実測を開始する。 市民病院の屋上より遺跡の遠景撮影 全体測量図を作製する。E-8区で床面検出 第1号住居址の存在を確認する。 第3号住居址の存在の可能性。拡張区を設定 第4号住居址の存在の可能性があるため拡張区を設定 明治大学小林三郎助教授視察 C-32, 33区で溝状遺構 第3号住居址平面プラン確認作業、県教育長視察 第2号住居址の存在を確認 第1号住居プラン確認のため拡張区設定 第1号住居址の調査をほぼ完了 第3, 4号住居址の調査をほぼ完了 明治大学小林三郎助教授視察 第2号住居址の写真撮影を行ない発掘調査終了
	2	水	○	
	3	木	●	
	4	金	●	
	5	土	○	
	6	日	●	
	7	月	○	
	8	火	○	
	9	水	●	
	10	木	○	
	11	金	○	
	12	土	○	
	13	日	●	
	14	月	●	
	15	火	○	
	16	水	○	
	17	木	○	
	18	金	○	
	19	土	●	
	20	日	●	
	21	月	○	
	22	火	○	
	23	水	○	
	24	木	○	
	25	金	○	
	26	土	●	
	27	日	○	
	28	月	○	
	29	火	○	
	30	水	○	
	31	木	○	
11.	1	金	○	
	2	土	○	
	3	日	○	
	4	月	○	
	5	火	●	
		水	●	

(○晴 ○曇 ●雨)

することが出来ず、しかも発掘をすすめるうちに上記の遺構は柱穴では無く、いわゆる土壇であることが把握されるにいたつた。また、土器・石器は表土下七〇〜八〇cmをさかいに、ほとんどの地区から少量ずつ出土したけれども、きわめて無意的に発見された。このことから、一時は、調査地区全体はかなり深い地層まで攪乱があるのではないかと危惧された。

しかし、一〇月一日になると、後日、われわれが第1号住居址と仮称することになった遺構の存在が確認された。この第1号住居址の検出を契機にして、はじめに書いた地区割りの西半分と東半分で二軒づつ、計四軒の竪穴住居址を検出することに成功した。

さて、各住居址の平面プランが判明すると、遺物のとりあげには、麻生優の提唱したいわゆる原位置方式を援用した。これは住居址の性格と、小林達雄等によって問題提起された廃棄の問題を詮索するうえで、この方法論が有効なものと考えたからにほかならない。

ところで、記録写真の撮影にはことのほか苦慮した。時節柄、日没が速く、折角カメラチャンスをもかえても短時間で切りあげねばならなかった。別にいえば、被写体に影をいれぬよう写真撮影をしようとすれば、わずかの間しか最良の時間がなく、ひいては撮影枚数にもおのずと制限があるわけである。というわけで、調査日数の関係から雨天に撮影することすら少なくなかった。なかでも歴史時代の住居址は繰返し撮影しなければならぬ破目になり、最後には暁闇のうちに宿舎を出て、視界が明るむのをじっと待って撮ったりした。

次に、ほとんどの遺構は、いわゆるローム層を切り込んで含まれている。してみると、これらローム層中の文化遺物と遺構の存在をも無視するわけにはいかず、調査地域内の数カ所をローム層深く試掘してみたが、いかんせんそうした資料を発見するにはいたらなかった。

最後に、この調査の仍って来たる原因が、校舎改築という土木工事に先がけた考古学的調査であったことは、すでにいわで

ものことである。このため、遺構を保存することは出来なかった。調査終了後、遺跡地は埋めもどされ、校舎建設に着手された。

(平松康毅)

参考文献

- 麻生優・原位置論序説(上代文化第38輯) 国学院大学考古学会 昭和四四年
 - 小林達雄・縄文世界における土器の廃棄について(国史学第93号) 国史学会 昭和四九年
- (なお、麻生、小林ともに前記の論文は、研究の成果を何度も練り直した後、いちおうの纏めとしたものである)

調査組織

調査員(右肩の○印は責任者)

末木健、田代孝、○平松康毅、森和敏、

調査補助員

品川裕昭(駒沢大学) 本山道男(大東文化大学) 五十嵐晴子、石原敬子、勝俣弥生、川口敏克、木下皇子、清水婦美恵、静山雅美、杉本知子、田中千鶴子、田村正和、田村素子、津田由子、向山みどり、百田智美、横山典夫、渡辺淳子、渡辺淳子(都留文化大学) 奈良泰史、野中和夫(日本大学) 佐々木克典、米田明訓(明治大学)

現場事務

亀井幸子

作業員

大村四郎、奥秋宏、後藤元久、谷内寅吉、古屋幸夫、○山口弘一、米山利章、○和田博ほか（湯山工務店）

調査中の実測は勝俣、川口、佐々木、品川、末木、奈良、野中、平松、本山、米田、渡辺（あ）、渡辺で行なった。

調査中の記録写真撮影は末木、平松兩名が行ない、スナップは田代が担当した。

発掘調査中、特に指導、助言をいただいた方は、以下の通りである。

小林三郎、小林広和、小林利久、森本圭一、山本寿々雄

7 整理の経過

調査が終了すると、大月遺跡の出土遺物は、山梨県教育委員会の整理室に搬入された。したがって、整理はおおむね甲府市において行なわれた。

昭和五〇年（一九七五）十一月一日には県文化課に調査員が集合して、整理や報告書の作製等について打合わせをした。

その結果、①整理は十一月三日より開始することにし、あらかじめ割当てられた整理費用内で、洗浄や復原などに要する時間的経過を考慮して、断続的に行なう。②土曜日と日曜日は、もっぱら大月遺跡とその周辺部の既出の遺物を調査、見学する。

③報告書は昭和五二年（一九七七）三月いっぱいまで上梓する、などを決定した。

ところで、整理中に国鉄のストライキに遭遇した。このため佐々木、奈良、平松の三名は、甲府で数日間足留めを食う羽目になった。そして、そのことが原因して、頭初決められた整理費用（率直に言って多くはなかった）に支障が生じた。こうして再度、整理費用を追加してもらわねばならなくなり、ひいては整理の完了をも遅滞させることになった。遺物の洗浄、復原、実測、拓影、写真撮影は、ひとまず二月一七日に終了した。トレースなどは翌年、つまり昭和五十一年（一九七六）に持越した。

（平松康毅）

洗 浄

五十嵐玲子、大川原恵子、齋藤美代子、戸沢茂子、渡辺賀代ほか（山梨県立短期大学）

整理（復原・実測・拓影）

勝俣、川口、佐々木、田代、奈良、野中、平松

遺物の写真撮影は末木、田代、平松が行なった。

トレースは佐々木、奈良、野中、平松で行なった。

整理中、特に指導、助言をいただいた方は、以下の通りである。

奥隆行、小林三郎、小林広和、野上道男、濱野一彦、早川泉、樋口清之

報告書の作製にあたって、下記の機関から協力をいただいた。

大月市教育委員会、都留高等学校、東京大学理学部人類学教室。

8 調査地区の地質構成

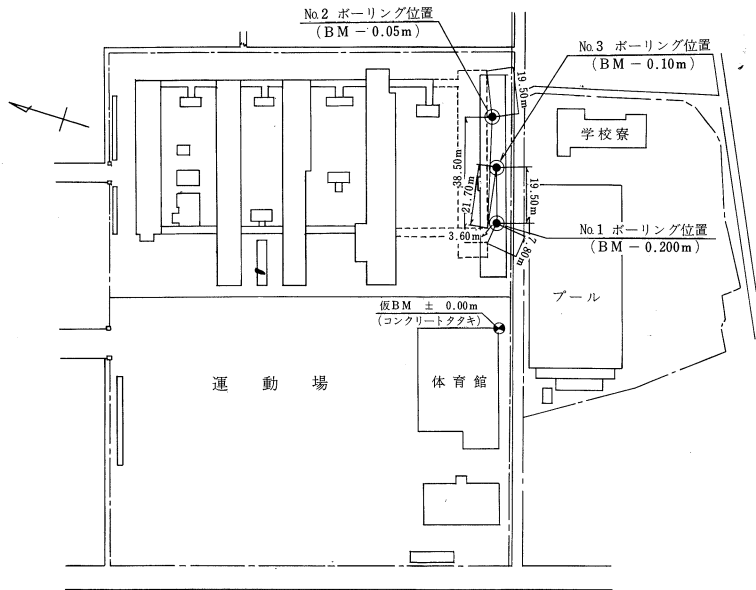
すでに書いたように、大月遺跡の地質構成については、昭和の初期にも公表されたことがある。旧制都留中学校長石塚末吉の手で調査されたものだ。この時、地層の観察された地点は、現都留高等学校の正門に向かって右側の運動場の端、つまり桂川と並行して走る道路と運動場がほぼ接触するあたりであったらしい。

さて、今回、考古学的調査の対象となった体育館正面玄関前の地点は、鉄筋コンクリートの校舎建設敷地である。したがって、事前にロータリー式コアボーリングによる地質調査がなされている。

それによると、堆積層は表土下四・三 m 以上は（玉石混り火山砂礫層）で、暗灰を呈し、密に締った火山灰砂をマトリックストとして、最大径二〇〜三〇 cm 程度の玄武岩を主とする玉石を混入するものである。この第 4 層の上には層厚三・二〜四・四 m で暗灰をした第 3 層（火山灰砂）がのっている。この（火山灰砂層）はローム、スコリヤ浮石および火山礫等の種々の粒度の火山碎屑物より成る不規則な地層である。次に第 2 層は火山灰を混入した（礫混りローム層）で〇・八〜一・〇 m の層厚をもち暗灰を呈す。その上部は黒灰色のいわゆる（表土・腐植土）で一・五〜一・八 m の層厚、と『県立都留高校改築工事地質調査報告書』には記載されている。

要するに、この報告書によると、表土下一・八 m までは、まぎれもなく表土層として片付けられているわけである。ということは、考古学的調査の対象となる層序の大部分は地質学的には一枚の表土層として扱われ、われわれには何のことかわからなくなってしまう。

いずれにせよ、前記地質調査報告書でいう第一層の層厚を細分して説明しなければならぬ。なお、言わずもがなのことで



平面図

標高尺 (M)	深度 G.L. (M)	層厚 (M)	土質記号	土質名	色調	観察記事	相対密度	相対稠度
0	-0.85	0.80		表(埋土)土	暗褐色	ローム及び腐植土の埋土		柔
1	-1.55	1.50	XXXX	腐植土	黒灰	透かである。スコリア混る		中位
2	-2.35	2.30	XXXX	ローム	暗褐色	小塊混る		中位
3	-3.55	3.50	XXXX	火山灰砂	暗褐色	2.50M付近まで締りおり以疎軟弱		中位
4	-4.85	4.80	XXXX	(ローム)火山灰土	暗褐色	4.00M付近ローム質火山灰多くなる		密
5	-5.75	5.70	XXXX	火山灰砂	暗褐色	粒状は粗大で非常に締っている		密
6	-10.05	10.00	XXXX	玉石混り火山灰砂礫	暗褐色	φmax×200%位礫は含有(多孔隙)マドリックスは火山灰砂で間隙は狭く(φ10mm以下)5cm位で玉石混る		密

標高尺 (M)	深度 G.L. (M)	層厚 (M)	土質記号	土質名	色調	観察記事	相対密度	相対稠度
0	-0.20	0.00		表(腐植土)土	黒灰	0.80M付近まで埋土火山性スコリア等混入する		柔
1	-2.00	1.80	XXXX	表(腐植土)土	黒灰	0.80M付近まで埋土火山性スコリア等混入する		中位
2	-2.80	2.60	XXXX	機混りローム	暗褐色	φ5-10%火山礫粘性強い		中位
3	-4.00	3.80	XXXX	火山灰質砂礫	暗褐色	非常に締っている所を散見するがマドリックス多い		密
4	-4.70	4.50	XXXX	火山灰砂	暗褐色	4.20M付近色混る		密
5	-7.20	7.00	XXXX	火山灰砂	暗褐色	4.50M付近φ50%位の礫点存在するスコリア、浮石多く混る含水率粒状は粗		中位
6	-9.20	9.00	XXXX	(火山性)玉石混り砂礫	暗褐色	7.50M付近固結化した砂を挟むφmax×200%4.00M以上礫多い礫(多孔隙)		密
7	-10.33	10.13	XXXX	玉石混り火山灰砂礫	暗褐色	マドリックスは火山灰砂であり締っている		密

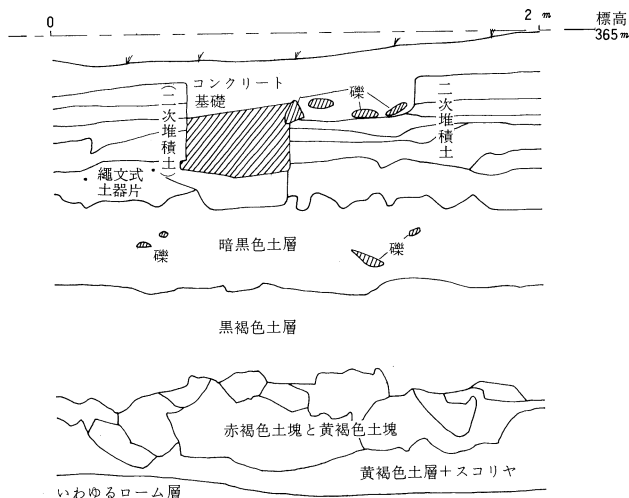
標高尺 (M)	深度 G.L. (M)	層厚 (M)	土質記号	土質名	色調	観察記事	相対密度	相対稠度
0	-0.10	0.00		表(埋土)土	黒灰	腐植土等の埋土		柔
1	-1.60	1.50	XXXX	腐植土	黒灰	火山性である		中位
2	-2.60	2.50	XXXX	ローム	暗褐色	小塊、スコリア等少量混るが透かである		中位
3	-5.80	5.70	XXXX	機混り火山灰砂	暗褐色	時々多孔隙の塊状存在、ローム混りである		密
4	-10.10	10.00	XXXX	玉石混り火山灰砂礫	暗褐色	6.50-7.00M火山灰砂を挟む上部礫小さく(7.00M以上)φmax×200%~300%点存在する間隙は広いが締っている為にはバンドする		密

第3表

大月遺跡調査地区ボーリング地質柱状表

層相	堆積層	層の厚さ (cm)	堆積層の特徴
第Ⅰ層	5 h	60	現表土 (二次堆積土層)
	5 g		
	(5 f)		
	(5 e)		
	(5 d)		
	(5 c)		
第Ⅱ層	(5 b)	35	暗黒色(腐蝕?)土層(元表土?)
	(5 a)		
第Ⅲ層	3 b 3 a	40-50	黒褐色土層 (硬質土) (軟質土)
第Ⅳ層	2	10-40-5 (凸レンズ状)	赤褐色粘質土塊と黄褐色粘質土塊が不整合に接す
第Ⅴ層	1	5-30	スコリヤ含黄褐色粘質土層
いわゆる ローム層		80-100	火山灰を混入した暗灰色礫含粘質土層

第4表 大月遺跡調査地区垂直的層序表



第7図 大月遺跡調査地区層序図

あるけれども、いままでに述べてきた第2層はいわゆるローム層であり、したがってこれから述べる堆積層の基層になるものである。そして地質調査報告書で第1層(表土・腐植土)として扱われたものは、以下では下から上に1・2・3・・・と5層に細分される。

1層は、いわゆるハードローム層上に堆積したスコリヤを混入した黄褐色粘質土層である。ふつうにはローム漸移層などと呼ばれているものに相当する。したがって遺構が形成されるのもおおむねこの面からであり、そのため一部がハードローム層と交錯し、明確には一線を画することが困難である。

2層は赤褐色粘質土と黄褐色粘質土が土塊状を呈して不整合に接している。この2層は、大月遺跡を解くひとつの鍵になるかも知れぬ。というのは、後章でも説明するように、われわれは縄文中期末葉に比定する第1号住居址がいわゆる厚いスコリヤ層におおわれて発見されたのを実見した。けれども、第3号住居址や

第4号住居址の歴史時代の遺構を検出する際にはそうしたスコリヤの被覆層を見なかった。ということ、縄文中期末葉を過ぎたある年代から歴史時代の遺構が形成されるまでの間に、ひよっとすると攪乱があったのではないかという想定も成り立つわけである。だからこそ、この2層は凸レンズ状に不整合に、攪乱そのものの状態で観察されるのではなからうか。

3 aおよび3 bとしたものは、3層一般に分類されるとは考えない方がよい。ただし、3 bは後述する遺構、すなわち土壙1が検出されたのもこの層序だし、土器・石器が発見されるのもこの層から以下であることを言及しておきたい。もっともこれは、第2号住居址の発見された地域のグリッドをのぞいてのことである。

4層は暗黒色土層である。明言することははばかるが、旧制都留中学校が開校される以前の表土ではないかと思われる。

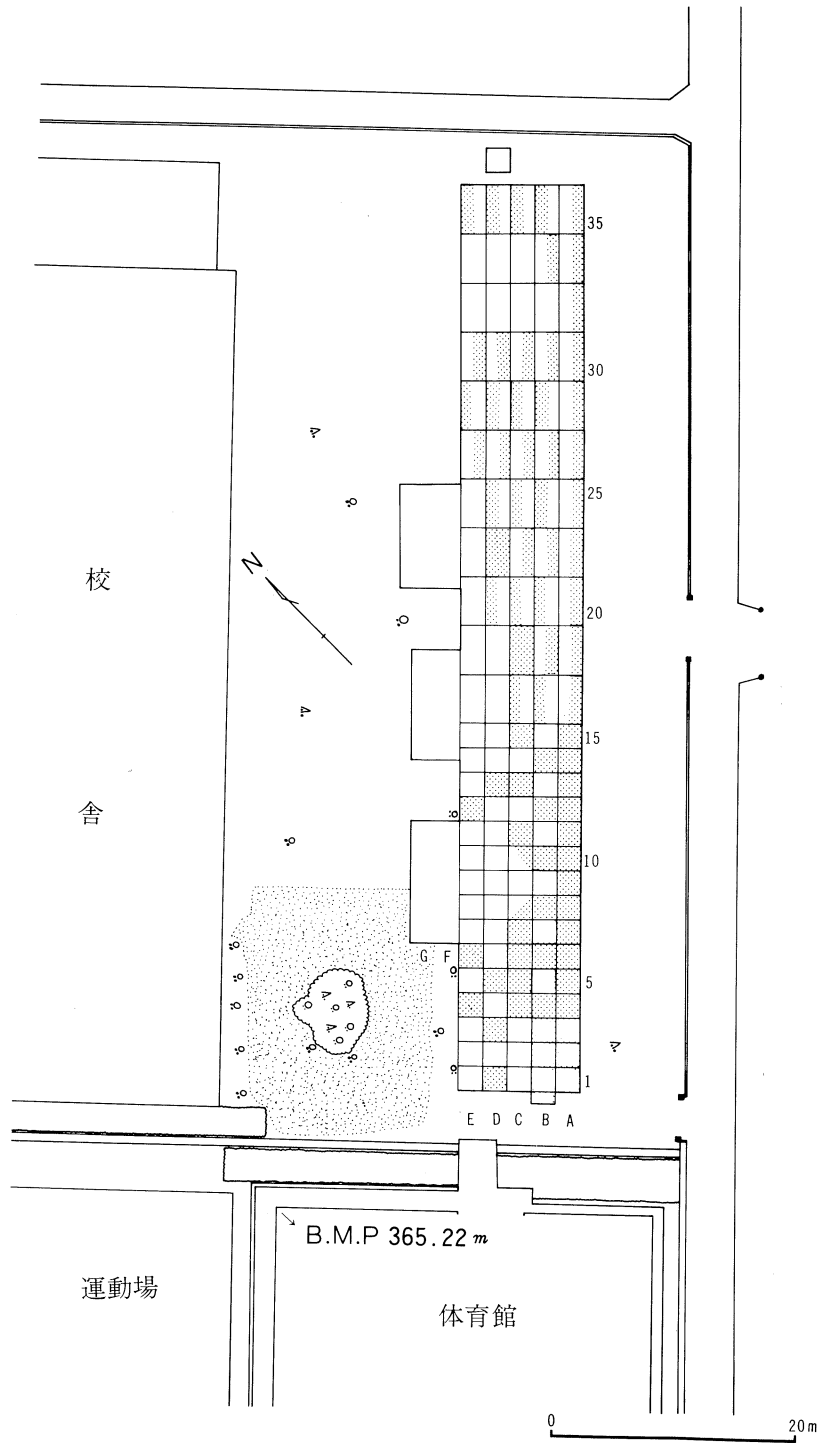
以上述べてきたことから察せられるように、表土の上ののっている土層はいうまでもなく二次堆積層である。つまりここである5層である。この5層は後でも述べているが、人工による二次堆積層と考えたい。層厚約六〇cmで遺跡の全体をおおっているが、新しい年代の攪乱地点（たとえば第2号住居址面上付近とかごみ穴のあったB-14区など）をのぞけば遺物は一点も検出されない無遺物層である。

（平松康毅）

9 地区の設定

今回の調査は、校舎建設敷地内（面積六九九・八平方m）という限定された範囲で実施されたために、おのずから地区設定もこの範囲で行なうことが指定されていた。

調査の性質上、よしんば遺構が発見されたとしても、それらは記録保存というケースしかありえず、調査範囲を虱つぶし



第八図 大月遺跡発掘地区設定図

に発掘することが理想と考えられた。このことから地区設定は、従来の細長いトレンチよりも、調査地域全体に網をかける、いわゆるグリッド方式でとりおこなうよう決定した。この方法であれば、前記した面積内に一辺が二mの方眼の地区割を設定した場合、長径に三七柵、短径には四・五の柵組が設定できる計算だった。

ところで、調査の対象となった範囲の殆んどは、旧校舎を取毀した後の空地であった。したがって、建物の土台となるコンクリートの基礎が縦横に走っていたし、あまつさえ、尾籠な話だが便所をつぶした痕跡（いうまでもなく便槽のことである）すらうかがえた。それに既発表の文献や従前の施設拡充工事（体育館・プール・学生寮など）で得られた知識から帰納して包含層は浅くて現地表下七〇cm、ひよっとすると一五〇cmも掘らねばならぬ、というのが大方の見方であった（ちなみに、この予測は適中した）。しかし、万が一、歴史時代（むろん中世・近世のものも含む）の遺跡にあたらぬという保障もないから、地区設定はあらかじめ面積の西半分だけ杭打ちをやっておき、のこりは結果をみて後日設定するという方針で調査を開始した。ついでにいうと、この段階で東半分の表土剥ぎには機械を入れることも検討していた。

さて、結果はというと、一辺が二mの方眼の内部を縦横に走るコンクリートの基礎（その他やっかいな施設のあることは前に書いた）を土層観察用のあぜを残しながら、コンクリートだけを取りのぞく作業は、人夫ですらまさに至難のわざであった。しかも、そうした建物の土台は、別に割石によるものまで存在したのである。ただし旧制中学時代の建築物の土台であろう。このようにして、徐々に発掘を進めていったわけであるけれども、しばらくすると、前に書いた割石による基礎の部分のものと下の地層まで、人為による攪乱層（二次堆積層）ではないかと考えられるようになった。換言すれば、旧制中学校の開校された明治時代、もしくはその後において一度盛土され、しかるのち建物の土台を施設したのではないかと思われるようになった（昭和の初期に発表された報文のなかで、学校の敷地全部が水田であったために黒土層が深い、と書いてあるのは、われわれの考への正しさを裏打ちするものではなからうか。―傍線筆者）

ここまで書けば明らかのように、表土下六〇cm余りが二次堆積土としての無遺物層であるばかりでなく、各種建築物の基礎によって調査の進捗に支障を来たすことも判明した。かくてこの難問を解決するには、人手を増員することよりも機械力を利用することの方がより有効であろうと判断された。こうして東半分の表土剥ぎには、大袈裟に言えば、大方の鬻盛を買うことを覚悟して、後退式のパワー・シャベル——ブルドオザーでは無いことをお含みいただきたい——を導入した。

というわけで、調査範囲の東と西では、地区割の方法自体を相違させた。しかし、杭の本数を減らせたのみで、排土面積は一向に変わらないのである。また、三軒の住居址の発見で、調査地域外に拡張区を設けたことも付言しておかなければならない。最後に地区の呼称は、縦軸の西から東に1、2、3・・・の数字を、横軸には南から北の方向にA、B、C・・・のアルファベット記号を付した。したがって、横軸のAの区画と縦軸の1の区画の交点にあたる地区はA—1区とよぶようにした。なお、調査地区現表土の標高はB—1区西壁で三六五・一四m、B—37区東壁で三六五・〇五mであった。

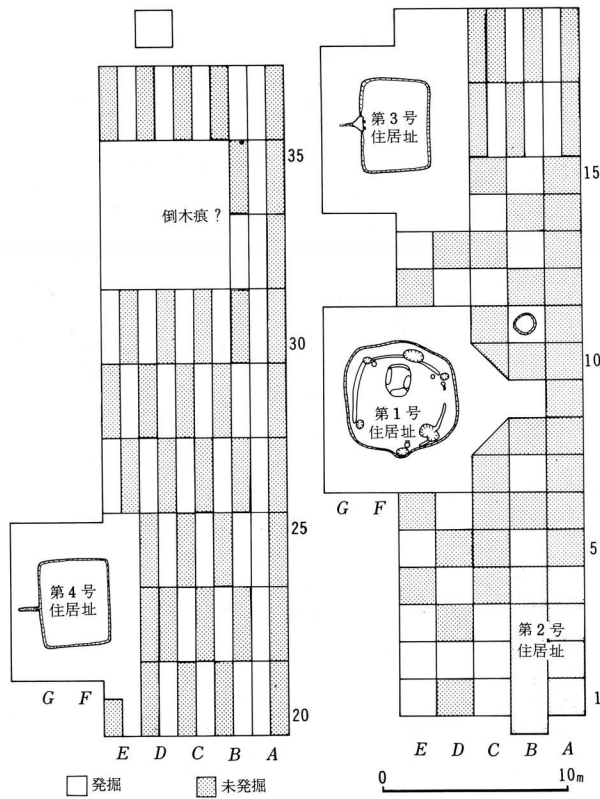
(平松康毅)

参考文献

仁科義男・甲斐国大月の先史遺跡に就て(史跡名勝天然記念物 第三集第五号) 文部省 昭和三年
山本寿々雄・山梨県の考古学 吉川弘文館 昭和四三年

10 地区と遺構

いずれの地区でどのような種類の遺構が検出されたかについては、第九図に提示した。
すなわち、地区割番号の若い順に説明すると――



第九図 大月遺跡遺構分布図

B—1～3区では、後に第2号住居址と仮称することになった縄文時代の住居址が——厳密には痕跡が——発見された。しかるに、A～C—3～6区にはいわゆる便槽が存在した。のみならず、その施設を建設中に周辺部をもはなはだしく攪乱したものとみえて、住居址の検出されたA・B—1～3区の土層中には人頭大の円礫や角礫が多量に認められた。さらにC—1～3区およびB—1～3区の一部にはまた別の攪乱の形跡があった。要するに、攪乱につぐ攪乱で、本住居址の床面も平面プランも判然としないうらみがある。

次に、B—11区では土壙が発見された。この遺構は、頭初は歴史時代の柱穴ではないかと考えられた。けれども、それは視覚的観察のこと、調査をすすめるうちに、ほかならぬ土壙と呼ぶべき遺構であることが確認されるにいたった。

D・E―7―11区では、いつてみれば、取っときの遺構が検出された。いわゆる第1号住居址と仮称した縄文時代の竪穴式住居址である。しかしながら、前記地区割で発見されたのはおよそ全周の $\frac{1}{2}$ 、のこりは調査範囲外にまたがっていた。それゆえ、住居址を完全に検出するために必要な方途はただひとつ、調査地域外に拡張区(F・G―7―11区)を設けるしかなかった。そのような過程を経て全貌を現わしたものの、それが第1号住居址であった。

また、D・E―15―18区で検出された遺構も第1号住居址と同様、調査範囲外を拡張することによって完掘された。本遺構は、いわゆる古墳時代から歴史時代をつなぐ、いわば接触期の範疇にも考えられる竪穴式の住居址である。したがって住居址の北西面にはカマドが造りつけてある。第3号住居址と仮称した。

次に、E―22―23区にわずかに引掛かったのが、第4号住居址である。この竪穴住居址も第3号住居址と同時代の遺構であり、したがって平面プランの類似のみならず、土師器や須恵器などの日常雑器に加えて、鉄製品を出土させたことまで一致しているのは興味深い。

さて、これから記述しようとしているものが、はたして遺跡といえるかどうか、つまり考古学的解釈を施す必要があるかどうか、きわめて難渋な問題である。というのは、明確に遺構といえるような「型」をもたず、一部で風倒木と称してかたづけられている代物にほかならない。むろん、樹木が倒ればその根をささえていた土層は攪乱するだろう。しかし、その場合、根の片鱗でも観察されたのならともかく、そうでない時にまで単に風倒木による攪乱とみただけでよいかどうか躊躇しようというものだ。といって、この種の解釈をけざやかに否むわけにはいかないこともまた事実である。

いずれにせよ、群馬県内の遺跡のここでも実見されるという、いわゆる風倒木の痕跡がC・D―32・33区において観察されている。われわれはひとまず特殊攪乱と仮称しておく。

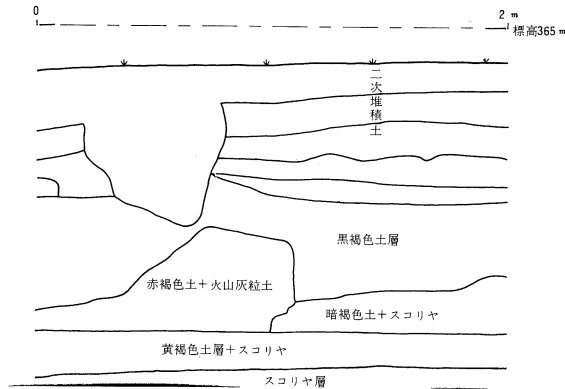
第二章 縄文時代

1 第1号住居址

本住居址はC～E-7～11区で全周の約半が発見され、F・G-7～11区を拡張発掘して全貌を明らかにした。

住居址面上の層序は五層（上から一・二・層）に細別される。すなわち現表土からマイナス一・三m（標高三六三・八m）の地点で厚いスコリヤ層が確認されたけれども、このスコリヤ層こそ住居址面上を被覆する第五層であった。その上層の第四層は一三cmの層厚をもつ黄褐色土層とスコリヤ混入土である。さらに上は赤褐色土と火山灰粒土の混入土層と暗褐色土にスコリヤの混入した土層が土塊状を呈して一部不整合に接している。これを第三層と呼びたい。次に第二層は黒褐色土層であり、第一層というのは二次堆積層のことである。だから、ここにいう第二層（黒褐色土層）が本来は表土層として理解しなければならぬものである。

はじめに住居址の平面形は、ほぼ六角形を想起させる隅丸方形を呈することから指摘しておきたい。しかもこの住居址では埋護が二個体となりあって発見されている。周溝も二条検出された。柱穴は一部が重複している。さらにまた、ここが興味あるところで



第一〇図 大月遺跡第1号住居址面上地質層序図（D-10区北壁）

あるけれども、住居址中央よりやや北東部に奥まって発見された石囲炉は、炉の縁石が北側を除いて位置がずれていたたり、抜き取られた痕跡を辛うじて留めているような状態であった。しかも、抜き取られた縁石は本住居址内で発見されたことから、ここではこの住居址を使用した住人が、住居廃絶の際に炉を壊したものと理解することを可能にするものである。いずれにしても、本住居址は全周拡張がなされているのである。

さて、住居址がどのような状態で発見されたかについて概略述べきったわけであるけれども、本住居址発見の土器は、その出土状態より帰納して以下の三群に分類することが土器の型式の変遷を、ひいては住居址の歴史の意義を理解させやすいように思われる。

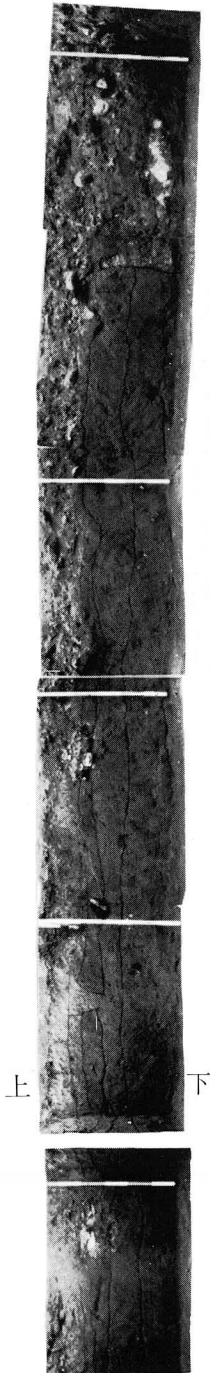
第一群の土器

埋甕(1)である。埋甕は二個体発見されているけれども前記したように周溝も二条検出されてい埋甕(1)が内周の溝に伴なうことから、埋甕(2)に先行するだろうという時間的位置付けをおこなった。とはいえ、型式的には分類するのが困難である。

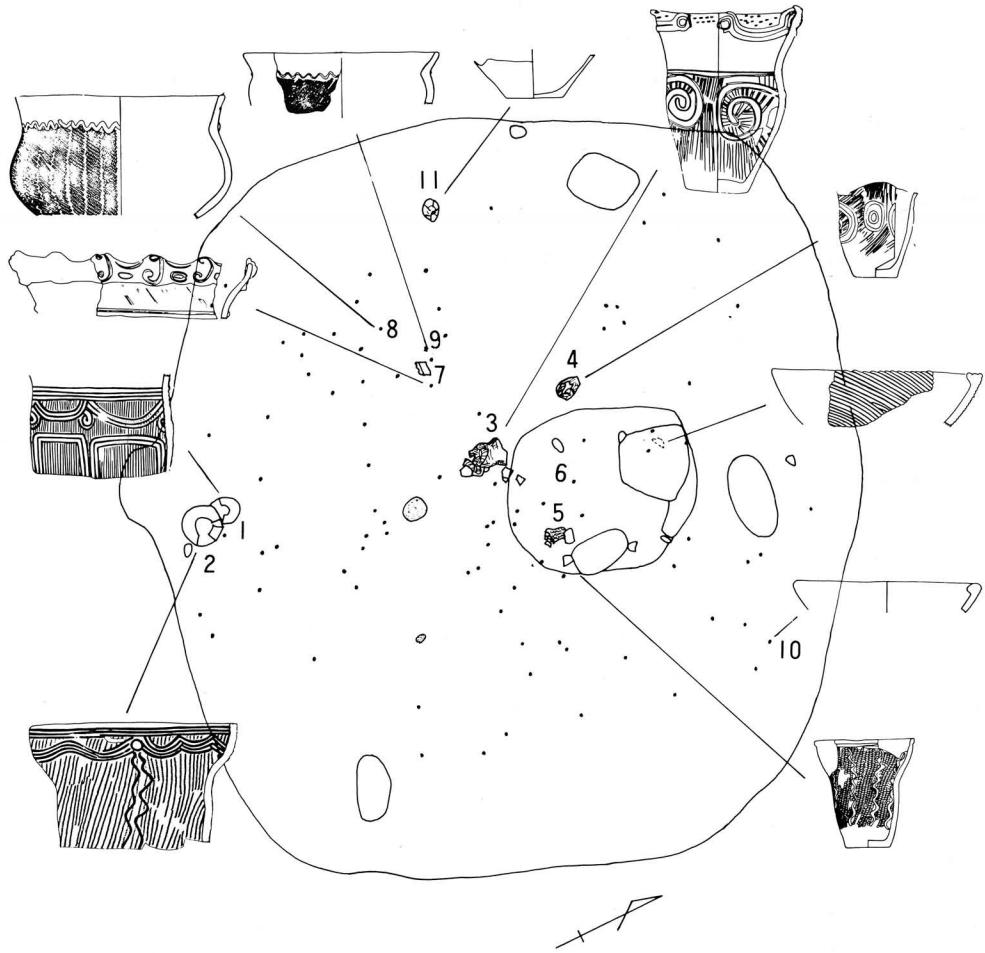
なお、埋甕(1)は住居の南側(入口部と思われる)に正位に埋設されていた。個体は口縁部・底部のほか全周の約 $\frac{1}{2}$ を欠損していた。同一個体と思われる口縁部破片が本住居址床面直上と後述する第2号住居址の覆土中から発見されている。

第二群の土器

いわゆる二条の周溝のうち外周の溝に伴なうと思われるものには埋甕(2)をはじめとして床面直上で発見された(3)〜(6)それに



第一一図 大月遺跡
調査地区層序



第一二図 大月遺跡第1号住居址原位置(土器)実測図

(11)の土器底部である。

(2)は埋甕であり(1)ととなりあつて正位に埋設されていた。個体は底部と器体の π を欠損している。(3)は炉の南西側で炉に近接して発見された。個体は床面に押しつぶされたような状態であつた。(4)は炉の西側約二〇cmの床面上で倒れた状態で発見された。個体は口縁部を欠損している。(5)は炉内の南部で倒れた状態で発見された。個体は口縁部を一部分欠損している以外ほぼ完形であつた。(6)は炉内に倒れていた縁石の下で発見された小破片である。(11)は炉からもつとも離れた西側で直立したまま発見されている。

第三群の土器

おおむね覆土中から発見された土器である。(7)～(10)、(12)～(24)の資料である。

石器

石器は、前述の如く計八点(S_1 ～ S_8)発見された。これからは、第二群の土器に伴なうものと思われる。

S_1 は、炉の北西側約一・二mの床面上で発見された。

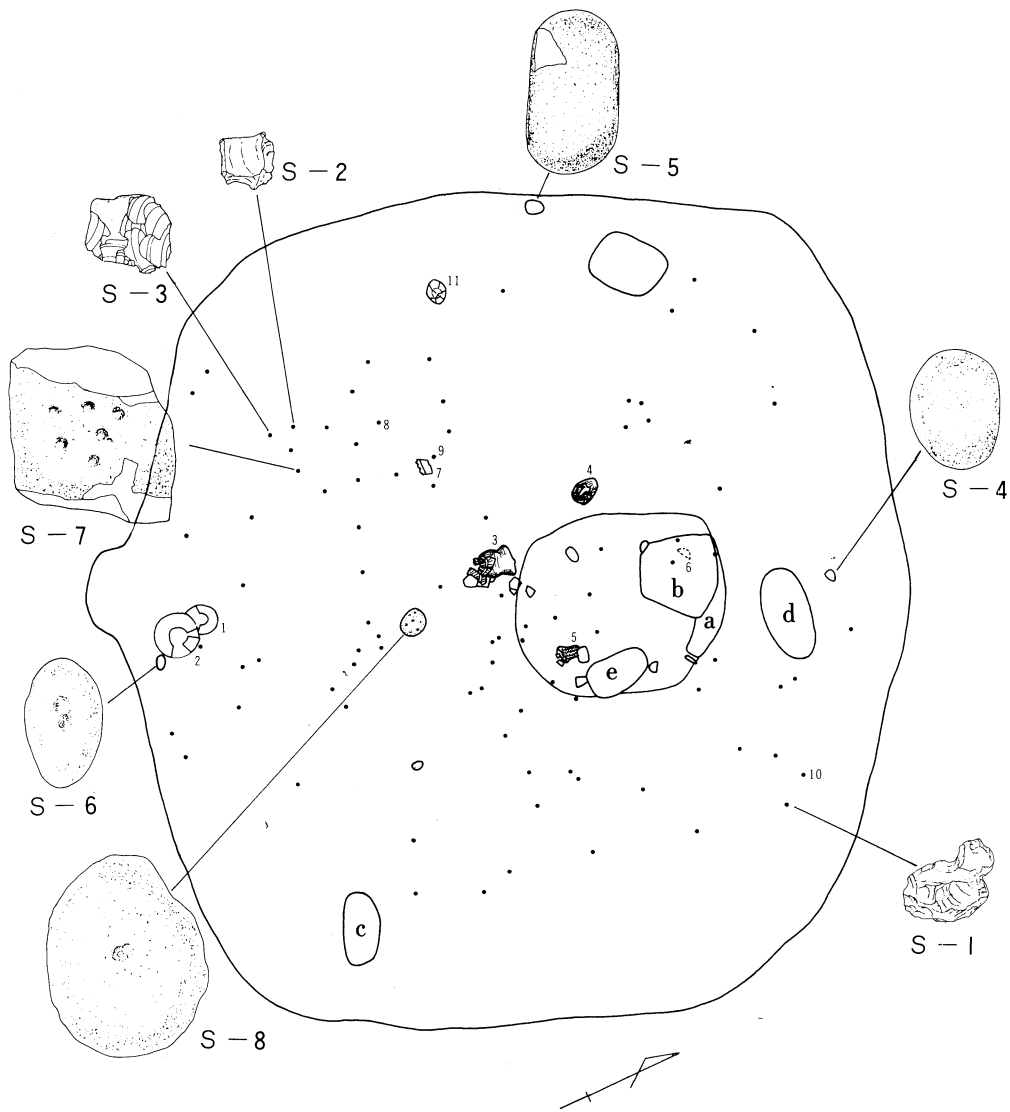
S_2 ・ S_3 ・ S_7 は、炉の南西側約二mの床面上で発見された。

S_4 は、炉の北側約一mの床面上で発見された。

S_5 は、炉の西側の壁際で発見された。

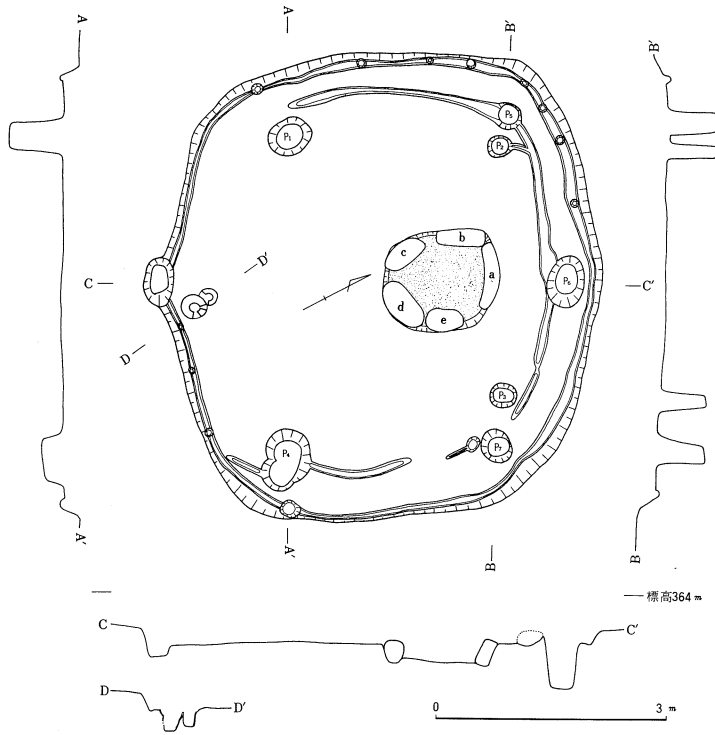
S_6 は、炉の南側で埋甕(2)に接近して発見された。

S_8 は、炉の南側約七十cmの床面上で発見された。 S_1 ～ S_7 が、どちらかと言うと壁際であるのに対して、 S_8 は、住居のほぼ中央に位置する。



第一三图 大月遺跡第1号住居址原位置(石器)実測図

以上、出土土器をその出土状況から三群に分類し、各々説明してきたが、これは、廃棄の同時性という概念を引用することによってより鮮明に把握されるものと考えている。



第一四図 大月遺跡第1号住居址平面断面器実測図

例えば、第二群で、(2)・(6)・(11)を個別にながめると各々個有の器形と文様を持って、必ずしも同時期の所産であるとは言難いが、少なくとも(1)を埋葬として埋設した内周の溝の住人と、(2)・(6)・(11)を床面に残こしていた人々とは、同一人ではなかったかも知れぬという推測を一応は可能にする。

しかし、ここではつきりいえることは、(2)・(6)・(11)の土器が住居の廃絶と軌を一にして廃棄された日常雑器であったことは十中八、九間違い

のないところだということである。

くりかえしいうが、第一群と第二群に分類した土器は親と子、あるいは子どもの、また、子どもである孫くらいの間をへだてていた可能性がないとはいえぬ。しかし、第一群の土器も第二群の土器も、この住居址が廃絶される過程ではじめて廃棄されたものであろうことは疑いのいれようのないものであろう。また、第三群としたもののいくたりかは、第二群の範疇に入れるべきものも少なくないのだろうけれども、大体において住居址廃絶後に一括廃棄されたか、自然埋没の形で埋没したものに違いない。このなかで、いわゆるパターン論を展開させるほどの時間的余裕もまた力も持ち合わさないが、前者に比重をかければ（井戸尻パターン）であり、これに反して後者を中心に考えれば（吹上パターン）ともとれるのではなからうか。率直にいつて、これまでの如く何なにパターンとすみやかに決着をつけることには多少の反省をもってもよいのではなからうか。

すでに述べたように住居は長径約六・二m、短径約五・九mの六角形を想起せらる膨みを持つ隅丸方形の平面形を呈する。壁はほぼ垂直に近く立ち上がり、壁高十九〜二三cmである。

周溝は二条検出された。外周の溝はほぼ全周し、幅六〜十四cm、深さ約五cmである。そして、溝中には径十六〜十八cmの小ピットを存する。内周の溝は幅六〜十四cm、深さ約五cmである。しかし、溝は南側に至るにつれて次第に浅い窪み状になりとどのつまりは不明瞭となる。

床はロームを切って平坦に造られている。又、外帯（支柱と壁との間の空間）北側が軟弱であった他、全体的にきわめて堅緻であった。

炉は中央よりやや北寄りに位置し、長大な河原石で縁取りされた長径約一・四m、短径約一・三mのほぼ方形プランを呈する石囲炉である。炉の内部には焼土の堆積が認められた。

柱穴は径三〇〜六七cmまで、深さは床面より四八〜七二cmまで八個、南側（たぶん入口部と思われる）を除いた各隅で検出

された。これらの内、内周の溝に伴なうものは、 $P_2 \cdot P_4 \cdot P_7 \cdot P_9$ の四本である。外周の溝に伴なうものは、 $P_2 \cdot P_3 \cdot P_5 \cdot P_6 \cdot P_8$ の五本である。尚、 P_1 は柱穴ではなく他の施設と思われる。

埋嚢は、南側（入口部と思われる。）に二個体（(1)・(2)）正位に一部重複した状態で埋設されていた。尚、(1)は口縁部及び、片側半分を欠損していた。これは、両者が同時に埋設されたのではなく、(1)が埋設後、同じ場所に(2)が埋設された為に、(1)は(2)によって壊されたものと思われる。

出土遺物は、床面から埋嚢二個体（(1)・(2)）をはじめ六個体分（(1)・(6)・(11)）その他に、床面直上の土器（(7)・(10)）を合せると計十一個体分の土器が発見された。

石器は、石匙（ S_1 ）・石核（ $S_2 \cdot S_3$ ）・磨石（ $S_4 \cdot S_5$ ）・凹石（ $S_6 \sim S_8$ ）等、計八点発見された。

（奈良泰史・平松康毅）

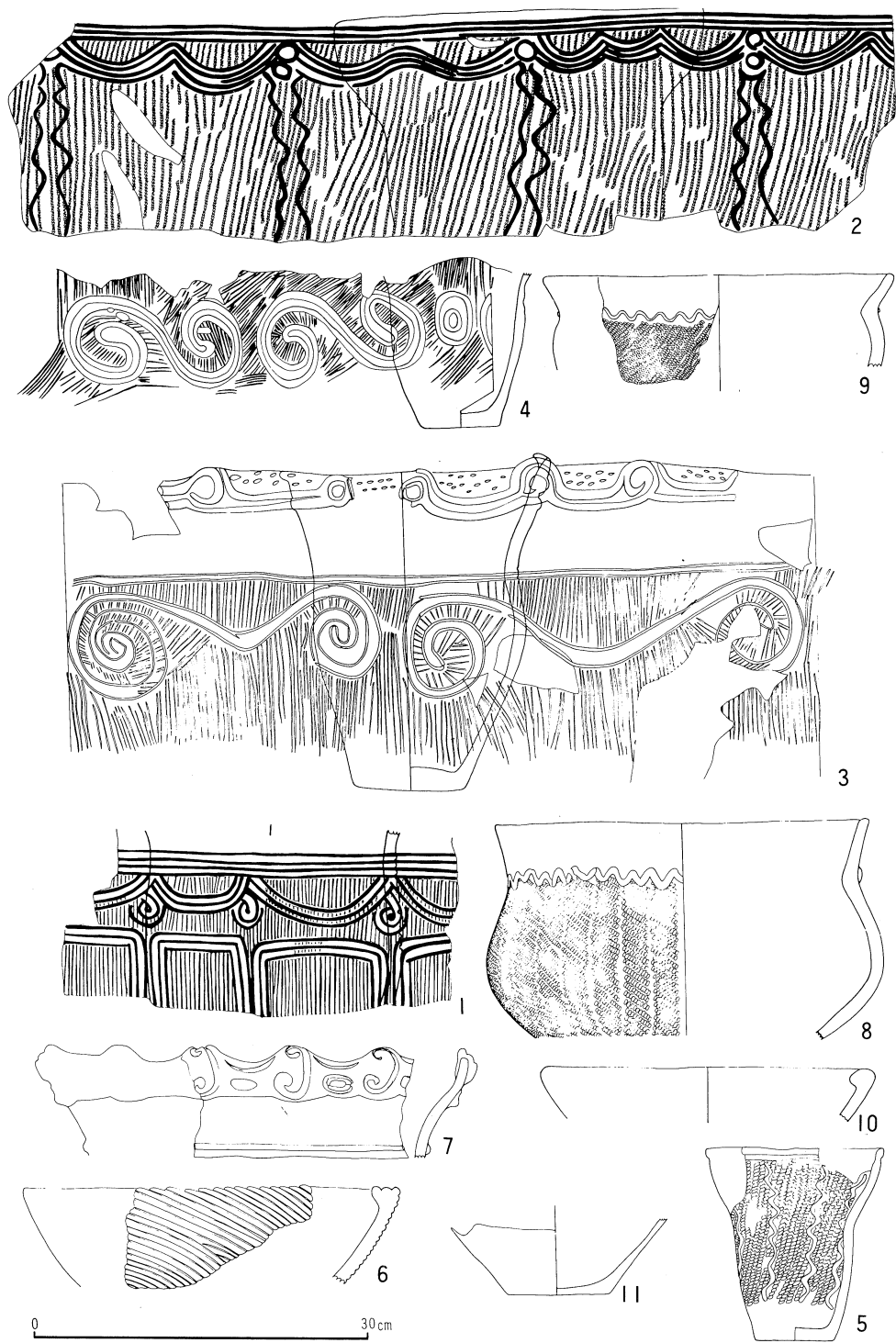
遺物 土器

○第一群土器

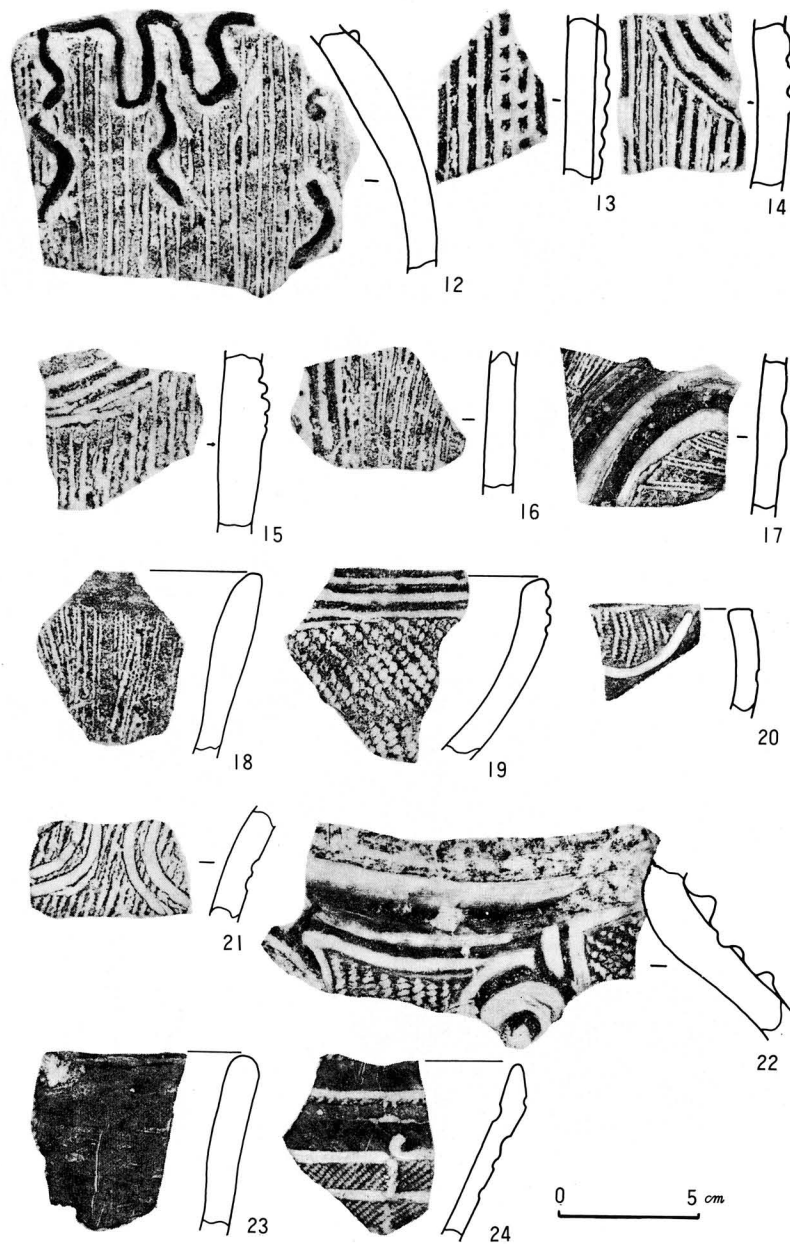
前述の如く内周の溝（古期住居）に伴なうものである。残存したのは(1)のみである。

(1)は現存器高約十七cm、口径約二三cm、口縁部・底部を欠損した深鉢形土器である。第一住の床直及び第二住の覆土中から発見された口縁部破片を合せて推定すると、この土器の器形は、口縁部に最大径を持ち、直立した口縁から緩やかなカーブを描いて胴部へ続き、胴部でやや膨みを持ちながら底部へと至るものと思われる。

文様は、口縁部では貼付によって四単位の渦巻文が施文され、その区画内は太い沈線によって充填されている。頸部は無文帯が形成され、胴部は半截竹管による条線を地文とし、同じく半截竹管によって四本の沈線をめぐらし、その直下に六単位ず



第一五图 大月遺跡第1号住居址出土土器実測図



第一六图 大月遺跡第1号住居址出土土器実測図

第5表 大月遺跡第1号住居址柱穴深度一覽表

柱穴番号	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇
深度 (cm)	70 cm	63 cm	65 cm	30 cm	64 cm	70 cm	65 cm

つ三本の弧状沈線、渦卷文、縦帯区画が施文されている。胎土には石英粒を含有している。

○第二群土器

外周の溝（新时期住居）に伴うものである。

土器の構成は、深鉢土器四（2）（5）・甕形土器一（6）それに胴下半部一（11）である。（2）は現存器高約二十cm、口径約三三・五cmの口頸部が膨大し内曲したキャリパー形土器である。

文様は捺糸（L）を地文とし、口縁部には三本の沈線文をめぐらし、それに接するように一または二個の円形沈線文が四単位施文され、その直下から胴部へ二本一単位の懸垂文が垂下している。またこの円形沈線文間は一単位二個（一部三個）の割で三本の弧状および波状の沈線文がめぐっている。胎土には石英及び雲母を含有する。

(3)は、現存器高約二九・五cm、口径約二四・五cm、口頸部外反し、胴部やや膨みを持つ土器である。

文様は、口縁部では貼付により渦卷文が施文され、その区画内は刺突文で充填されている。頸部は無文帯が形成され、胴部は半截竹管による二本の沈線文がめぐり、その直下は二単位の渦卷文が形成され、半截竹管による条線によってその間を充填されている。

(4)は、現存器高約十五cm、現存最大径約十三・四cmである。

胴部には、凹線によってS字状文を二単位、同心円状の不整円形文を一単位表出している。その間は半截竹管による条線によって充填されている。胎土には長石、雲母を含有している。

(5)は、現存器高約一七・五cm、口径約一六cm、口頸部やや内湾気味に開く土器である。

文様は、縄文（LR）を地文とし、口縁部に一本沈線をめぐらし、その直下から懸垂文を十本垂下させている。胎土には、長石を含有している。尚、器壁内面にはススの付着が顕著である。

(6)は、推定で口径三四cmを有する。半截竹管で施文された重弧文土器の口縁部破片である。胎土には、白色、黒色の粒子を含有している。

(11)は底径約九・五cmで、器面はよく研磨されている。また、器内に赤色顔料(?)の痕跡が認められた。胎土中は細粒砂を含まれている。

○第三群土器

住居埋没の過程で土砂と共に流入したもの、および、傍で生活する住人によって廃棄されたものである。

(7)は、口縁部破片で、小突起から口縁部へ渦巻文が垂下している。この渦巻文の間は楕円形に粘土が削り取られている。胎土には、石英粒を含有している。

(8)～(10)は浅鉢土器である。(8)・(9)は口頸部外反し、胴部は膨みを持ち、(8)は胴部に、(9)は口縁部に、それぞれ最大径を持つ器形である。文様は、縄文(LR)を地文に持ち、口縁部は無文で、頸部に波状に粘土紐を貼付している。(8)は口径約三四・五cm、最大径約三六・五cmである。(9)は口径(最大径)約三二cmである。胎土には、それぞれ石英粒を含有している。

(10)は、口径約二八・二cmで丸味を持った口唇部を呈する。胎土には、石英粒を含有している。

(12)～(16)は、条線を地文としたものである。この内、(12)は、条線の上に細かい粘土紐が貼付され、(13)～(16)は、太い半截竹管によって凸線文が表出されている。

(17)は、曲線的な凸線文が施文され、その間を半截竹管による条線で充填されている。

(18)は、条線のみ土器である。

(19)～(22)は、縄文(19)・(20)・(22)・捺糸(21)を地文としたものである。この内、(19)～(21)は縄文または捺糸を地文として、三本の沈線文(19)、また、弧状沈線文(20)・(21)をめぐらしている。(22)は、縄文の地文上に貼付によって渦巻文を表出している。

(23)は、無文土器の口縁部である。

(24)は、(1)～(23)が中期後半（加曾利E・曾利期）の所産であったのに対して、後期（加曾利B期）の所産である。薄手で焼成は良好、色調は黒褐色を呈する。

（奈良泰史・平松康毅）

石器

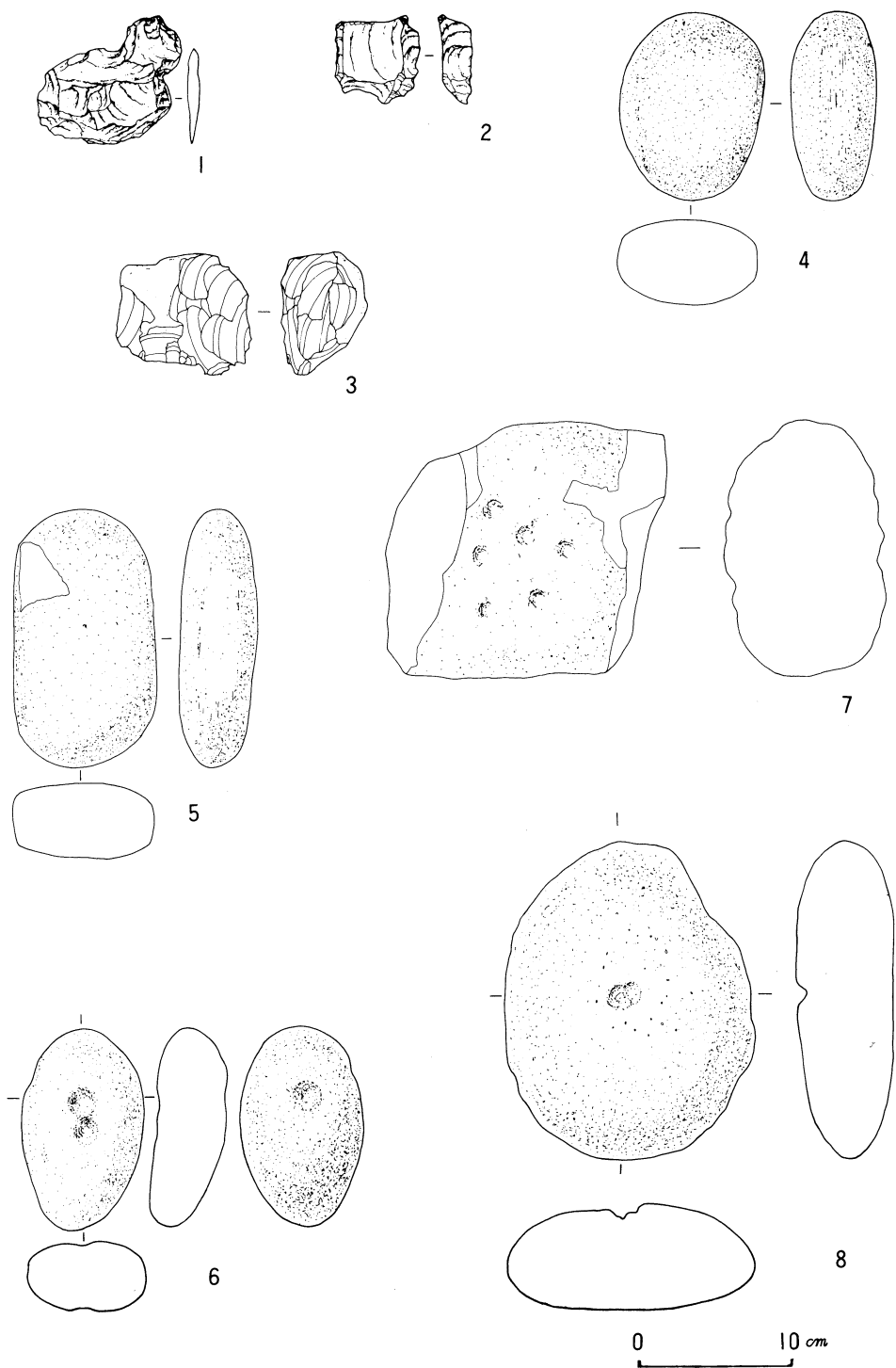
S₁は石墨片岩製。薄い横形の石匙である。こまかい調整剝離によってつまみ部がつくられている。下縁を刃部として使用した可能性が強い。

S₂は緑色凝灰岩製、S₃は砂岩製とともに石核であろう。

S₄・S₅は磨石である。S₄は楕円形を呈し、表裏面ともに磨痕がいちじるしい。S₄は凝灰岩製、S₅は凝灰岩製。

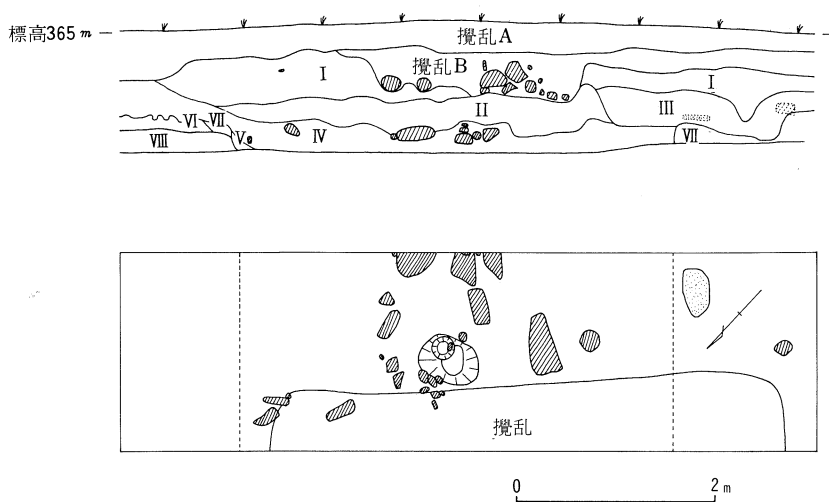
S₆・S₇・S₈はいずれも凹石である。S₆は楕円形を呈し、両面に浅い凹部をもっている。S₇は両端を欠損し、表裏に凹部をもっている。S₈は中央に二カ所の凹部をもち、その一つは三角形状を呈している。中部にはいちじるしい擦痕が観察される。S₆は凝灰岩製、S₇は凝灰岩製、S₈は多孔質安山岩製。

（佐々木克典・平松康毅）



第一七图 大月遺跡第1号住居址出土石器実測図

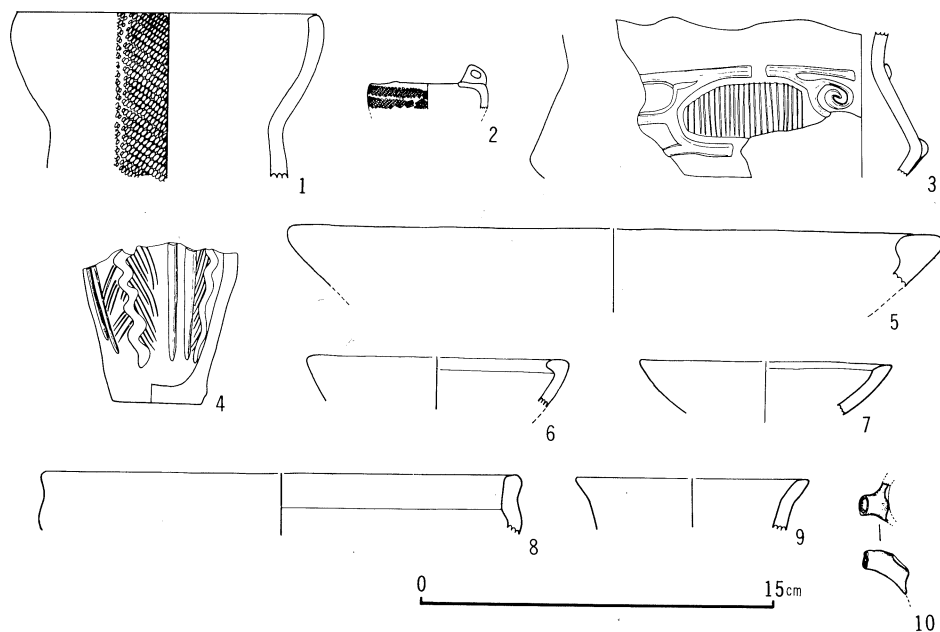
2 第2号住居址



第一八図 大月遺跡第2号住居址平断面図

層位・層序 本住居址は、Bグリッドの0～3に検出されたものである。地表面下約一・三mでローム層になる。I層は攪乱層で砂や小礫を含む褐色土層である。攪乱層の一部はII層に入り大小の石や礫の混入がみられる。II層は細かい礫を含む暗褐色土層である。III層はやや粘性のある暗褐色土層となり、IV層は赤色および白色の微粒子を多量に含む褐色土層となっており、住居址の床面や柱穴などの遺構を伴う土層である。

遺構 Bグリッド0～3付近は、旧校舎の建築の際に攪乱をうけたと考えられ、遺構の確認は困難であったが、I・II層からIII層へと掘り下げて行く段階で、III層下部に土器の小片を含む焼土塊を二カ所検出することができた。さらにIV層へと掘り進むと大小の長方形を呈する石が現われてきた。これらの石の周囲に固い面があり床面であることが確認された。精査の結果、直径約六〇cm、深さ約七〇cmの柱穴を検出することができた。なお2号住居址の床面の範囲は、攪乱やグリッド設定などの関係から明確にすることができなかった。



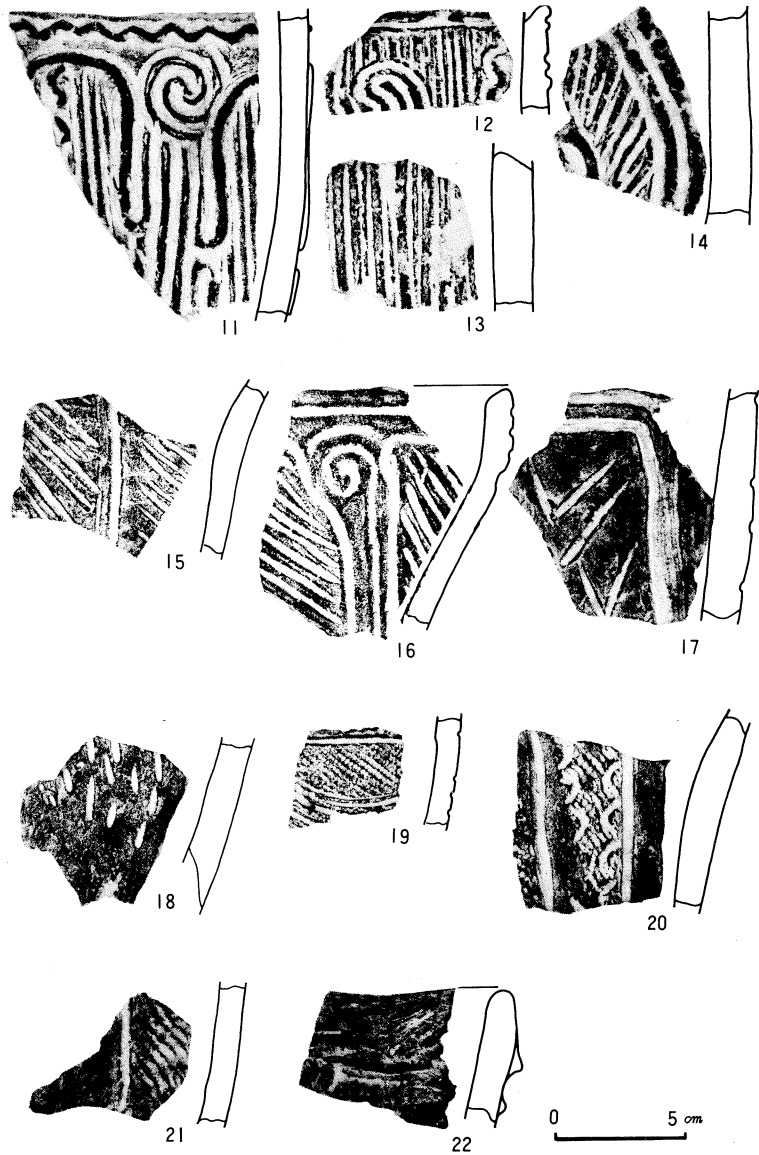
第一九図 大月遺跡第2号住居址出土土器実測図

土器 2号住居址に関連する土器は、縄文中期の土器を主体としているが、わずかに縄文後期の土器もみられる。以下、第二〇図にしたがって説明する。

1は湾曲を呈した口縁部をもつ深鉢形土器の大きな破片であるが、器面全体に縄文を施している。胎土は石英、雲母を含み、色調は茶褐色である。なお、器面の一部に油煙の付着がみられる。2は口辺部が内折し、環状の把手がついている。文様は縄文のみであり、色調は赤褐色である。胎土は粒子が細かく、焼成は良好で、器厚は〇・六cmとなっている。3は隆起帯で区画を構成し、楕円区画の内部に篋状施文具で条線を施している。色調は赤褐色である。4は粘土紐を貼付した二本一単位の懸垂文を四単位施し、その間を楕目文を地文とし、さらに縦に波状沈線を垂下している。胎土は粒子が荒く石英を含み、色調は赤褐色である。5・6・7は浅鉢形土器の口縁部と考えられる。7には口唇部に赤色顔料がみられる。8・9はやや外反する口縁部をもつが、9にも口唇部に赤色顔料がみられる。10は注口土器の注口部であり、口径は約一・五cmある。色調は茶褐色である。11・13は条線を地文とするものである。11は渦巻文や

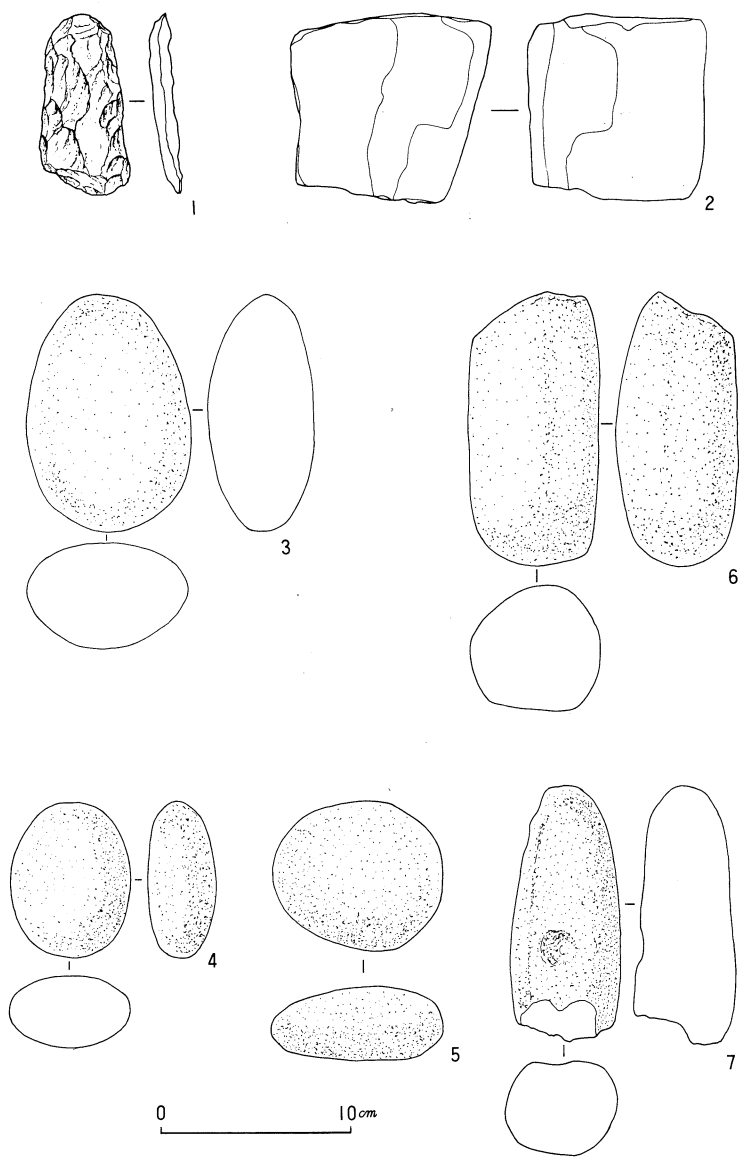
部に綾杉文（ハの文）を施している。18は刺突状の短い沈線を施している。19は沈線区画の内部に撚糸文を施している。20、21は縄文を地文とするが、一部を磨消し、さらに、沈線を垂下している。22は微隆帯をもつ口縁部である。

石器 第2号住居址に関する石器について、第二〇図にしたがって概説をする。



第二〇図 大月遺跡第2号住居址出土土器実測図

粘土紐による波状懸垂文を施している。胎土に石英、雲母を含み、色調は黒褐色である。14、16は沈線区画に斜状の沈線を施しているものである。16は深鉢形土器の口縁部であり、沈線区画の間を飾る渦巻文の端を垂下させている。色調は淡黒色である。17は沈線区画の内



第二一図 大月遺跡第2号住居址出土石器実測図

1は泥質片岩製の打製石斧である。2は花崗閃緑岩製の石器であるが、欠損部分が多く形は不明である。3～6は磨石である。3は砂岩製、4・5は玲岩製でいずれも楕円状を呈し、よく磨かれている。6は凝灰岩製で形もやや細長くなり、底部と

見られる部分は著しく磨耗している。7は礫岩製の凹石であるが、形は丸棒状を呈している。

なお出土した石器の石材は、花崗閃緑岩が笹子峠付近や真木川上流に分布することや、さらに桂川流域などにも、礫岩・安山岩・凝灰岩・玲岩などが分布することから、これらを入力して加工したものと考えられる。

(田代 孝)

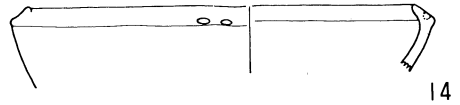
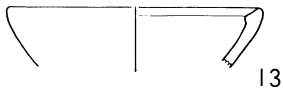
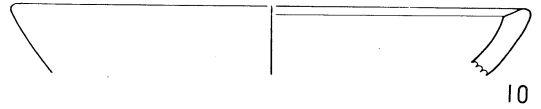
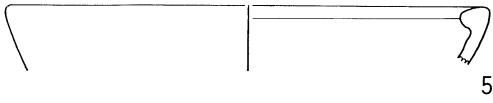
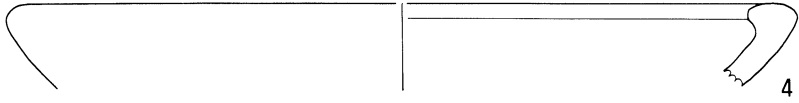
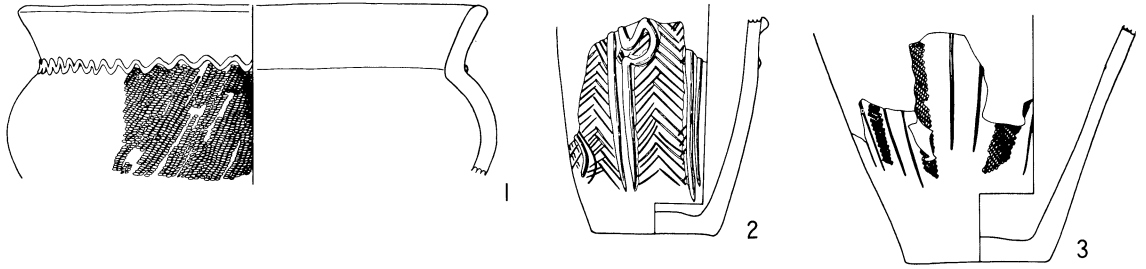
3 各地区出土の土器・石器

遺跡の発掘調査は、グリッド方式によったが、遺物の出土状況はⅡ層からⅢ層に多くみられた。さらに、発掘調査区を東西に二分した場合、その西側に第1号住居址、第2号住居址が発見されており、この間における各グリッド内に、より濃密に見られているのである。なお、遺物は縄文中期末葉を主体とし、後期も若干含むと考えてよいであろう。

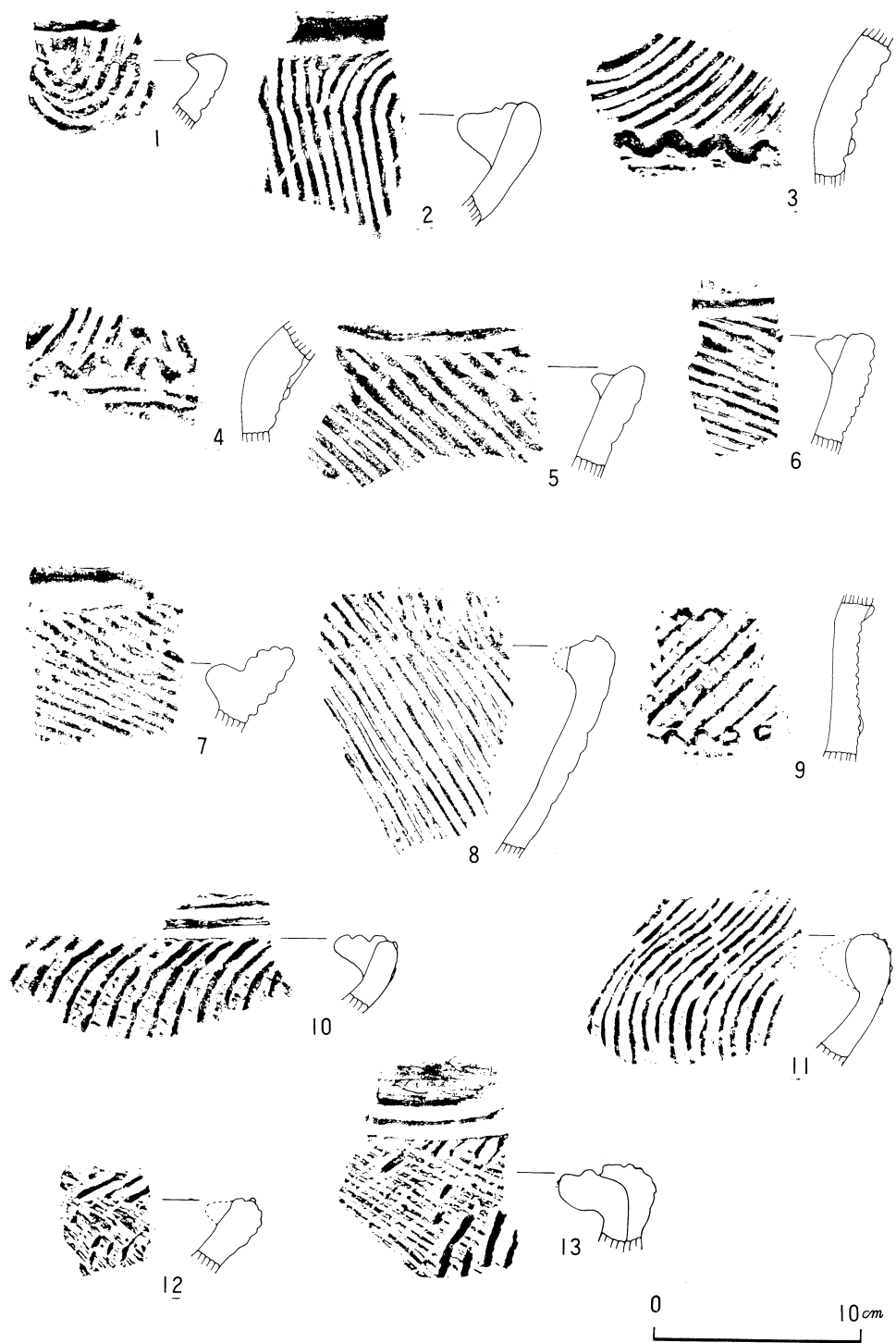
各地区出土の土器について、第二二図、第二三図、第二六図にしたがって概説をする。

第二二図の1は甕形土器の大きな破片である。縄文を地文とするが、頸部に粘土紐を波状にめぐらし、口縁の無文部とを区画している。胎土に石英を含み、色調は赤褐色である。2は底部と胴部の一部を残している深鉢形土器と考えられる。綾形状に施文し、粘土紐を二本一単位として垂下している。3は深鉢形土器の底部と胴部の一部である。磨消し縄文が施され、沈線が垂下し、八単位の区画を構成している。色調は茶褐色である。4、14は浅鉢形土器の口縁部と考えられるものである。

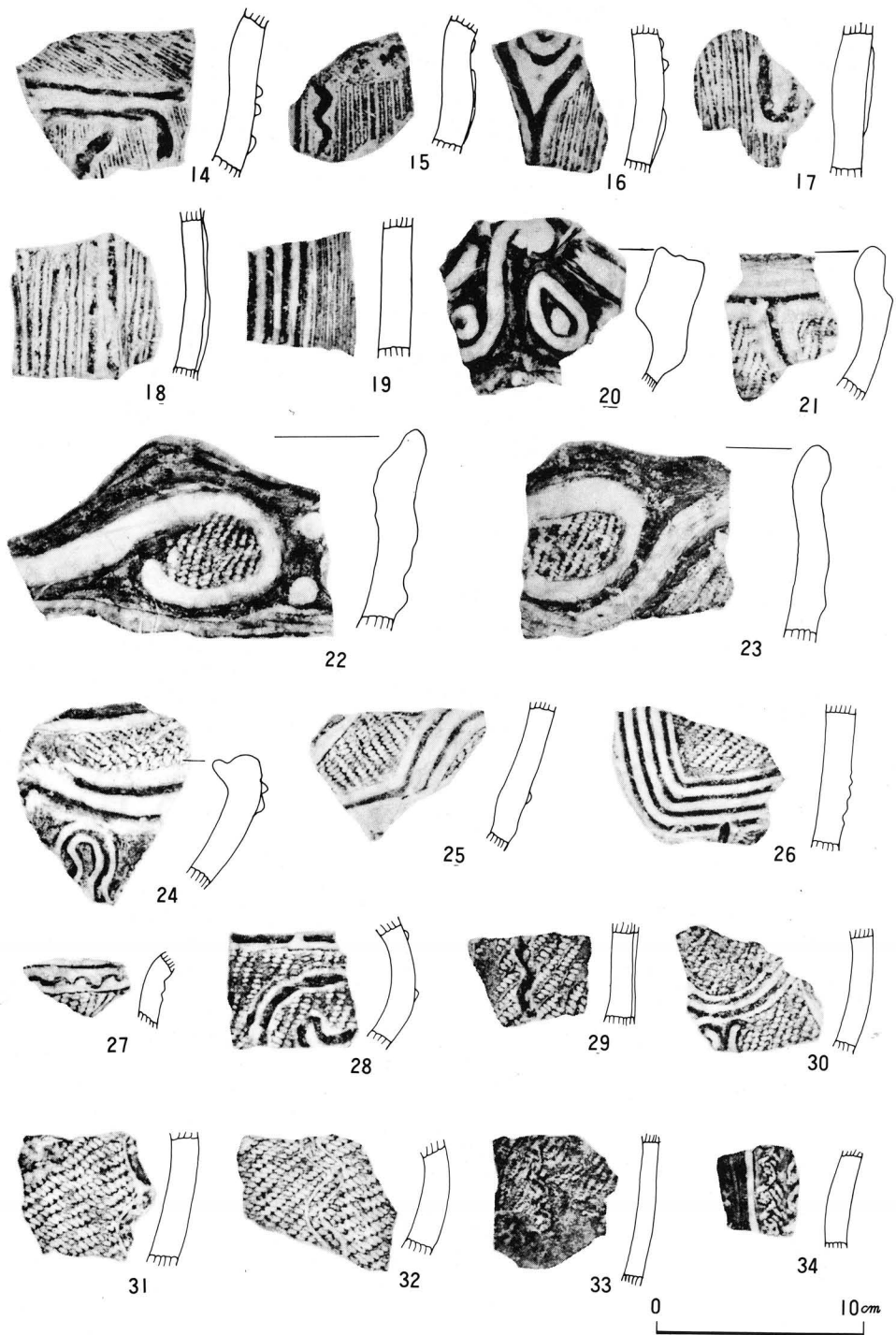
第二三、二六図で1、13は甕形土器の口縁部であり、1、4はいわゆる重孤文であり、5、8は斜状の沈線で口縁部を埋めている。9、13は地文に斜状の沈線を描き、その上に粘土紐を貼付し、網目文を構成している。14、19は条線を地文としたものであるが、14、18は粘土紐を貼付している。21、37は縄文を地文とするものである。22、23は波状の口縁をもち、太い沈線を施すことによって半肉彫的な文様となっている。21、24、29は粘土紐や微隆起帯を施したものである。30、37は沈線を施したものである。35は半截竹管様工具で施文し、口縁部を連孤状の沈線で区画し、上部は無文で下部は縄文に縦の波状沈線文や沈線を施し、さらに凹文に楕円状の沈線文を垂下させている。38、40は楕目文を地文とし、波状沈線文を施している。50、52は楕円状施文具を刺突してできる楕円文によって文様を施している。41、49は綾杉文をもつものである。41、46、49は沈線による区画を構成し、その内部を綾杉文（ハの字文）でうめている。41の器形はやや屈曲するが、多くは屈曲の少ない深鉢形を呈する。49は綾杉文



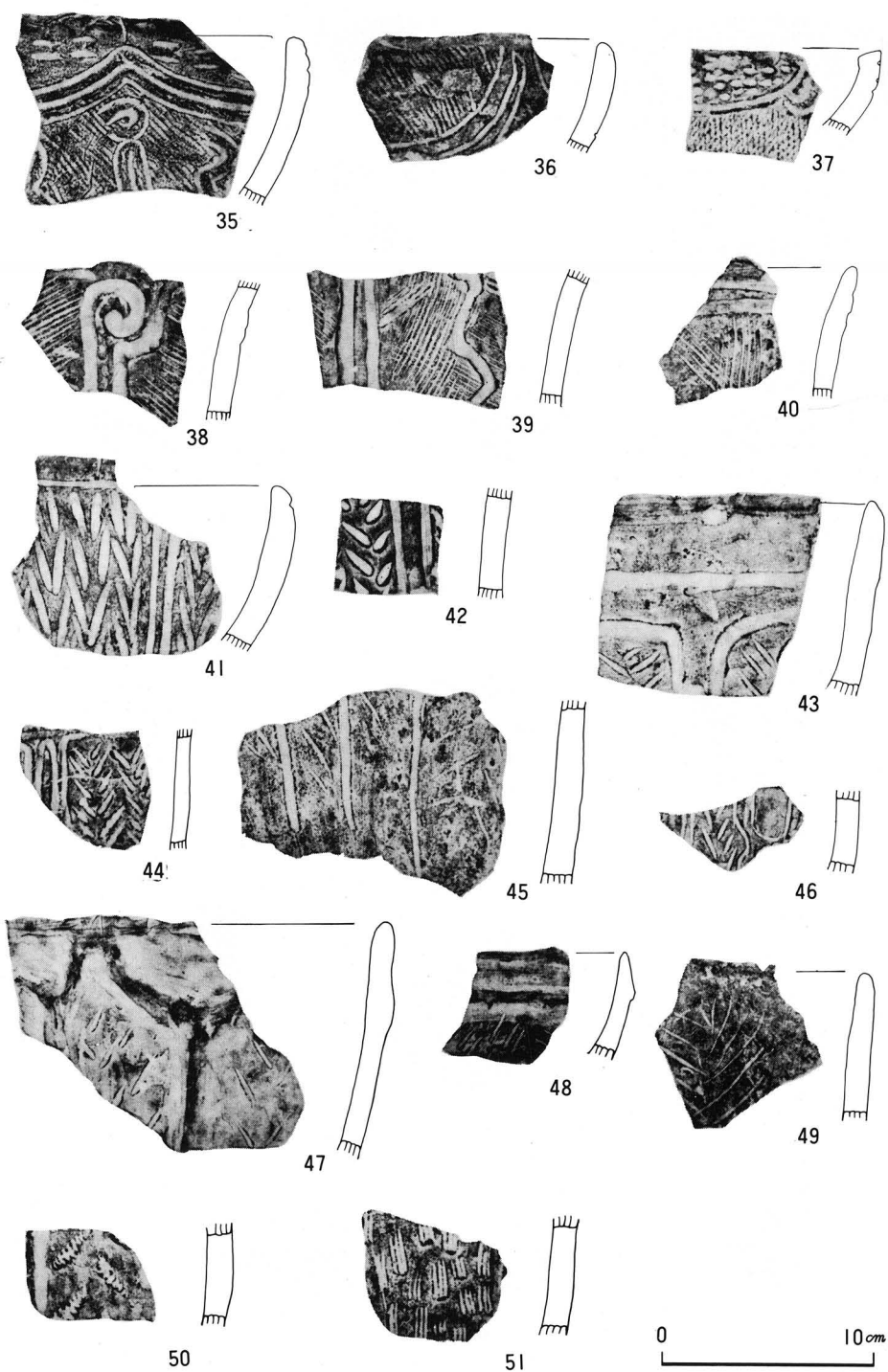
第二二图 大月遺跡各地区出土土器実測図(1)



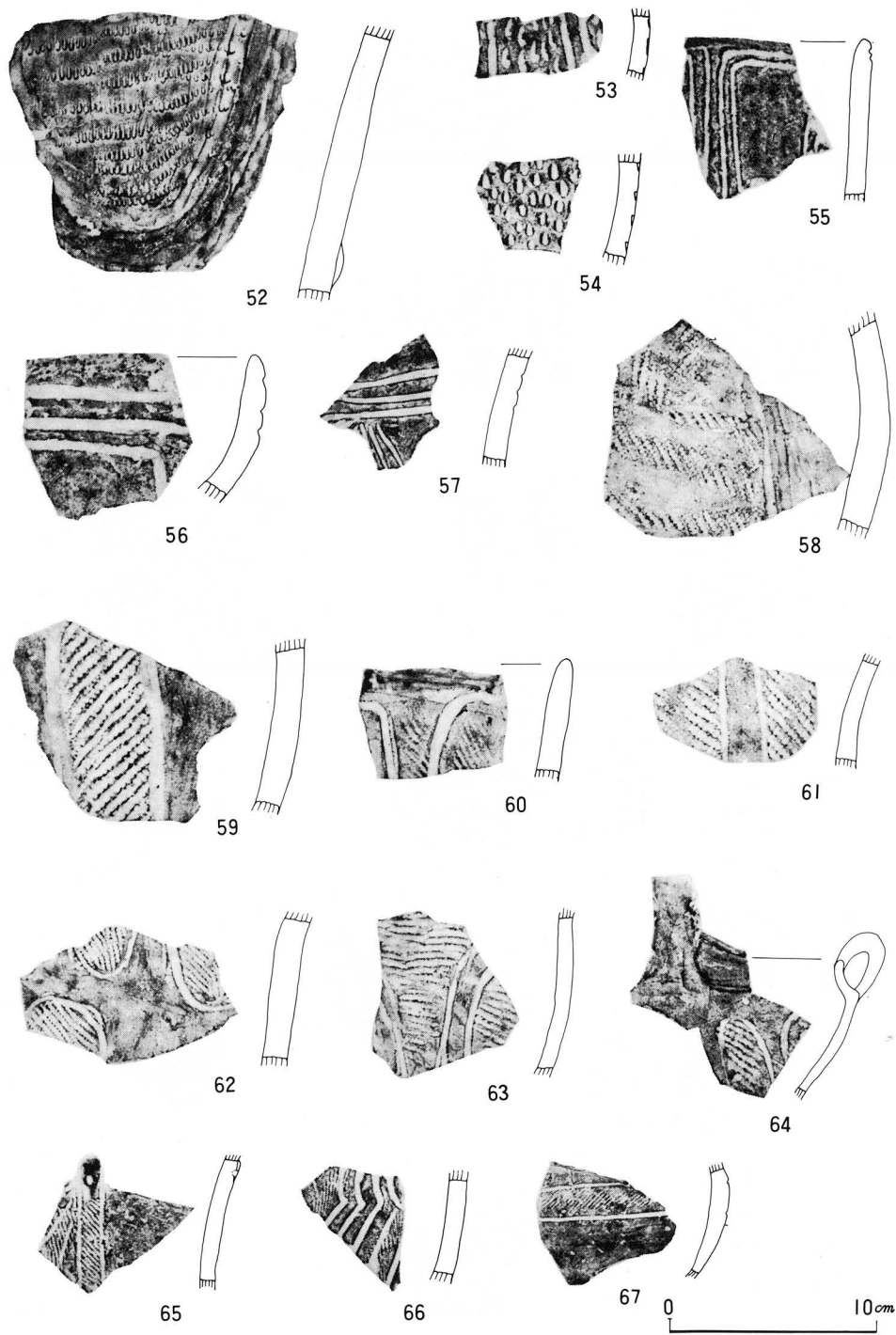
第二三图 大月遗迹各地区出土土器实测图(2)



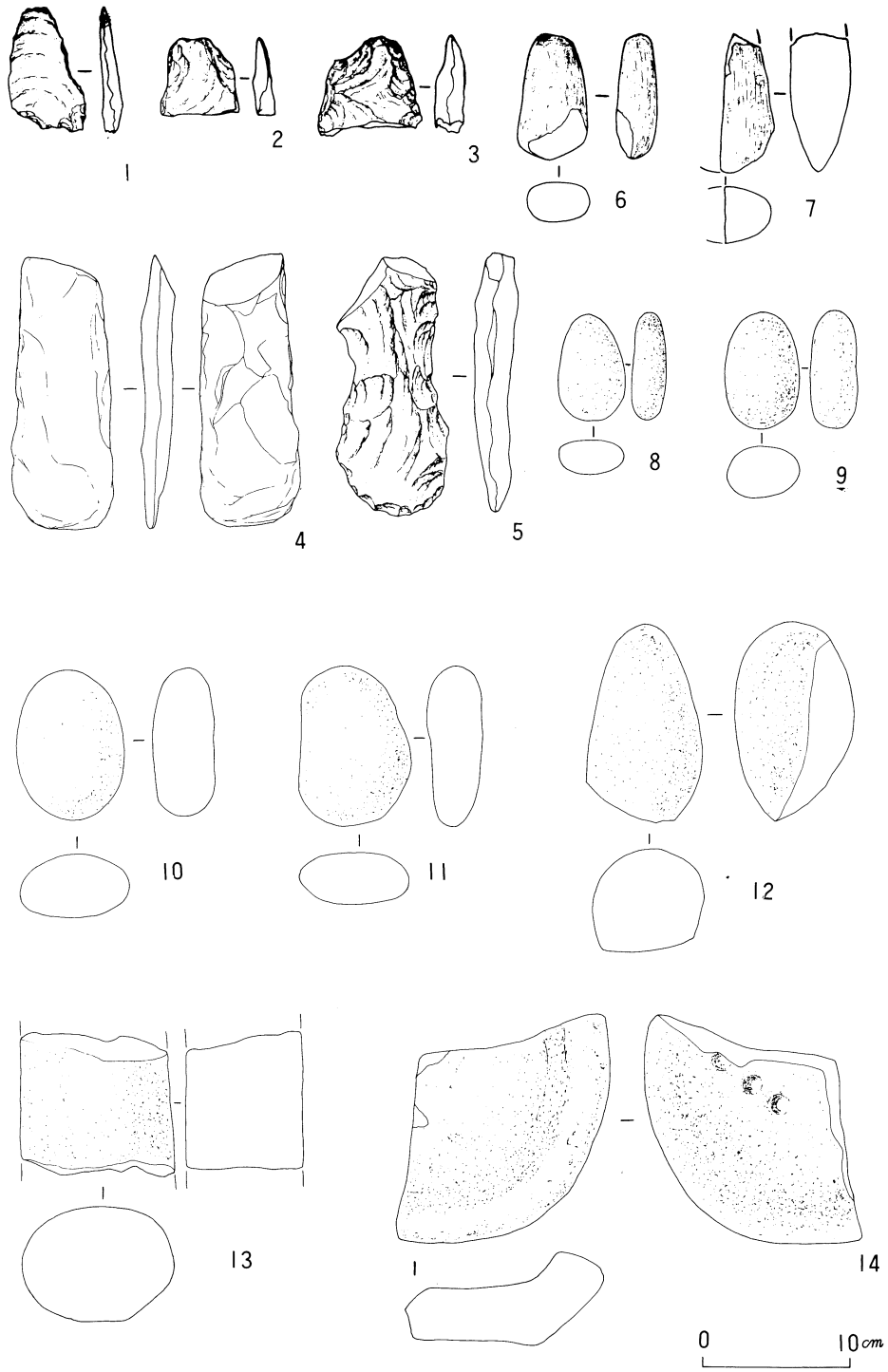
第二四图 大月遺跡各地区出土土器実測図(3)



第二五图 大月遗迹各地区出土土器实测图(4)



第二六图 大月遺跡各地区出土土器実測図(5)



第二七图 大月遺跡各地区出土・表面採集石器実測図

が粗雑であり、区画がみられない。47・48は隆起帯による区画をもつものである。47は口縁部に孤状の隆起帯をめぐらし、さらに隆起帯を垂下させ縦区画を構成し、その内部は綾杉文を施している。53・54は沈線区画の内部に刺突文を施している。55は沈線による区画文を構成しているものである。58は繩文を地文とし、磨消繩文の手法による文様をもつものである。59・61の沈線が直線のもの、62・63の沈線が楕円を描くものに分けられるが、60のように両者をあわせたような沈線をもつものもある。64は器厚が薄くなっている。64は環状の把手が付き、黒褐色を呈している。65は小突起を付し、丸棒状の施文具により刺突文を施している。

各地区出土の石器について、第二七図にしたがって概説をする。

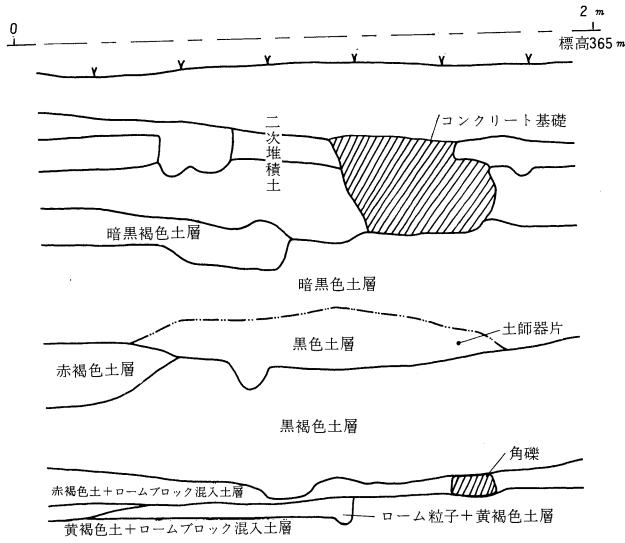
1は砂岩製で調打痕がみられる剝片石器である。2は石斧である。2は砂質片岩製、3は砂岩製の打製石斧であるが、両方とも半分以上を欠損している。4は千枚岩製の短冊形の打製石斧で、約一九cmある。5は玄武岩製の分銅形の打製石斧で、約一八cmある。6は輝緑凝灰岩製、7は砂岩製の磨製石斧である。8は磨石である。8・9・12は玲岩製、10は凝灰岩製、11は多孔質安山岩製である。13は多くを欠損しているが、安山岩製の石棒である。14は表面採集されたもので、安山岩質凝灰岩製の石皿である。底部には凹が三カ所みられる。

石器の材質の同定及び産出地については県庁企画調整局和田勉、山本幹雄技師にご教示いただいた。

(田代 孝)

第三章 歴史時代

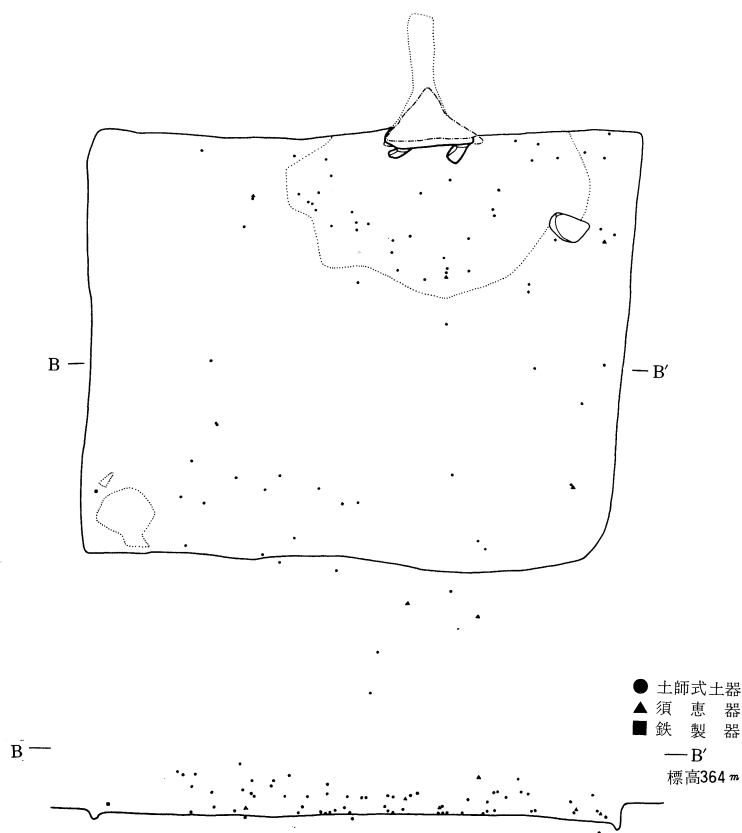
1 第3号住居址



第二八図 大月遺跡第3号住居址面上層序実測図 (E-15区東壁)

層序 本住居址はE-15～17区で発見され、F・G-15～17区を拡張・発掘して完掘された。

住居址面上の層序は、大よそ四層(第I層～第IV層)に分類される。住居の廃絶と軌を一にして(?)はじまった塵芥および土砂の堆積は、床面のすぐ上がロームブロックを混入した赤褐色土層であるけれどもこれは自然堆積とは考えられず、その上層の第IV層は黒褐色土層、第III層赤褐色土層または黒色土層、第II層は暗黒褐色土層、その上層はいわゆる二次堆積層(攪乱層)である。現表土より床面まで約一・五mを測る。**出土状況**、完形で出土した土師器、須恵器は一点もなく、すべて破片である。須恵器は数が少なく、しかも住居址床面直上ではなく、堆積土中より散在的に出土している。遺物は、カマド周辺部と南西隅に集中してみられる。前者は、焼土(灰)中より検出された遺物が比較的多く、床面直上のものは少ない。床面直上で、土師器(甕)の一括土器がみられるが、焼土



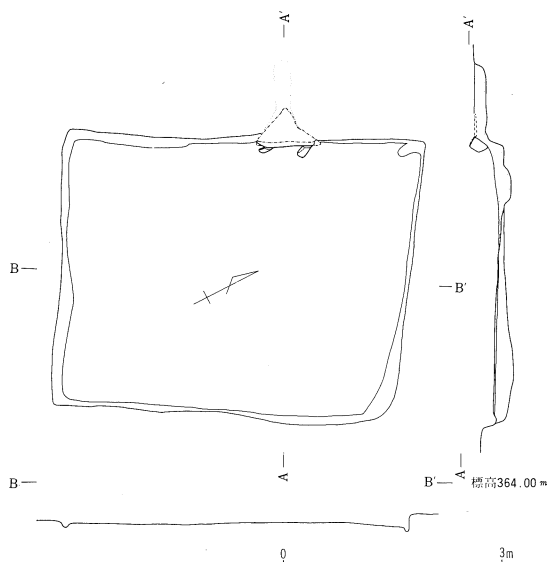
第二九図 大月遺跡第3号住居址遺物原位置図

中央部より北壁にかけて約一三〇cm四方に散在していた。これらはおそらく原位置をとどめていないものと思われる。後者は、ほとんど床面より約四〇cm高いレベルで検出され、堅穴外より出土しているものも多い。多分後世の攪乱によるものであろう。

カマド付近に、約二七五×一四五cmの長方形を呈し、最大厚約一〇cmの焼土・灰の堆積が認められる。これと同じく、南西隅においても約五〇×五五cmの帆立貝状のものが検出された。これらは、カマドの焼土・灰を掻き出したものと思われる。

この南西隅の焼土に隣接し、南壁より約一〇cm地点でケヌキ状鉄製品が検出されたが、これは特記に値する。出土状態は、床面より約一〇cm高く、つまみ部が南壁を向いて検出された。

これら結果から帰納して、本住居址廃絶の



第三〇図 大月遺跡第3号住居址平断面図

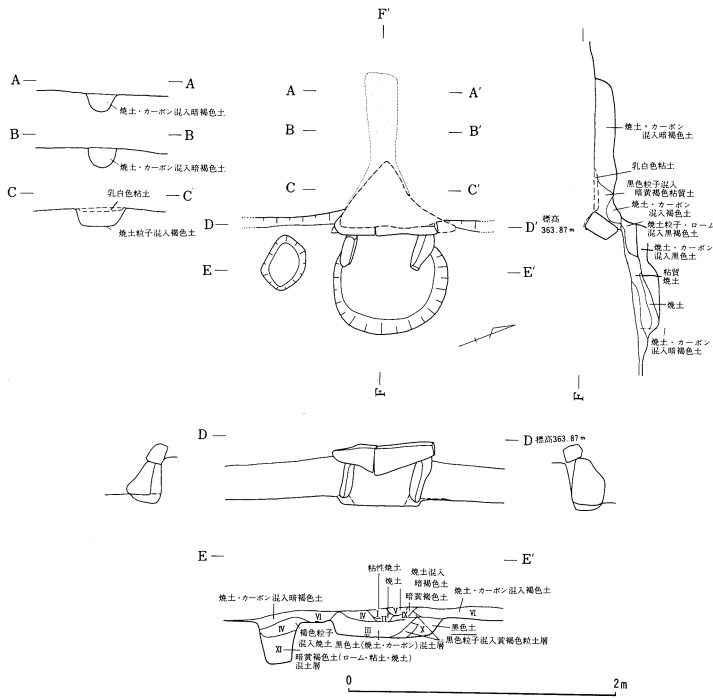
際に多くの遺物は、何らかのかたちで外部に運び出されたものと推測される。

遺構 平面形は、隅丸方形を呈し、長径約四・九m、短径約三・九mを計測する。北壁中央よりやや東寄りにカマドをもつ。床面の標高は、三六三・四〇m。ほぼ平坦で、ルームをベースとして黒褐色土その他の夾雑物で、全面に約二〜四cmの貼床をめぐらしている。この床面は比較的軟弱であるが、カマド周辺部と住居址中央部はよく踏み締められている。周溝は、北辺の一部を除き壁にそって圍繞し、幅約一〇cm、深さ約四〜八cmを測る。若干凹凸があるがほぼ平坦な溝底である。壁はルームを切り込んで最大高約二五cmを測る。カマド東側に約三七×三〇cm、深さ約二五cmの楕円形をした小穴が存在した。柱穴は観察されなかった。

カマドは北壁中央よりやや東寄りに遍在して発見された。遺存状態は、あまり良好ではない。規模は、現存する主軸長約一五〇cm、壁外へ約一一〇cm切り込んでいる。煙道部長さ約六五cm、火焼部約四〇×四〇cmで、火床面は住居址床面を約一〇cm程度掘りくぼめ構築されている。袖部は床面を掘りくぼめ、長

さ約三〇cmの河原石を用い、そのまわりをよく精選した粘土で被覆している。吹放し後方の天井部は、約七七×一五×二三cmの凝灰岩一個（火熱により二つに割れている）が残り、壁内に倒れかけた状態で発見された。袖部同様白色粘土を用いて、煙道の一部まで三角形状に幅広く被覆している。なお、支脚等の遺物は検出されなかった。

（野中和夫・平松康毅）



第三一図 大月遺跡第3号住居址発見カマド拡大図

遺物

A 土師器

甕形、鉢形、坏形などの種類がある。遺物の出土量は少なく、完形品はない。甕形土器と坏が比較的多く出土している。これらは堆積土及び床面直上より出土したものであるが、後者はきわめて少ない。

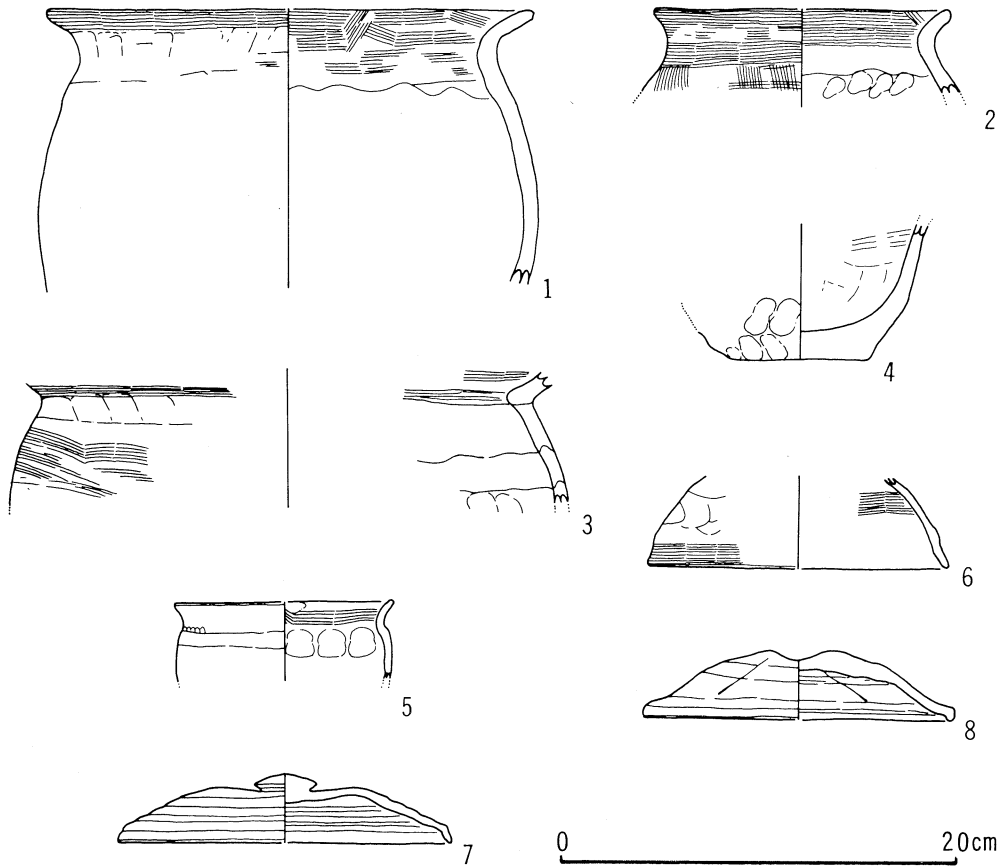
甕形土器 (1)は胴下半部を欠き、口径 cm。口辺部はゆるやかな胸部からいったん立上った後外反している。器面整形は、口縁部横ナデ、頸部は縦方向、胴部は横方向のヘラナデで仕上げており、部分的に前段階の指頭圧痕が観察される。内面整形は、口辺部の横ナデを特徴とし、頸部に輪積みの接合痕をもつ。胎土は良好で、赤褐

色を呈す。(2)は口辺部破片で、口辺部は「く」字形に外反し、横ナデ後下から上にへらをかけて器壁を削りとっている。頸部は横のハケメ、胴部は縦方向のハケメにより整形がなされている。内面は、口縁部横ナデ、胴上部に指頭圧痕を残し、頸部に接合痕を有す。胎土は良好で、赤褐色を呈す。(3)は頸部から胴部にかけての破片である。頸部は大きく外反し、器壁も厚くなっている。器面は横ナデ、胴上部はへら状工具で口辺部を接合しながら整形している。胴部は、ハケメ痕の上に斜めにへら磨きがなされ光沢をもっている。内面は、巻上げの痕跡が明瞭に残り、口辺部はハケメの上に部分的にへら状工具による調整がなされている。胴部は指頭による調整がおこなわれている。胎土中には石英などの夾雑物を含むがきめ細かく、暗赤褐色を呈し、外面には有機質炭化物が付着している。(4)は胴底部のみを残す。平底で木葉痕が残り、胴下半部にかけて二段のカーブをもつて外反している。器面は、下(底)より指頭圧痕による整形がなされ、内面はハケメ痕の上に指頭により仕上げられている。胎土は比較的良好で、暗赤褐色を呈す。

鉢(小形甕?)形土器 (5)は口辺部から胴上部にかけての破片である。口辺部はきつい立上りをしながら外反し、胴部との接合部にわずかに稜をとどめる。器面は、胴部に輪積みの接合痕がみられ、へらで整形している。頸部はへら(棒)状工具により最終段階の仕上げがなされている。内面は、口辺部横ナデ、胴上部には指頭によるおさえの痕跡が残されている。薄い器壁をもち、精選された胎土で、色調は暗褐色を呈す。

坏形土器 (6)は坏蓋口辺部破片である。口縁部で外反し、口縁端部は丸みをおびながらゆるやかに外反している。器壁も外反部は厚くなっている。器面整形は、口縁部横ナデ、肩部はへら削りの後へら磨きがなされている。内面整形は、横ナデ後、研磨された痕跡がある。角ばった石英などの微粒子を含むが胎土は良好で、赤褐色を呈す。

B 須恵器



第三二図 大月遺跡第3号住居址出土土器実測図

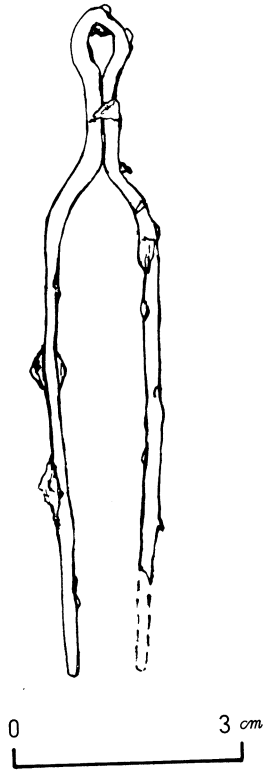
坏の蓋と身を数片出土している。土師器と同様に完形品はなく、すべて堆積土中より検出した。

坏蓋 (7)は口径一六・八cm、器高三・五cm。左回転のロクロ水引き技法で製作され、擬宝珠状のつまみを有す。口縁部はやや外反しながら立上り、口唇部は丸みをおびている。肩部は卷上げの凹凸が明瞭にみられる。胎土は比較的良好で、焼成はよく、灰色を呈す。表面には、まだら状に白、黄、茶色の吹出し釉がみられる。(8)は(7)同様の技法で製作され、口径一五・八cm、

現存器高三・五cm。つまみは失なわれ、痕跡のみをとどめている。口縁部はほぼ直立し、口唇部は丸みをおびた三角形をなす。肩部は約 $\frac{1}{2}$ まで回転へら削りによる二次調整がなされている。胎土は小礫混りで少々荒いが、焼成は良く、灰色を呈する。内外面ともに、いわゆる『ノ』字状のへら記号（窯印？）が認められる。

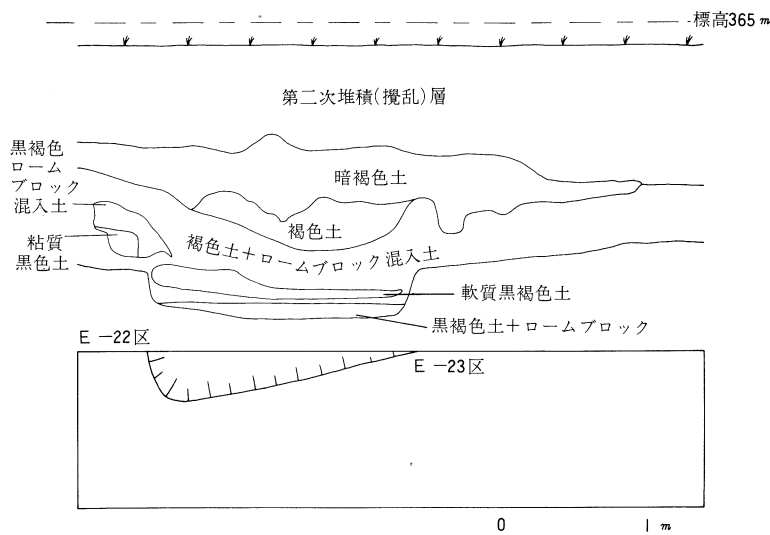
C 鉄製品

鉄製品はケヌキ状を呈し、長さ約一・九cm、最大幅一・七cm。全体に錆がいちじるしい。



第三三図 大月遺跡第3号住居址出土鉄製品実測図

(野中和夫・平松康毅)



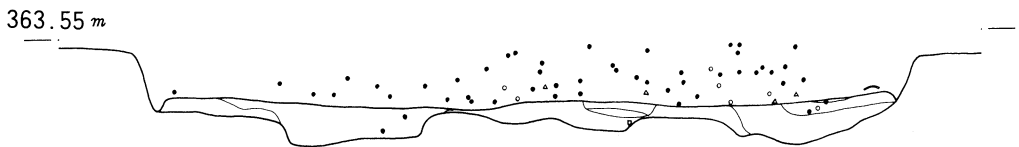
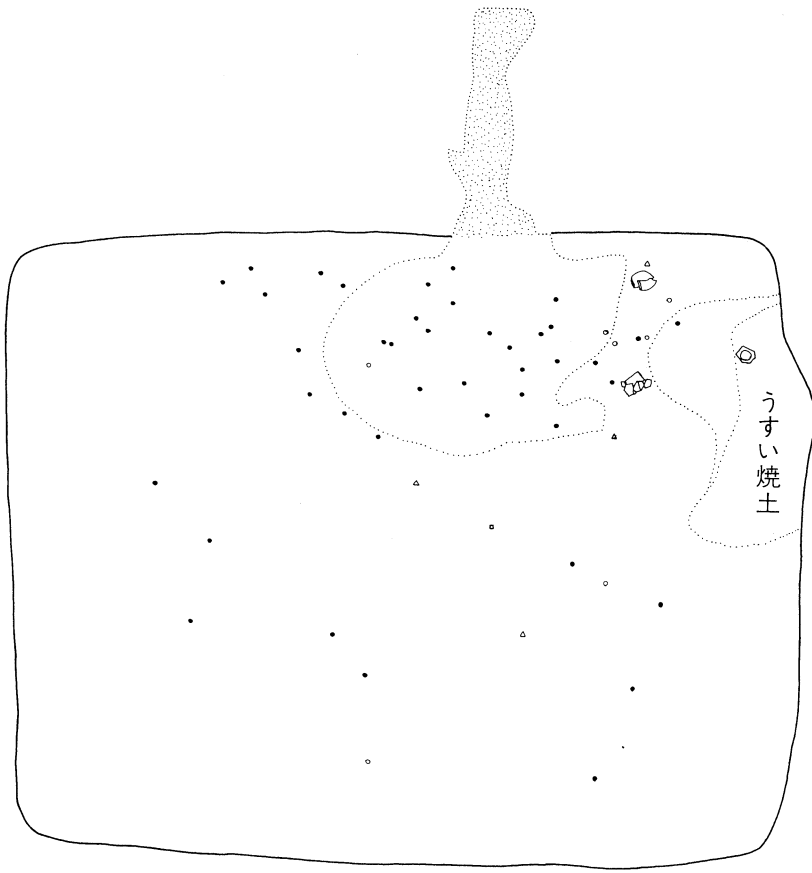
第三四図 大月遺跡第4号住居址面止上層序実測図

2 第4号住居址

本住居址はE-22、23区にわずかに引掛かった。もしE-20、21区や同じくE-24、25区を試掘していたとすれば、文字通り発見されることはなかったし、ひいてはこの住居址が日の目を見ることもなかったに違いない。したがって、住居址の八、九割方は調査区域外に存在し、F・G-22、25区を拡張・発掘して完掘された。第3号住居址との距離は住居址中央部で約一六mの間隔をもっている。

層序 住居址面上の層序は四ないし五層に分類することが可能である。すなわち荒掘りをしたローム層中に黒褐色をベースとしてロームブロックおよびその他の夾雑物で版築(?)された貼床の生活面がある。その上層には褐色土中にロームブロックの混入した土層があり、その間に一層(?)軟質の黒褐色土層が存在する。さらに褐色土層、また暗褐色土層と堆積して最上層である第二次堆積層にいたるのである。現表土から床面までの深さは約一・六五mである。ついでにいうと、断言することははばかられるが、床面すぐ上の褐色土層中にはロームブロックが認められ、場合によっては攪乱のあったことを暗示しているようにも観察される。

前記第3号住居址と同様に文化遺物としては土師器(片)、須恵器(片)および鉄製品が出土している。遺物は住居址床面の貼床下、つまり荒掘部から



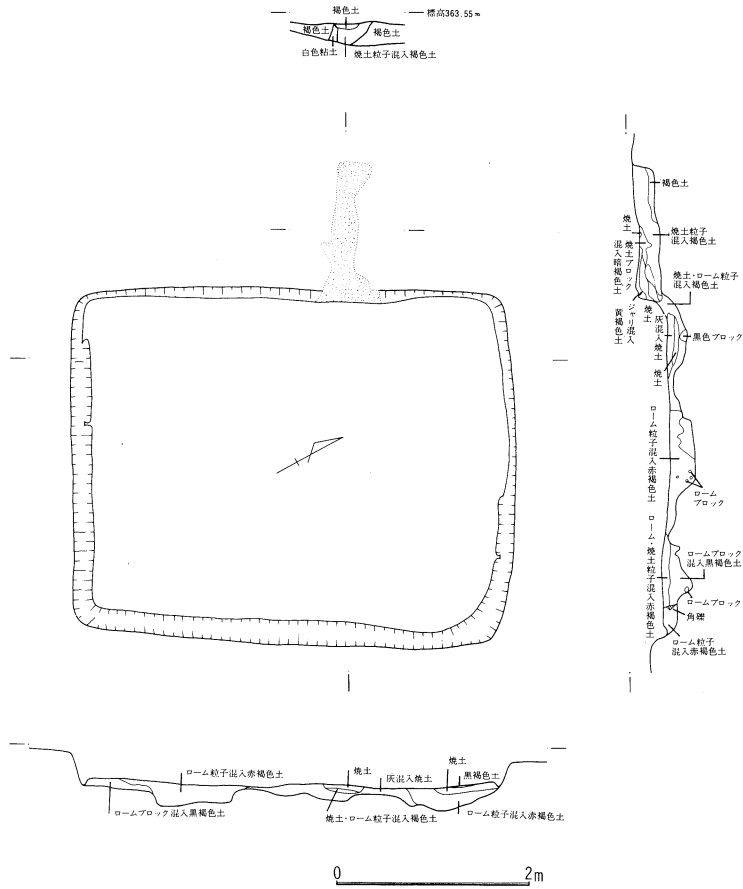
- 土師器 (図示)
- △ 須恵器 (図示)
- 鉄器
- 土師器 (若干須恵器含む)



第三五図 大月遺跡第4号住居址原位置実測図

床面直上、さては四
 ○ cm 上まで散在して
 いた。その出土状況
 は本来カマドの存在
 した部位を中心にし
 て密に、それより遠
 ざかるにつれて比較
 的粗であった。一点
 だけ出土した鉄製品
 は住居址中央部の床
 面直下の荒掘部で検
 出されている。

遺構 平面形は隅丸
 方形を呈し、長径約四
 九m、短径約三・七
 mが計測される。い
 わゆる周溝は圍繞せ
 ず、三方の壁にそつ



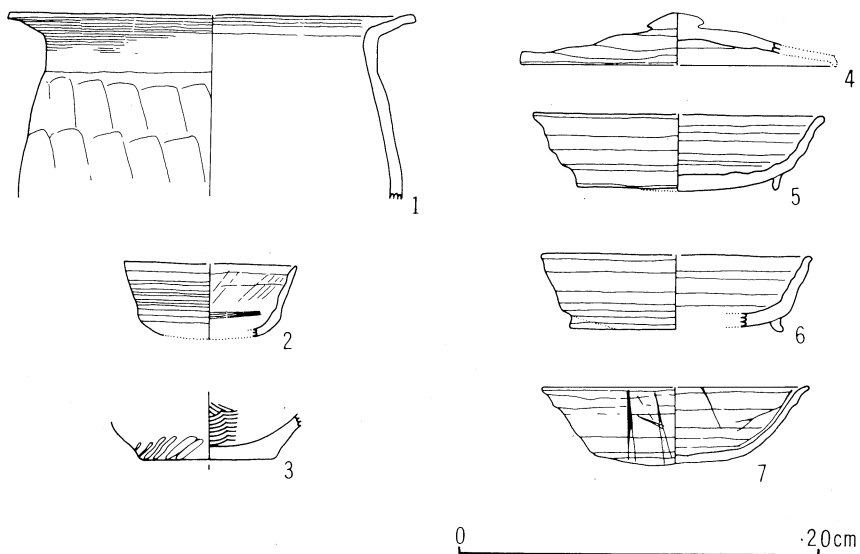
第三六図 大月遺跡第4号住居址平断面実測図

A 土師器

遺物

て施設されているのみである。竪穴の深さ約二〇cmで、床面上の標高は三六三・二二mである。住居址内部の壁面にそって造りつけられたカマドの遺存状態はすこぶる悪かった。焚口部や釜のかかる吹放しの部位(実は、この部分がカマドの一番大切なところなのだ)は壊滅し、その形骸すらとどめていなかった。しかし、カマド存在部には顕著な焼土がみられ、煙道部についても焼土を実見することが可能であった。

(平松康毅)



第三七図 大月遺跡第4号住居址出土土器実測図

整形技法としては、へら状工具による縦あるいは横方向のへらナデ・へラケズリが顕著に観察される。甕形土器は明瞭な輪積み接合の痕跡をのこし、小形土器には胴下半部、ことに底部に移行する部位に指頭圧痕をとどめるものがある。大形品は比較的粗製につくられており、小形の土器は精選された胎土に一辺が○・五mm〜1mmの角ばった石英の細粒砂を夾雑物としてまぜあわせているものが少なくない。色調は赤褐色ないし黄褐色を呈している。底部に木葉痕を残したものもある。

B 須恵器

第3号住居址の出土品と整形技法において一致する。

蓋部は左回転のロク口水引き技法で製作され、いわゆる擬宝珠状のつまみをつくりつけている。肩部には巻上げの凹凸が明瞭に観察される。

本住居址では概して身の部分が多く出土している。水平に近い偏平丸底にいわゆる脚部をもつけたものとそうでないものがある。吹出し釉が観察されるのは第3号住居址出土品中にみたと同様である。

C
鉄製品

長さ七・七cmの刀子状鉄製品である。むろん日常の用（工具？）として使われたものであろう。茎部は平織^{ななこ}とおもわれる布で緊縛されている。



第三八図 大月遺跡第4号住居址出土鉄製品実測図

（平松康毅）

第四章 その他

1 土壙と粘土塊

土壙1 (第四一図、第一九図版)

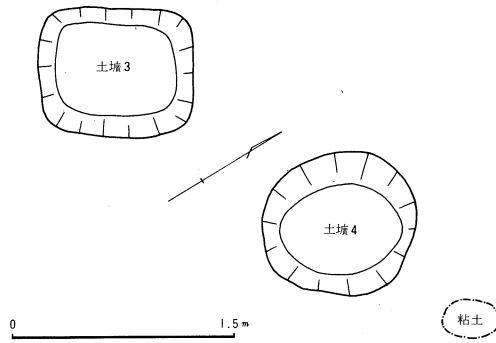
B-11区の表土下一二〇cmの地点で発見された。ザラザラした硬質の黒褐色土中に施設されたもので、直径一〇〇cm前後の不整な円形プランを呈し、平坦な壙底までの深さは約二五cmである。土壙内部は、視覚的には遺構の側壁と判然とは見分けがたい黒色の覆土が充滿していた。

出土遺物は縄文式土器片と土師器片、それに黒曜石の剥片が数点検出されたけれども、いずれも細片で実測不可能な資料である。なお、土師器片のなかには、坏形土器の細片であることがしかと推察されるものもあった。

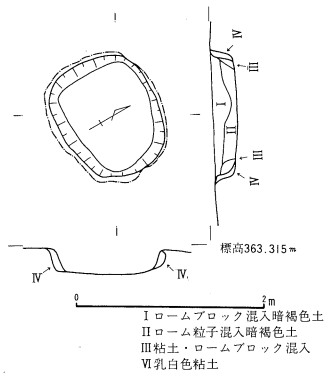
(平松康毅)

土壙2 (第四二図、第一九図版)

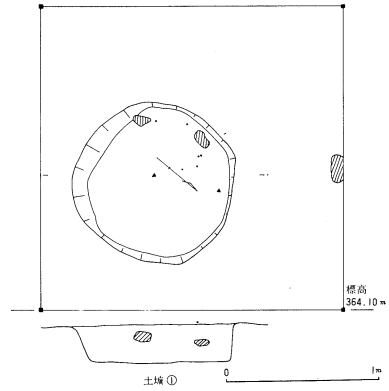
この土壙は、第3号住居址の床面直下のローム層中で発見された。しかし、土壙の



第三九図 大月遺跡土壙粘土塊実測図(1)



第四一図 大月遺跡土擴実測図(3)



第四〇図 大月遺跡土擴実測図(2)

土塊3、4・粘土塊(第四三図、)

これらの土塊・粘土塊は、前記土塊2と同様、貼床になっている第4号住居の床面直下(ローム層中)で検出された。なかでも土塊3は、本来、住居の付属施設であるいわゆるカマドの焚口が存在した位置(ここでは壊滅している)の左側床面直下で発見された。したがって、頭初は第4号住居の貯蔵穴などの付属施設と考えられた。しかし観察したところによれば、むしろ住居のつくられる以前に施設された遺構の可能性が大である。

土塊3は隅丸方形で長径約一〇五cm、短径は九〇cm弱、深さは約一九cmである。

面上にあたる住居の床面はいわゆる貼床であり、したがって本土塊が第3号住居の付属施設である可能性は十中八、九ありえない。

平面プランは隅丸方形を呈し、長径約七〇cm、短径約六〇cmでロームを約一五cm掘り込んでつくられたものである。土塊内の堆積土は一層でロームブロックと暗褐色土の混入土層であった。平坦な壙底を除き、壁面は厚さ約四cmの乳白色の良質粘土で被覆されている。土塊内部から、微少な黒曜石の剥片が一点検出された。ついながら、B-11区で検出された土塊とは、約八〇cmの比高差がある。前者が高位置にあることはいまでもない。

(平松康毅)

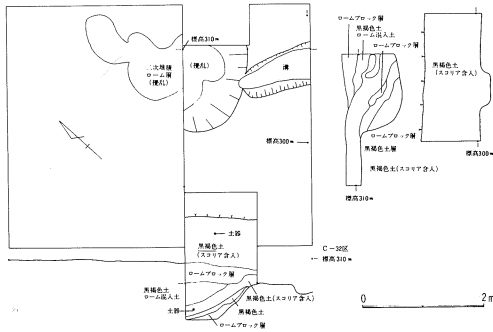
また、土壇4は不整な円形を呈し、直径は約一〇〇cm、深さは一七cmである。覆土はいずれも、ロームブロックと暗褐色土の混土層であった。

次に、粘土塊は四〇×二七cmの楕円形を呈し、厚さ約六cm。いわゆる土壇2の壁面を被覆していた粘土と質を同じくするものである。保存用の粘土塊でもあろうか。

以上の土壇・粘土塊からは、文化遺物はまったく発見されなかった。

(平松康毅)

2 特殊攪乱 (第四四図)



第四二図 大月遺跡特殊攪乱実測図

C・D—32・33区では、一部考古学徒の呼称する風倒木の痕跡が発見されている。これは風で樹木が倒れ、結果として、土層に攪乱が生じた痕跡をかく言うらしい。けれども、樹木は風のみで倒れるものではなく、また「地区と遺構」でも書いておいたように、樹木にかかわって出来た攪乱だとは断言できないうらみもある。われわれは特殊攪乱と仮称することにした。

さて、C—33区の北よりの表土下一一〇cmの黒褐色土層中に、いわゆるスリバチ状の落ち込みが発見された。しかも、それはいつぶう変っていた。なんとなれば、本来のこすべきはずのロームをとりぞかねば落ち込みを明らかにできぬという代物だった。つまり、黒褐色土層中に平面「8」字形を呈すローム塊の広がりがあったと理解すればよい。それで、はじめは何か特別な遺構ではないかと考

えていた。しかし、聞くところによれば、群馬県下の遺跡でも同様のものが発見され、それらはあまねく風倒木と称されているそうである。もし、そうだとすれば、遺構の範疇にはかならずしも入らないが、実測など行なったので、あえて世に問うことにした。大方のご教示を仰ぎたい。

(平松康毅)

第五章 総括

1 大月遺跡の時代と問題点

結論からいうと、今回の発掘調査で得られた資料からその時代を考定すると、縄文中期末葉を主体として一部後期におよぶ縄文時代の文化遺物と、相対年代的にみるとき上限を七世紀中葉における歴史時代の遺物が発見されていて、これに遺構（住居址・土壙）が伴っている。

この点では、第一章・序説の「学史」の項でみてきた仁科の総括となんら矛盾するところはないのである。

しかしながら、仁科が「住居址においては竪穴の存在を認めず、いわゆる平地石畳式のものである」と指摘していたことを考える時、われわれは敷石住居址が発見されてよい時期の遺物を検出していながら、遺構そのものは遂に発見しえなかったことをどのように理解すればよいのであろうか。ひよっとすると、われわれが第1号および第2号住居址と仮称した竪穴住居の廃絶後に、場所を変えて突如敷石住居が現われるとでもいうのであろうか。いずれにしても、仁科の発掘地点はわれわれの発掘地点からはかなり距離をおいて、今後の研究課題とせざるを得ない重要な問題である。つまり、われわれの発掘で敷石住居址が発見されなかったからといって、仁科の報告をけげやかに否むほどの理由はみあたらないことである。それにしても、仁科は石囲炉を検出し、あまつさえ、土器資料は今回われわれの発掘しえた縄文中期末葉期のもと同型式のものを報告していることを考え合わせる時、同一遺跡内でありながら発掘場所によっては住居の形態がこうも変わるものかという疑問の出でくることも否定することのできない事実である。

以上の相違点をのぞけば、石器に粗製品の多いことなど仁科の明言したまさにその通りの結果が出たわけであって、ここに新しく考察するほどのこともないように思われる。ただ、一つはつきりしていることは、大月遺跡はいわゆる環状集落そのものであって、今回われわれの調査で見えられた縄文時代の竪穴式住居址も、その一翼を担っているものと勘案される。

次に歴史時代の竪穴式住居址であるけれども、この遺構は旧北都留郡内における初見のものらしい。これまでも大月・都留両市において土師器および須恵器の発見は報じられていたけれども、組織的調査は程んど行なわれておらず、よって住居址がその全貌を現わにするようなこともなかったらしい。住居址は二軒が二軒柱穴を認めず、その上屋構造を客観的事実として説得性のある記述で説明することは難かしい。とはいえ、四方に立壁をもつて内部空間を広く使用するのがこの時代の一般的な住居形態であつたであろうことだけは言及してもよさそうである。

とまれ、大月遺跡は、今後、断続的にはあるけれども、校舎の改築は両二度行なわれる計画がたっており、ひいては考古学的調査が実施されることになっている。したがって、これ以上の詮索は、むしろ恥のうわぬりをするようなものであろう。

(平松康毅)

2 大月遺跡調査の意義

第1号住居址で観察された住居の増改築と周溝について

住居はふつう築造——使用——廃絶の過程か、築造——使用——増改築——廃絶の四段階の過程を辿るかする。もっとも、増改築は一度ならず二度、三度と行なわれることもある。このような変移のなかで、廃絶から埋没するまでの過程は、土器など文化遺物の廃棄現象と関連させて研究がすすめられている。

ここではむしろ、第1号住居址において看取された増改築について考えてみたい。

すでにみてきたように、第1号住居址では、支柱穴や周溝、ひいては埋甕まで重複した状態で発見された。しかも旧から新へ同心円状のひろがりを示す、いわゆる全周拡張というかたちで増改築が行なわれていた。この点、住居の一方側だけを拡張する張出し状増改築とは、改築の方法そのものが相違するように思われる。すなわち後者は、古い住居址を一部壊せばよいのに対し、前者は屋根の葺き変えもやらねばならず、いつてみればすっかり新築するのと同程度の労働力が要請されるであろう。してみると、全周拡張（増改築）は、これまでのようにひとり居住人口の増加だけで行なわれたとかたずけてしまうのは、うがちすぎといえるのではあるまいか。むしろ、そうした人口増もあったかも知れぬが、他の条件（たとえば、耐久年限がきたとか、火災にあったなど）が加味されて、はじめて増改築が行なわれたのではなからうか。

話をもとにもどすと、こうして第1号住居址では全周拡張の実態が観察されたわけであるけれども（ちなみに奈良泰史の計算では約一三 m^2 の拡張）、さてこれをどのように理解するかについては大きく二つの意見があった。

さて、第1号住居址にはつごう二個体の埋甕があったことはすでに言及済みだが、この土器に直接的な形式的連鎖を認めるかどうか（別にいえば親と子または孫ほどの間隔で型式差が出たと考えるか、それとも数型式のへだたりをおいていると考えるかどうか）にかかっていた。つまり、前者であればほとんど問題は無いのだが、もしも埋甕が数型式のへだたりをもっていうような理解の仕方をすれば、一度は完全に廃絶——埋没していた住居址が幾世代か後に偶然掘り起こされて再利用されたことになるのである。

ところで、われわれ発掘者の間では、はじめから埋甕の形式的連鎖を短かくみるむきと、そうでないとならえ方をする意見に別れていた。こうした対立は、特に科学的な根拠をもたず、いたずらに型式のみを細別する今日の風潮に馴らされた（？）われわれ考古学徒の迷いを証明する何ものでもないように思われる。断っておくが、こうした迷いが滑稽だなどというつもりはない。それどころか型式は細別すればするほど研究が進歩することになるのであろうし、迷いのない、別にいえば疑問をもたず

に研究がすすむはずはないのである。しかし、いずれにしても説得力のある方法で型式を分類し、かつ連鎖を把握しなければ意味はないようにおもわれる。

話はおもわぬ方向に脱線したけれども、われわれ発掘者は再三、再四討論を重ね、そしてひとつの結論をみた。いま、そのいちいちをくわしく述べるいとまはないが、いずれにせよ二個の埋甕は親と子あるいは孫ほどのへだたりでしか型式差をもっていないということに結論がでた。ということは、住居が世襲して使用されることのあることを彷彿させることにもなる。こうして、われわれは人口の増加と耐久年限がほかならぬ全周拡張をなした大きな理由ではなかったかと考えている。

次に周溝は、かつては排水溝と考えられていた。が、第1号住居址の周溝中にはば等間隔で小穴が検出されており、むしろ周壁の土留材を埋めた溝と理解する方がよいであろう。ついでにいうと、同じ大月市内で発見された宮谷遺跡の住居址では周溝のなから土留材が検出されたと川崎義雄から教示されたことがある。

(平松康毅)

埋甕について

縄文中期の関東・中部に埋甕の風習が広く行なわれ、それは出入口近くが多く、この位置の埋甕が胎盤葬と関連したものであろう、と力説したのは桐原健であった。その後、これに輪をかけるような木下忠の精緻な集成が世に問われると、「埋甕イコール胎盤葬」とまるで条件反射の答がかえってくるようになって久しいものがある。にもかかわらず真偽の程は定かでない。というのは、正体をあばこうにも甕の中から何も出てこないし(いや、出入口でない位置にある埋甕からは乳児の骨が一例、またマッチ棒大の四肢骨が出た例もある)、あまつさえ土壌分析でかくかくしかじかの解答が出たなどという話は聞いたことがないから、いまのところ桐原説は黙認されたかたちなのだ。してみると肯定も否定も出来ないままで、その積極的証左の明ら

かになる日を持たねばならぬ。どのみち気の長い話なのである。

ところで、その桐原や木下はというと、民俗学を援用しての解釈であった。つまり、信州諏訪地方でも胎盤は屋敷の出入口、多くは沓ぬぎの下にかけては埋められた、と藤森栄一も言及しているけれども、そうした風習を埋嚢解釈の拠所としたものにほかならない。

しかし、いずれにしても、埋嚢のもつ歴史的意義は、すでに議論の余地が無い程まで解きつくされているわけではないのである。だから、この問題について、いささか私見を述べてみたい。

すなわち、六世紀ごろの日本を記した『隋書倭(倭)国伝』の次の短章に注目したい。

「婚嫁には同姓を取らず、男女相悦ぶ者は即ち婚を為す。婦、夫の家に入るや、必ず先ず火を跨ぎ、乃ち夫と相見ゆ」

の記事である。してみると古へには、花よめが婚家に入る際、家に入ると何よりもまず火をまたぐ習俗があったらしい。しかもこの習俗が、より確実に北方的色彩の濃厚なものであることを考え合わせる時、ひよっとすると埋嚢解釈の一助になるのではないかと考えるようになった。

要するに、前記胎盤葬説と同時に、いわば聖火燃焼址説とでもいうべきものを想定してみるのは如何なものであろうか。

(平松康毅)

参考文献

- 桐原健二：縄文中期に見られる埋嚢の性格について(古代文化 X VII II—3) 古代学協会 昭和四二年
- 木下忠二：戸口に胎盤を埋める呪術(考古学ジャーナル 42) ニューサイエンス社 昭和四五年
- 藤森栄一：縄文の八ヶ岳 学生社 昭和四八年
- 和田清・石原通博編訳：岩波文庫——隋書倭国伝 岩波書店 昭和五十一年(第三三刷)

図

版



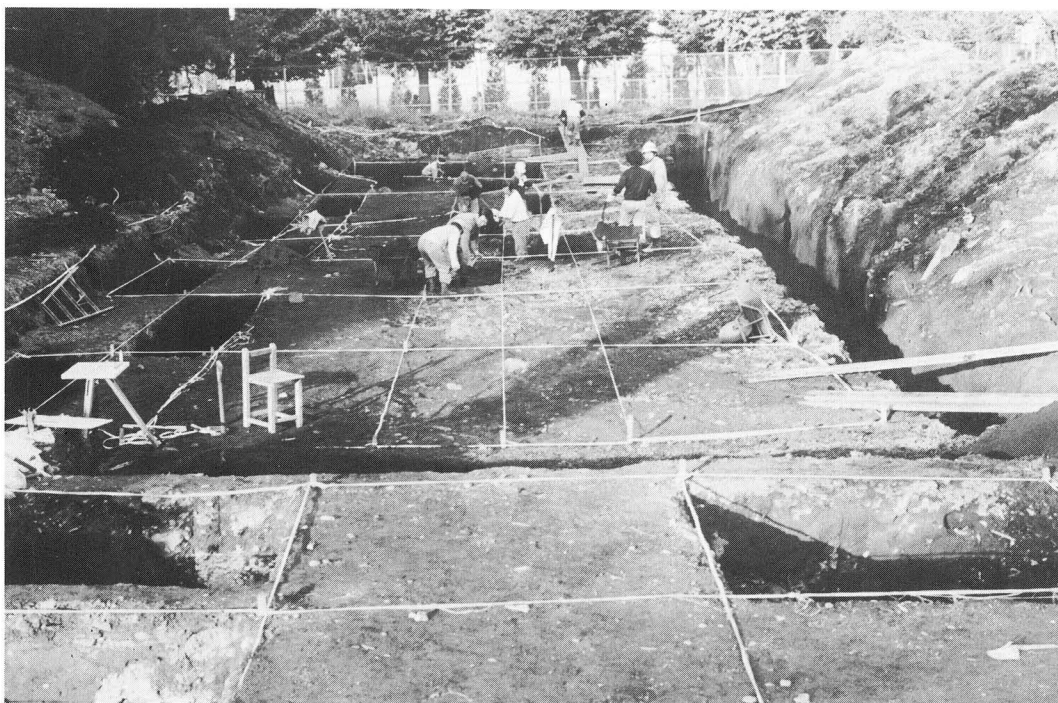
岩殿山頂より



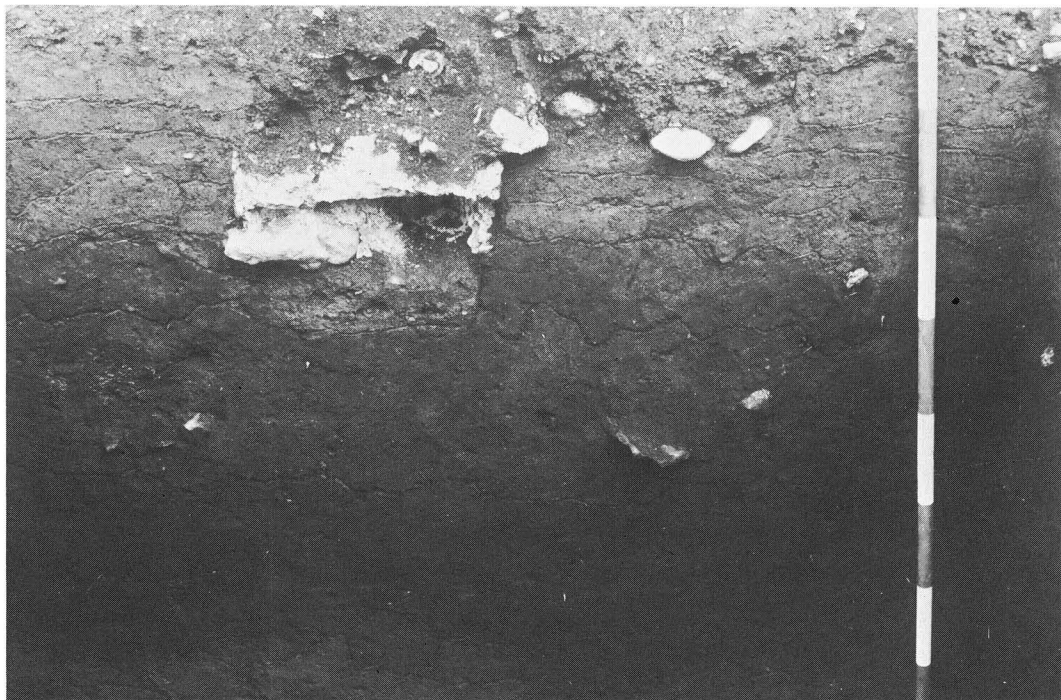
大月市民病院屋上より



(1)発掘区西側



(2)発掘区東側



(1)第 1 号住居址



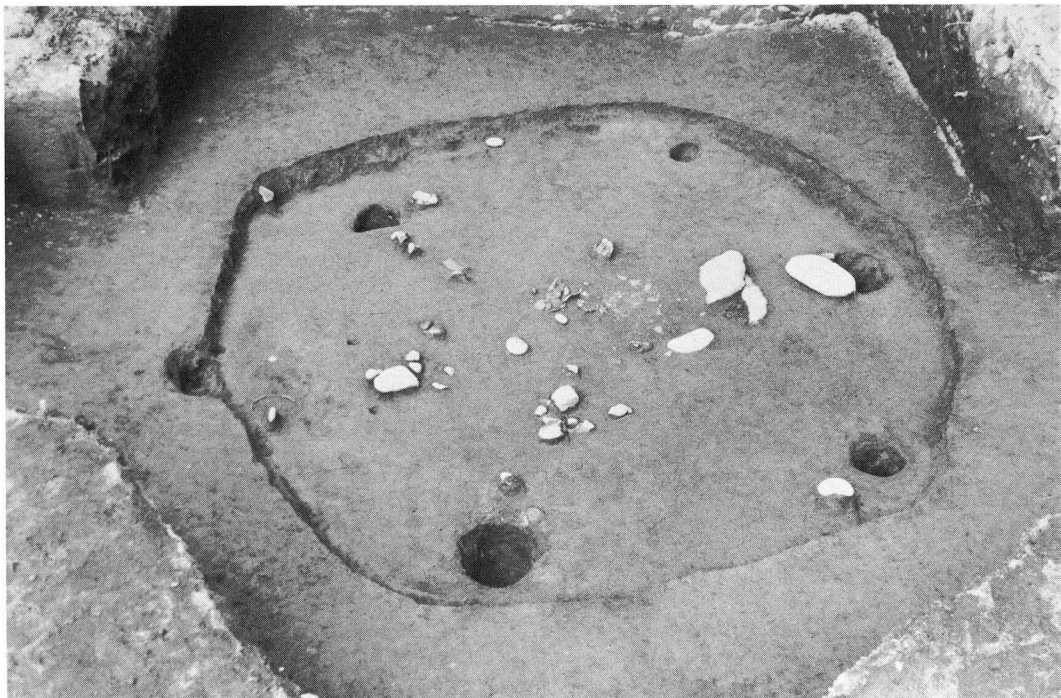
(2)第 2 号住居址



(3) 第 3 号住居址



(4) 第 4 号住居址



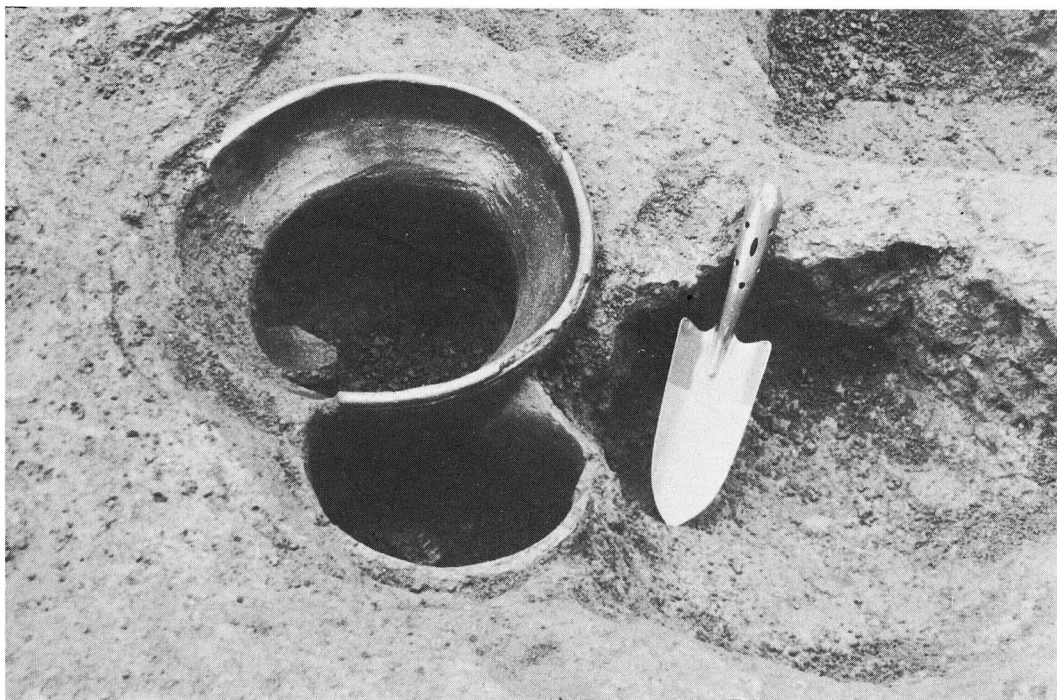
拡張後の状況 (1)



拡張前と拡張後の状況 (2)



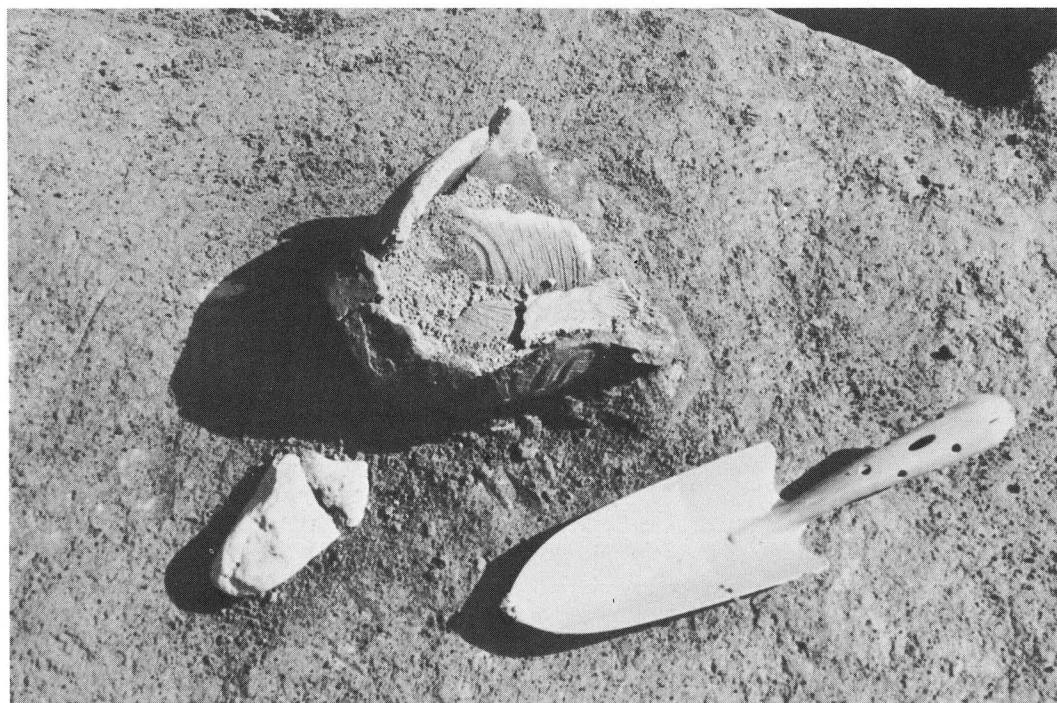
発掘前 (1)



発掘後 (2)



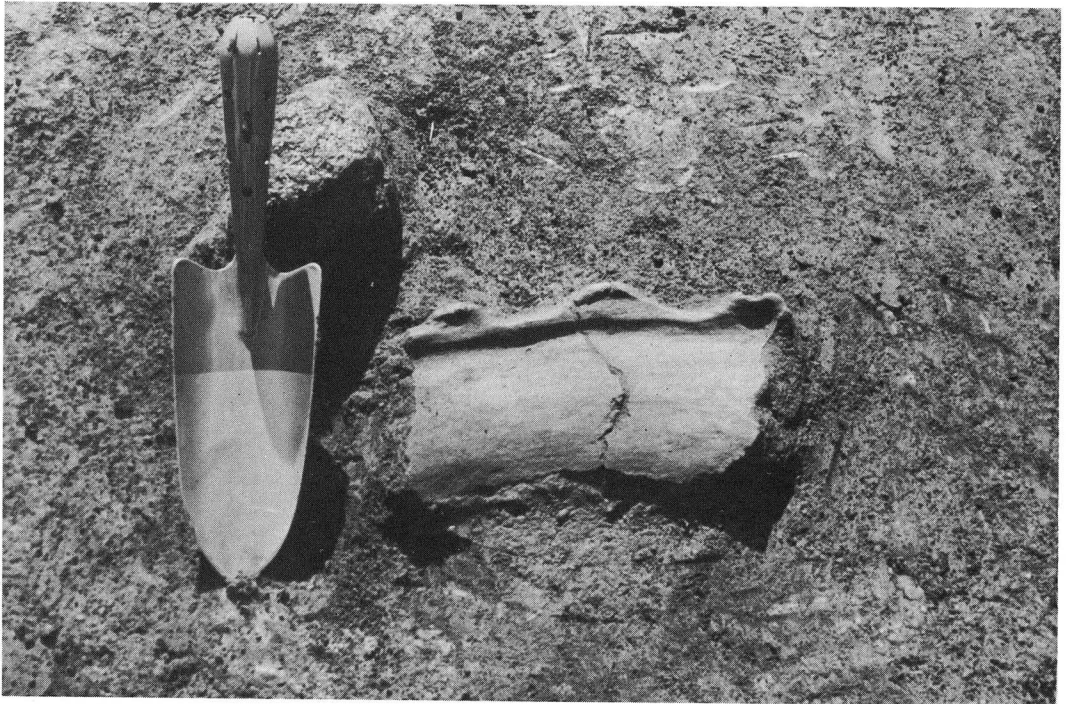
土器 No. 1



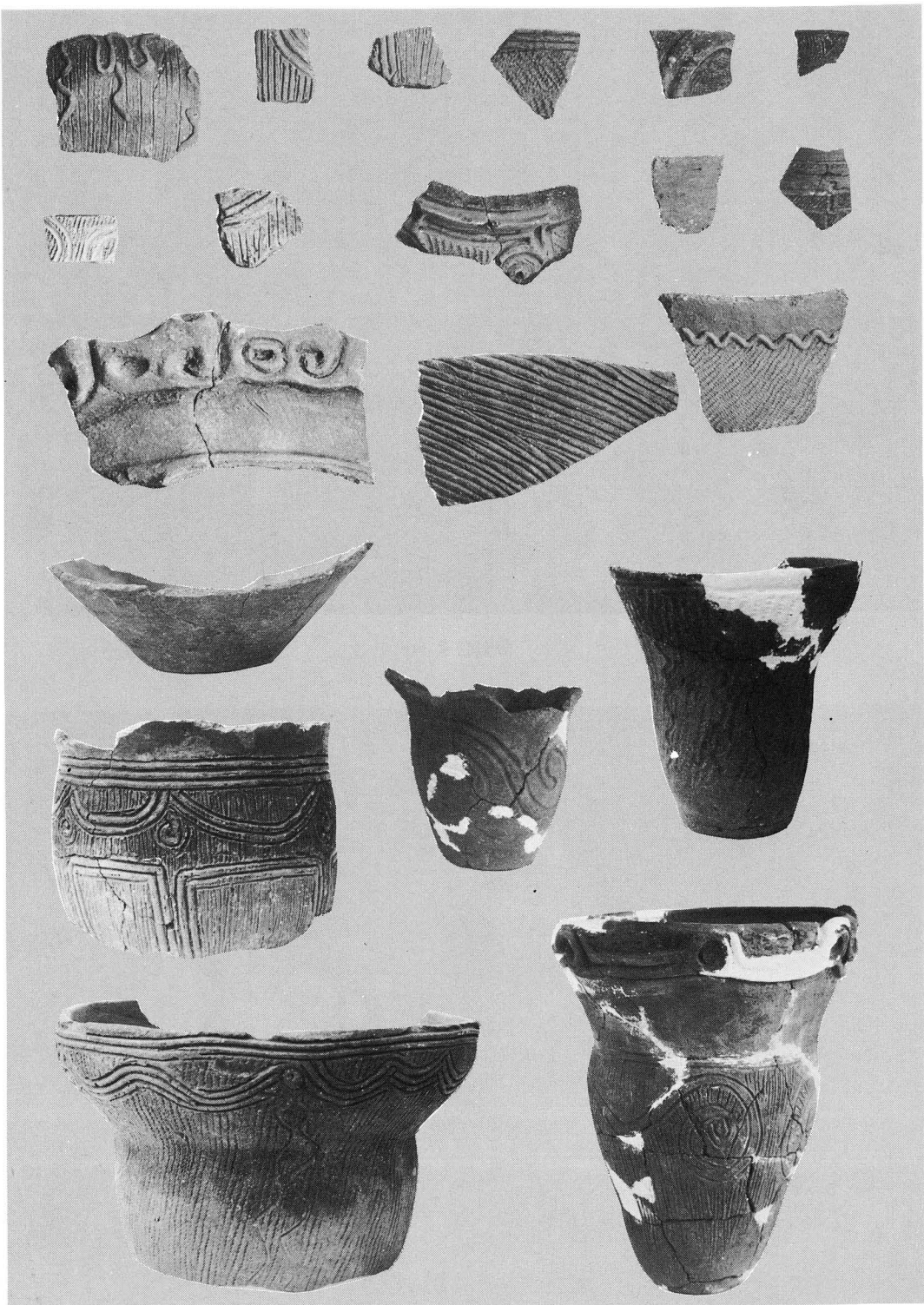
土器 No. 2



土器 No. 3



土器 No. 4



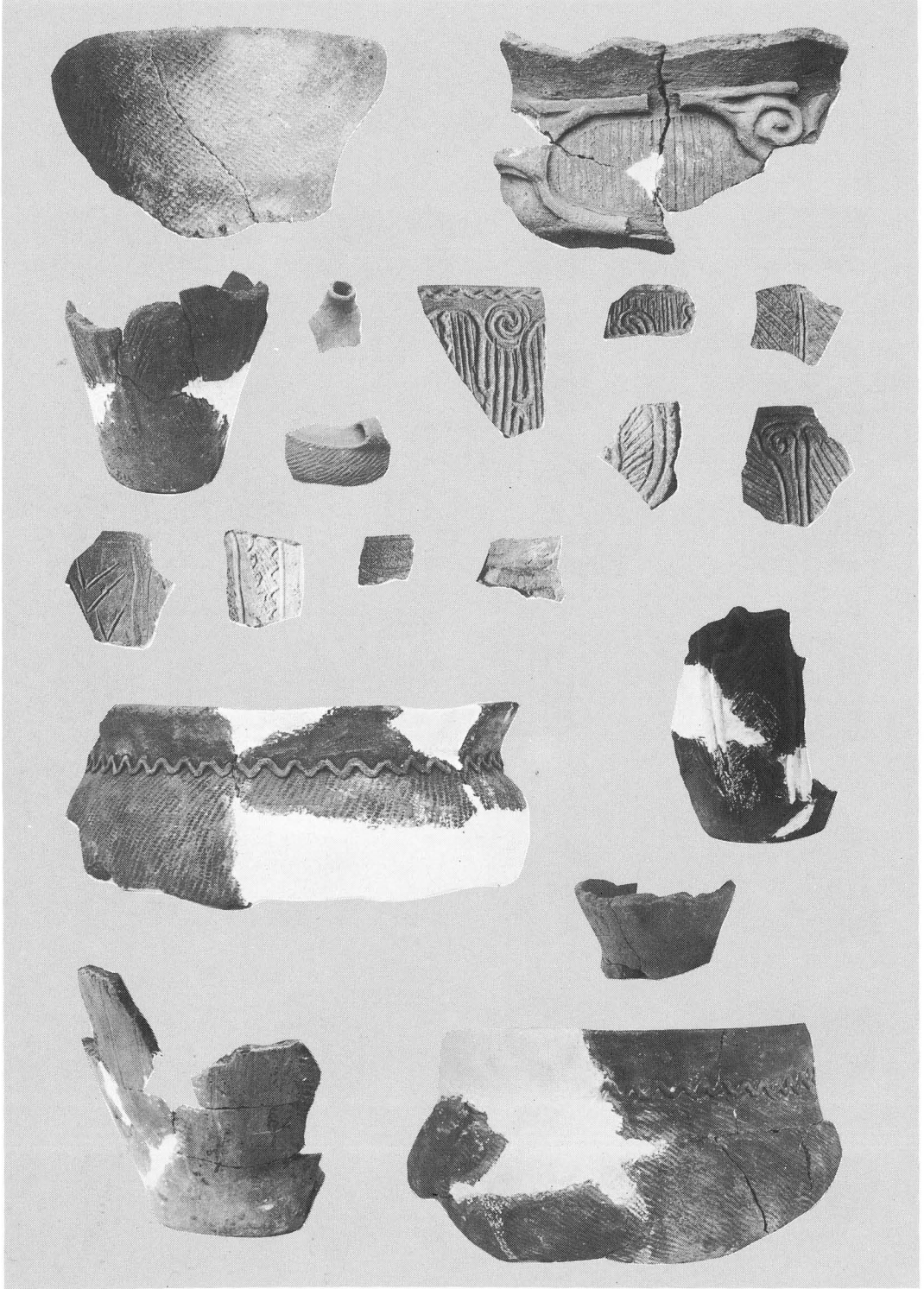
大月遺跡第1号住居址出土土器



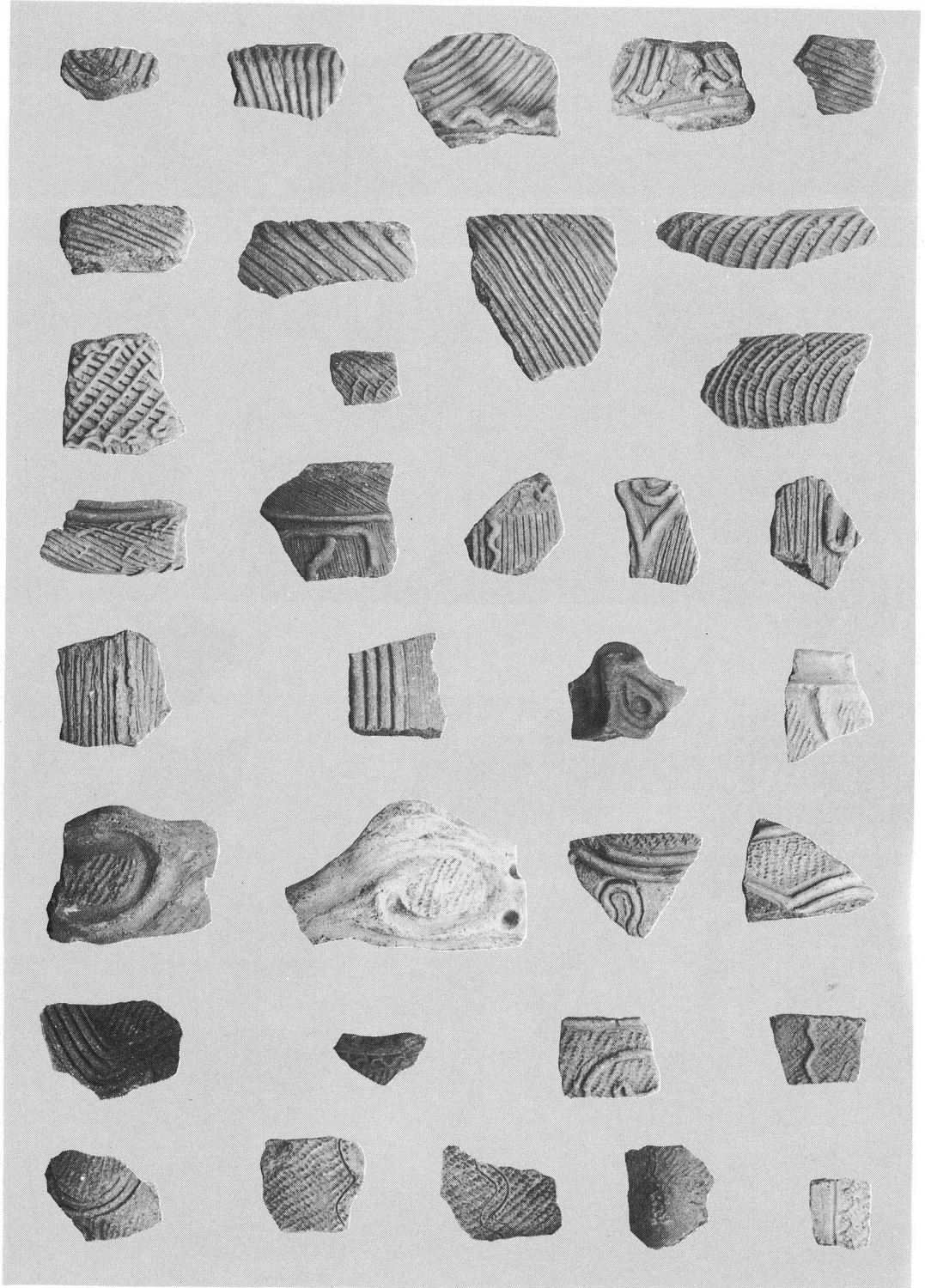
攪乱状況 (1)



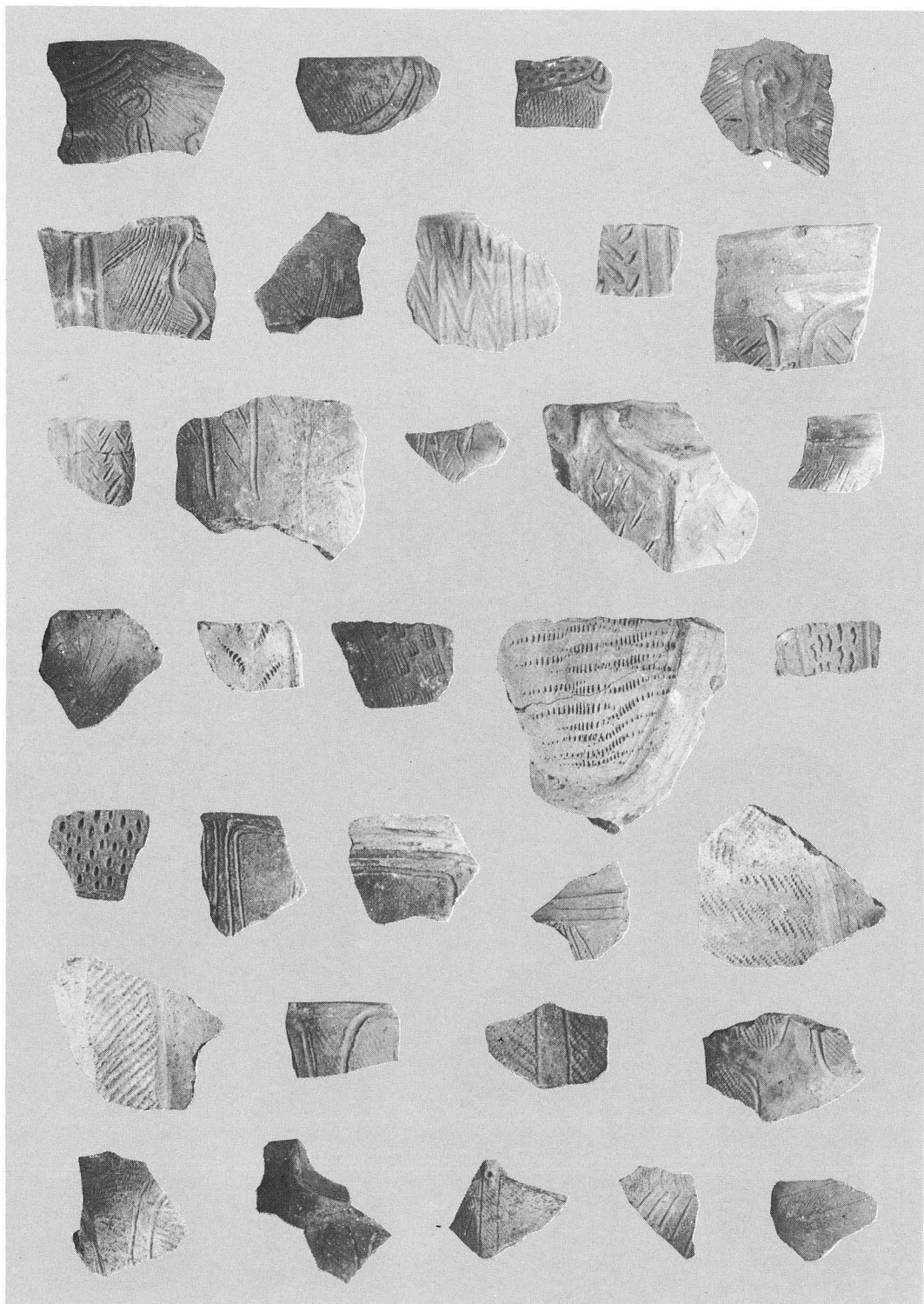
遺物出土状況 (2)



第2号住居址 (1~14) 各地区 (15~19)

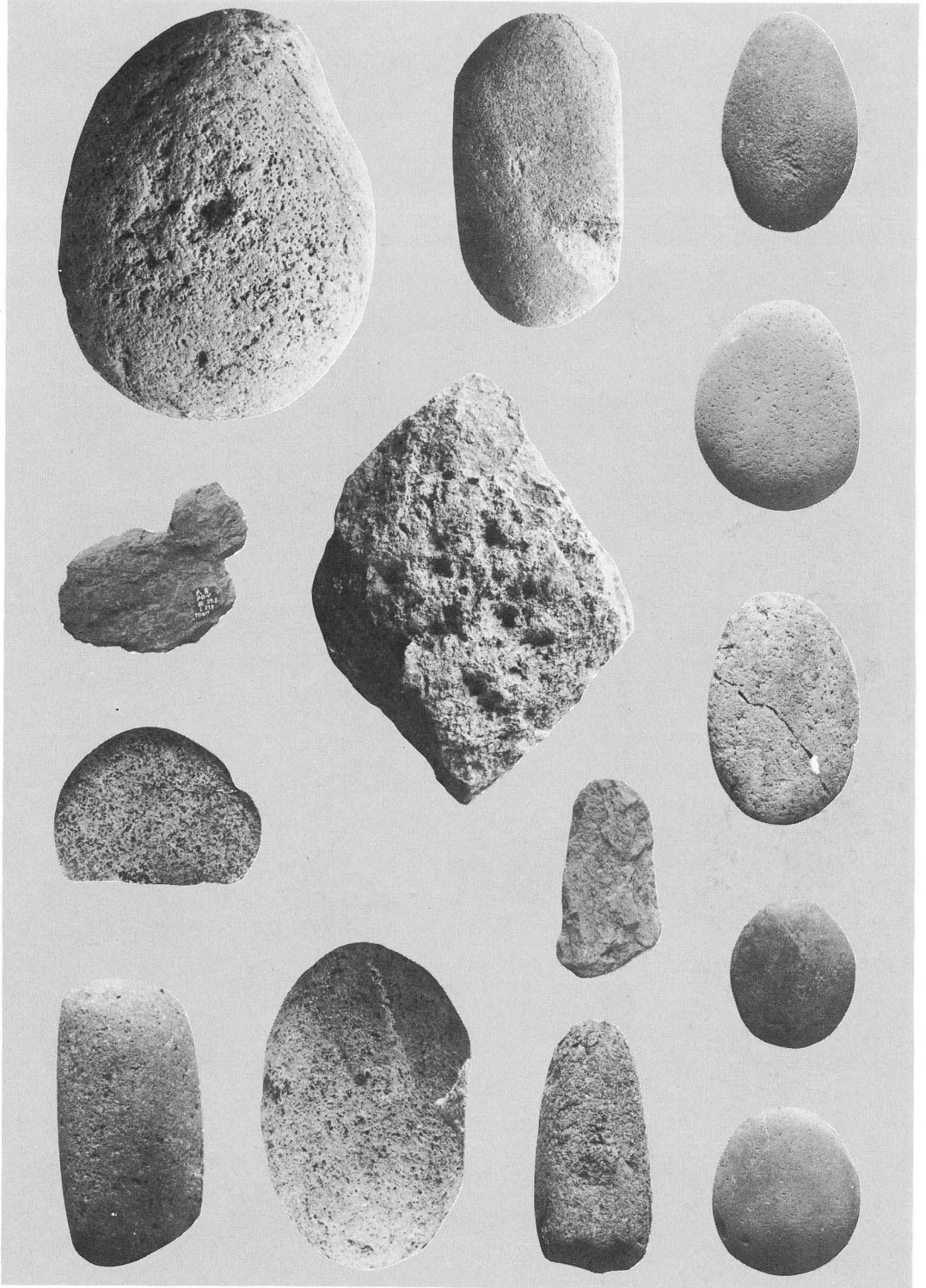


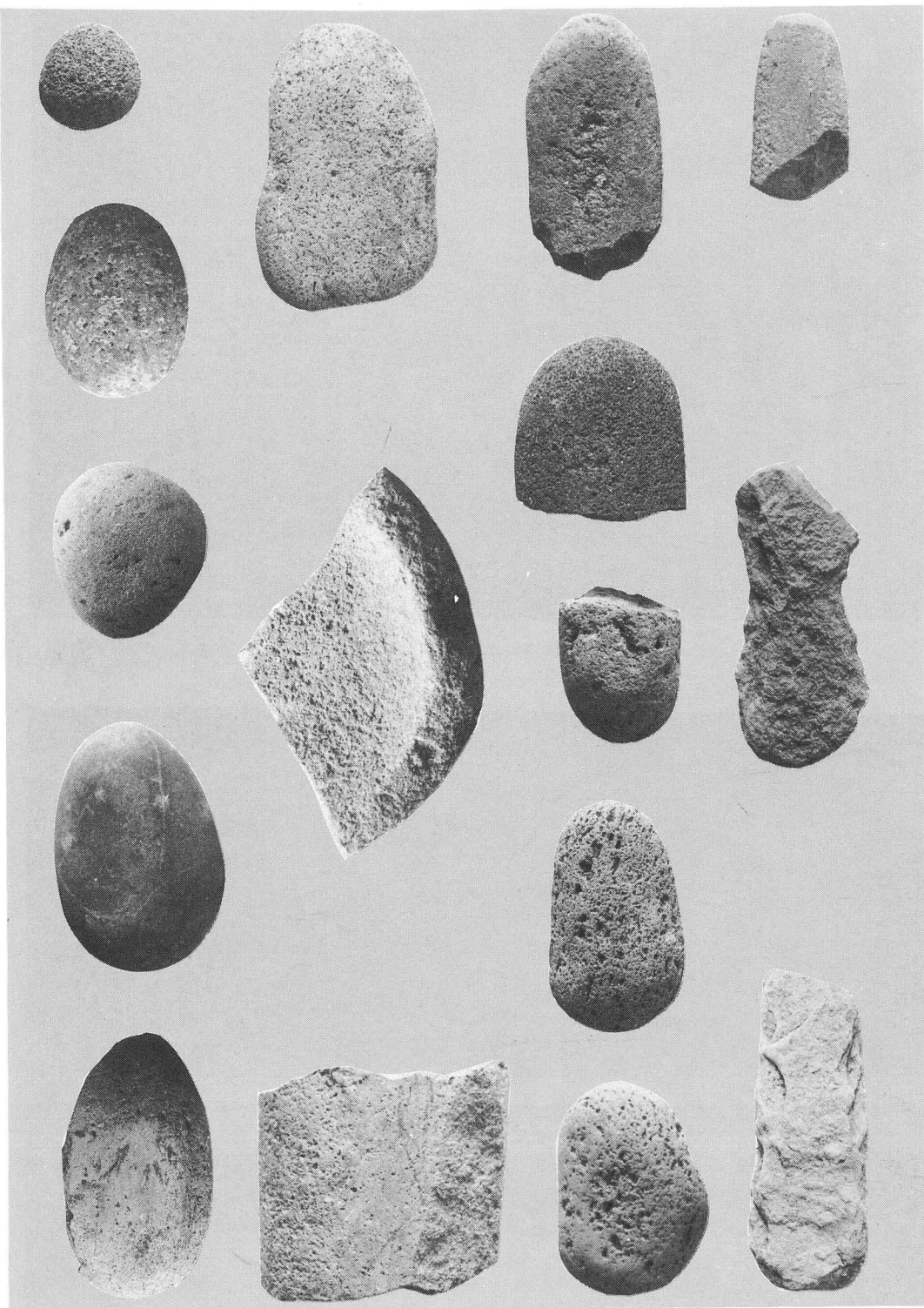
大月遺跡各地区出土の土器



大月遺跡各地区出土の土器

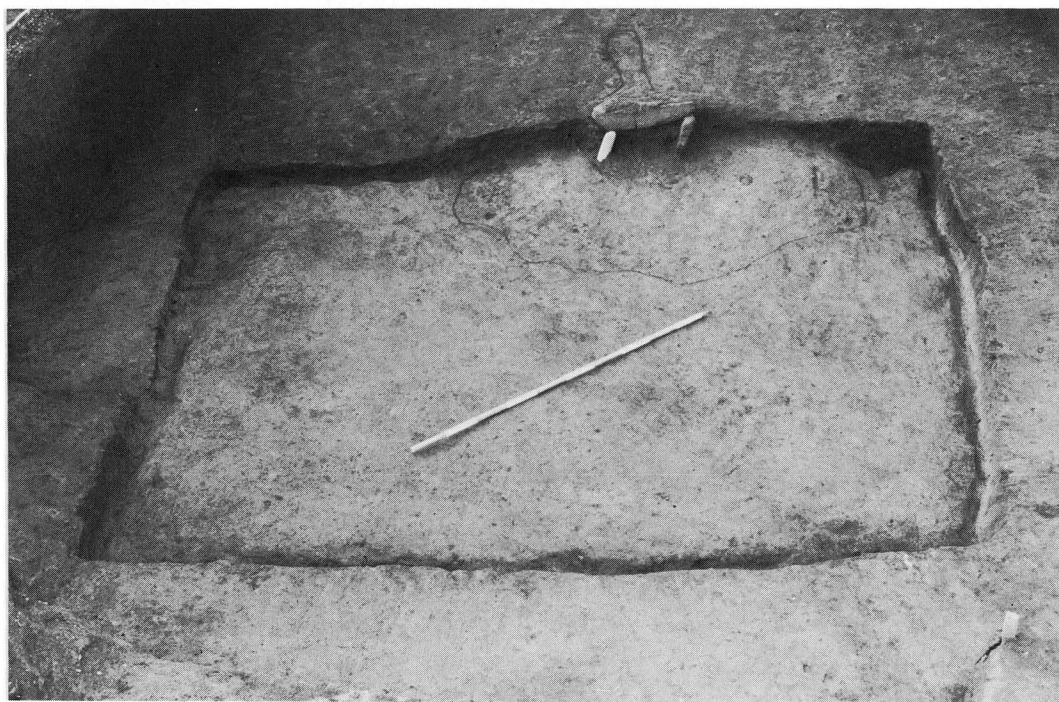
第一三圖版 大月遺跡第1・2号住居址出土石器



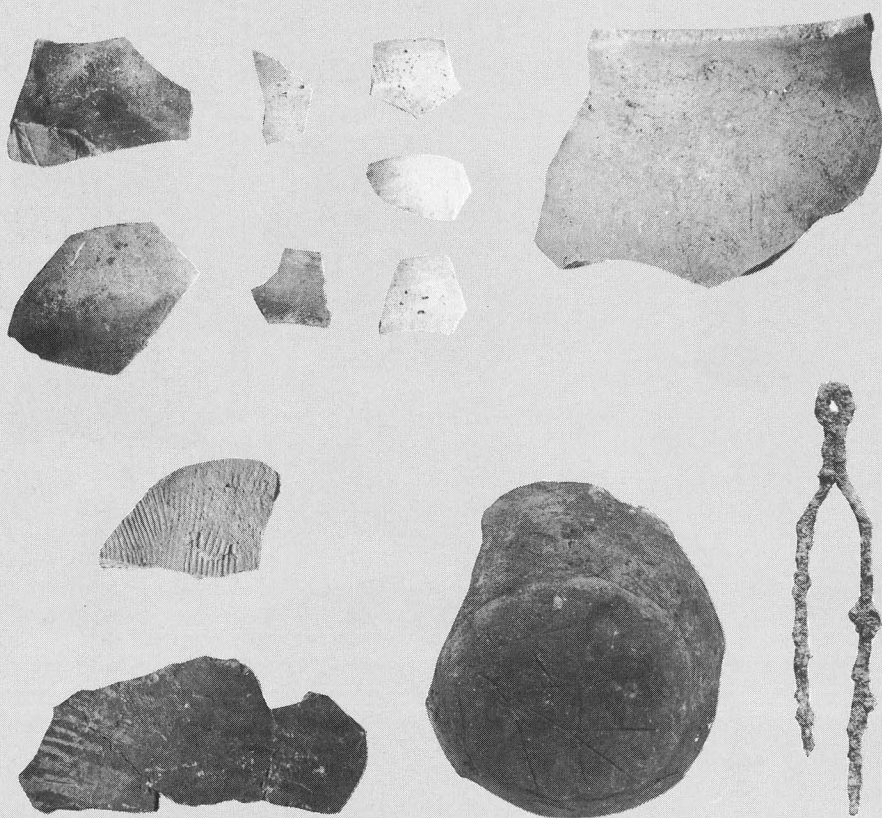
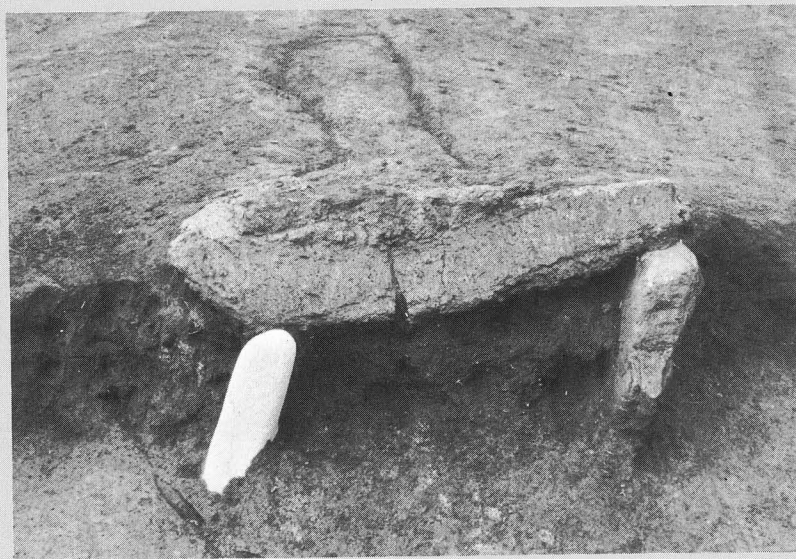




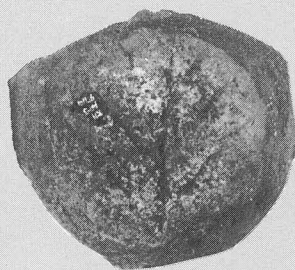
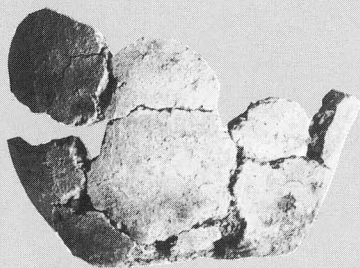
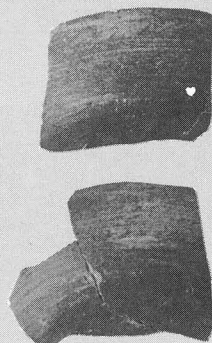
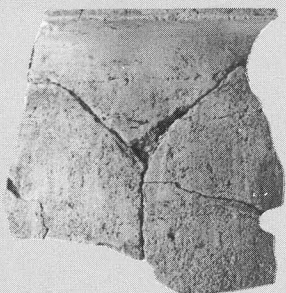
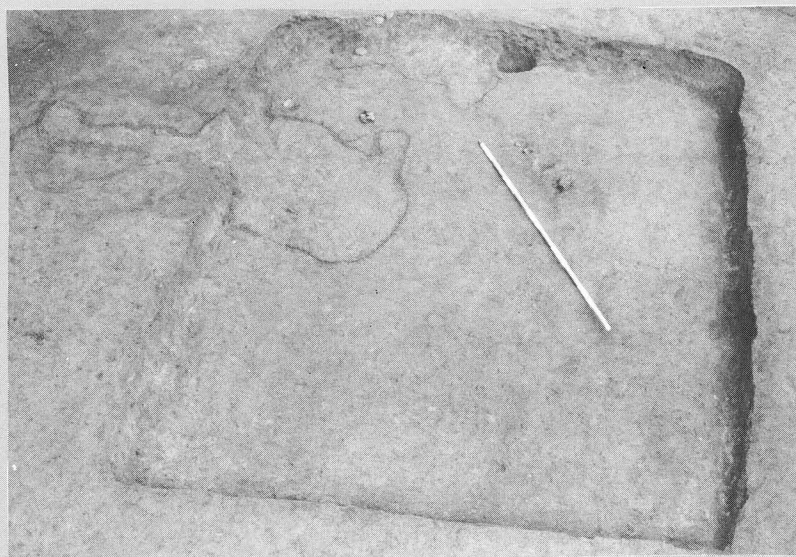
遺物出土状況 (1)



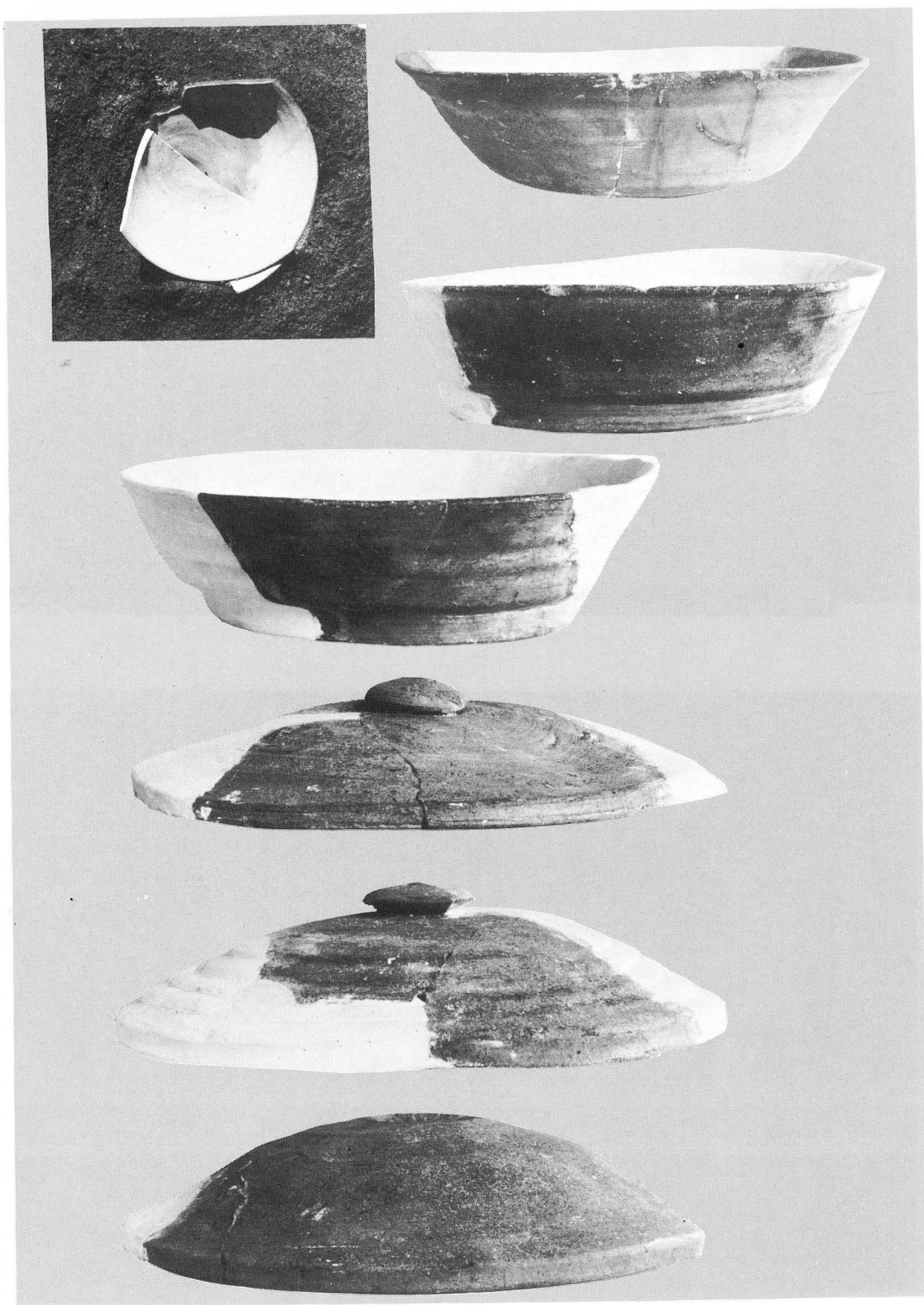
遺物取上後 (2)

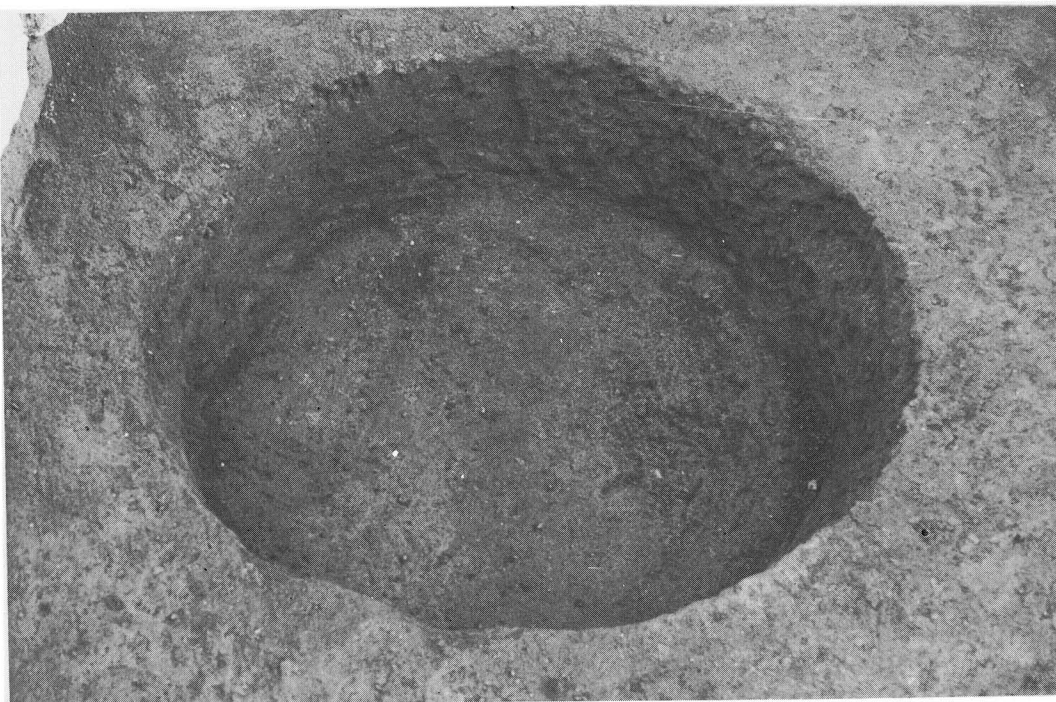


第一七四 大月遺跡第4号住居址・出土遺物

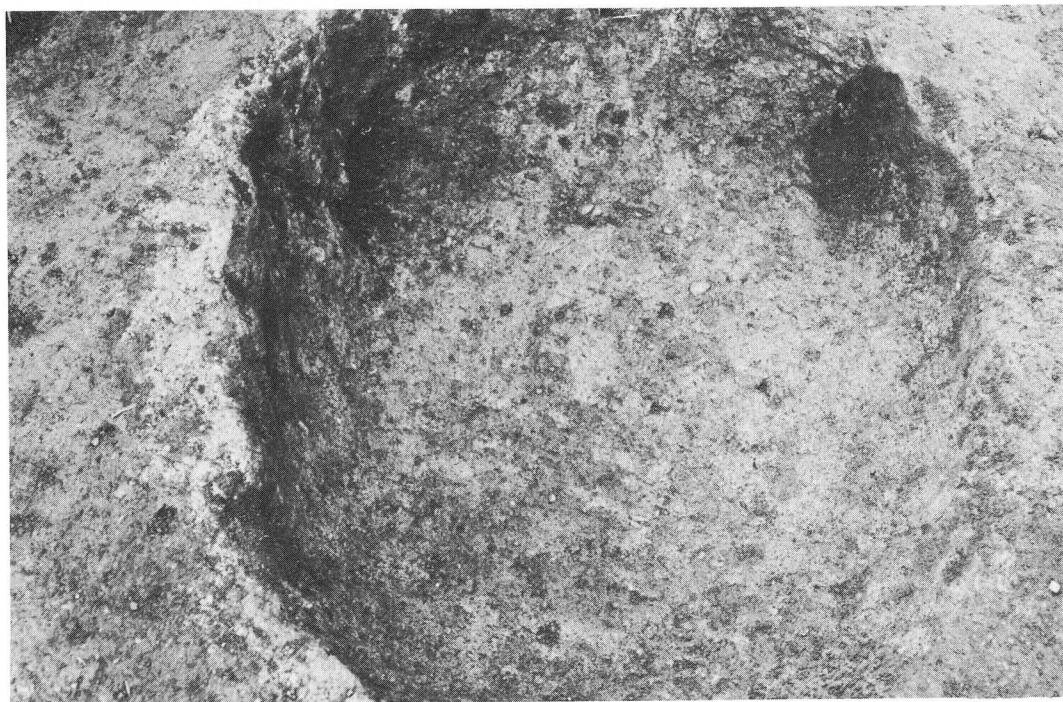


第一八四 大月遺跡第4号住居址・出土遺物





土坑 1



土坑 2

・発掘参加者



昭和五二年 三月二五日 印刷

昭和五二年 三月三一日 発行

山梨県
大月市
大月遺跡発掘調査(一九七四)報告書
(三〇〇部)

編著
平松康毅・田代孝・森和敏

発行所
山梨県教育委員会

印刷所
温故堂印刷株式会社

